

# 額田部氏の研究

畿内中小豪族の歴史

森公章

A Study of the Nukatabe Clan

はじめに

- ① 額田部氏とその系譜
- ② ヤマト王権との関係
- ③ 律令制下の額田部氏  
むすび

付 額田及び額田部氏関係史料集成（稿）

## 【論文要旨】

本稿は「額田寺伽藍並条里図」に描かれている額田寺と関係すると思われる額田部氏について、畿内の中小豪族の歴史とその存在形態を明らかにするという視点から考察を試みたものである。額田部氏はこの図に描かれている額田部丘陵を五世紀以来の本拠とし、六世紀頃に飼馬を以てヤマト王権に仕え、また額田部皇女の宮の運営・資養を担当する額田部の管理者として登場する。額田部皇女が推古天皇として即位するとともに、額田部氏も随使の郊勞など中央の職務分担に与り、飼馬の技術を生かした役割を果たしたりするが、基本的にはヤマト王権を構成する中小豪族として定着している。律令制下においても、中央の中下級官人や王臣家に仕えるなど、中央での地位は変化していない。と同時に、額田部氏は本拠地にも勢力を残し、大和国平群郡の譜第郡領氏族としての活動も有する。即ち、中央下級官人と在地での郡領の地位維持という二面性を保持していたと理解されるのである。この在地豪族としての額田部氏の

経済基盤となったのが、額田寺の存在とその寺領であった。畿外の郡領氏族とは異なつて、在地豪族としての力が弱い畿内の郡司氏族にとっては、寺院は精神面だけでなく、経営の一大拠点となり、この地域における額田部氏の勢力の存続を支えたものと思われる。

以上のような額田部氏のあり方の一般化を求めて、畿内の郡司氏族全般についても検討し、畿内郡司氏族は畿内の中小豪族として名代の管理者や職業部民の管理者などとしてヤマト王権の実務を支え、律令制下においても中下級官人として国家の日常業務を担う存在であり、同時に郡司として在地での勢力も保持しており、中下級官人と在地豪族の二面性を備えた存在であったことを確認した。この二つの側面は畿内の郡司氏族にとってともに重視すべき要素であり、両立を以てこそ畿内中小豪族たる彼らの存立基盤を確保することができたのである。

## はじめに

奈良県大和郡山市の額安寺に伝えられた古図「額田寺伽藍並条里図」(現在は国立歴史民俗博物館蔵)に「船墓(額田部宿禰先祖)」として登場する額田部連(『日本書紀』天武十三年十二月己卯条で宿禰)氏は、大和国平群郡額田郷を本拠とする畿内の中小豪族であり、「額田部」の姓が示すように、部民制以来ヤマト王権と関係を有し、さらに律令制下にも官人として活躍を続ける。従来、豪族の歴史といえば、葛城・大伴・物部・蘇我といった畿内の大豪族、秦氏、東・西漢氏のような渡来系氏族、あるいは地方豪族が目ざされ、各々の豪族研究が行われてきた。律令制下でも官人として枢要を占める豪族の動向がやはり中心的な検討材料となる<sup>1)</sup>。しかし、ヤマト王権以来、日々の政務の実務運営を支えたのは、そうした大豪族の下にあつて、日常的に細々と生きる中小豪族、中下級官人であつた。その意味では、こうした中小豪族の動向を考察することこそが、日常的な歴史の分析や地域としての畿内の特性の検討に資することができないかと思われる。

とはいふものの、従来の研究が大豪族に傾くのは、やはり中小豪族に関しては、史料の欠如という、文献史学の分析にとつて大きな制約が存するためであろう。そうした中で、額田部氏は、後述のように、ヤマト王権以来の奉仕と律令制下での律令官人あるいは平群郡の郡司として活躍する史料があり、近年出土した長屋王家木簡の中にも長屋王家との関係を窺わせるものが見えるというように、様々な側面から検討が可能であるという好条件を有している。また「額田寺伽藍並条里図」の分析から、立体的にこの氏のあり方、古墳築造、氏寺造営、所領の形成、交通路の把握、本拠地付近の景観等、を描くこともできると期待される。氏寺たる額田寺の檀越としての額田部氏の様相も、この氏の豪族的あり方

を考察する上では重要な材料となろう。

そこで、本稿では、この額田部氏の検討を通じて、ヤマト王権以来朝廷を支えた畿内中小豪族の動向を探り、また畿内郡司氏族の様相を考える事例とすることができればと思う次第である。

## ① 額田部氏とその系譜

額田部氏の由来、ヤマト王権との関係や額田部の本義については、額田および額田部のつく豪族をどのように理解するかという点と密接に関わる問題である。額田部の本義や額田部氏の職掌に関しては次章で述べることにし、まず額田および額田部のつく豪族とその系譜が判明するものを整理すると、次のようになる(紀は『日本書紀』、記は『古事記』、姓は『新撰姓氏録』)。

天津彦根命系…額田部連(紀)、額田部湯坐連(記、姓〔左京神別下・

河内国神別)、額田部(姓〔左京神別下)、額田部河

田連(姓〔大和国神別))

神魂命系 明日名門命系…額田部宿禰(姓〔右京神別上)、額田部麿

玉(姓〔右京神別上)、額田部(姓〔摂津

国神別))

角凝魂命系…額田部宿禰(姓〔摂津国神別))

平群系…額田首(姓〔河内国皇別)、紀氏家牒

伊香我色雄命系…額田臣(姓〔山城国神別))

諸蕃系…額田村主(姓〔大和国神別、逸文〔東漢氏))

以上の中で、角凝魂命は「新撰姓氏録」山城国神別・税部条に「神魂命子角凝魂命之後也」とあり、明日名門命系の右京神別上・額田部宿禰条には「明日名門命三世孫天村雲命之後也」とあつて、明日名門命は他に見えないが、天村雲命を「豊受太神宮禰宜補任次第」の天牟羅雲命と

同じとすれば<sup>③</sup>、これも神魂命の子孫であるので、両者は同系ということになる。額田部宿禰が両系に分かれるのも不思議であるので、以上の角凝魂命と天村雲命の系譜から、両者は一系統のものと考え、これらを神魂命系とまとめておきたい。次に天津彦根命系の額田部連については、『古事記』の系譜との比較、および宿禰賜姓に与った額田部連の子孫額田部宿禰が『新撰姓氏録』では天津彦根命系に全く見えないことなどから、『湯坐』を省略ないしは落としたものか、あるいは編纂時の誤りで、『古事記』の系譜に合致させた方がよい旨が指摘されている。この見解に従えば、天津彦根命系の額田部連はないことになり、その方が『新撰姓氏録』とも合致し、額田部連（宿禰）は神魂命系にまとめるのがよいかもしれない。但し、額田部連と額田部湯坐連・額田部河田連といった複姓氏族との関係如何を考える場合には、やはり同じ天津彦根命系に額田部連があることは意味のあることとなり、また記紀に額田部連の始祖伝承が全くなくなってしまうのも不審な事柄であるから、そのような始祖伝承が存した時代の反映と見ることもできると思う。したがってこの点についての系譜の考察は今ほ保留しておきたい。

さて、上掲の整理を通覧すると、額田部+カバネと額田+カバネのものは、各々系譜を異にすることに気付く。後者についていえば、額田村主などは額田という土地と関係した命名であって、前者の額田部との密接な関係とは由来が異なることが予想される。額田の地名も元来は額田部と記されていた可能性はあるが、やはりヌカタという地名に密着した呼称といえよう。<sup>⑤</sup>とすると、額田部+カバネの一群と額田+カバネの一群については、額田部氏に関する考察において、自ずと区別する必要があることを窺わせるのではあるまいか。律令制下の史料であるが、近年出土した一条大路木簡には、

・二門下 川合 額田部額田 右六人常食給申  
高 白髪部

八月廿一日

(二六八)・三一・三〇一九

などであり（『平城宮発掘調査出土木簡概報』二四―二三頁。以下、城二四―一三のように略す）、額田部と額田は明確に区別されている。

以上の点から、額田・額田部を冠する豪族で、畿内に居住していたものは、次のように整理することができよう。

#### I 額田部+カバネ

神魂命系 …… 額田部宿禰（平安京、摂津）、額田部毳玉（平安京）、

額田部（摂津）

天津彦根命系 …… 額田部連、額田部湯坐連（平安京、河内）、額田部

（平安京）、額田部河田連（大和）

#### II 額田+カバネ

平群系 …… 額田首（河内）

伊香我色雄命系 …… 額田臣（山城）

諸蕃系 …… 額田村主（大和）

平安京居住の額田部関係の氏については、平安時代になって本貫を移した可能性があり、元来山城国に居住していたものではないと考えるので、その本貫地の考究も必要である。

そこで、以下では個々の系のものについて、その系譜や氏人、居住地等の検討を行い、額田部氏の研究の基礎作業としたい。まず史料の少ないII系統のものから考察を始め、本題たるI系統の額田部氏の究明へと順序をとる。

#### 1 額田+カバネ

II系統に属するのは、額田首、額田臣、額田村主であり、ここではこの三氏について検討を加える。

##### (1) 平群系額田首

平群系額田首の系譜を示す史料としては、次のものがある。

a 『新撰姓氏録』河内国皇別・額田首条

早良臣同祖、平群木兔宿禰之後也。不尋父氏、負母氏額田首。

b 『紀氏家牒』

平群真鳥大臣弟、額田早良宿禰家平群県額田里、不尋父氏、負母氏カ、姓額田首。

aはbを簡略にしたものと考えられ、本来平群氏の血筋の者が、母氏姓により額田首を名乗ったとするものであり、bの額田早良宿禰の家があった「平群県額田里」は大和国平群郡額田郷を指すものと思われる。

『紀氏家牒』には「額田早良宿禰男、額田駒宿禰、平群県在馬牧、枳駿駒養之、献天皇。勅賜姓馬工連、令掌飼。故号其養駒之处曰生駒」(又云、額田駒宿禰男、「馬工御機連。」と記されており、bの額田首の祖額田早良宿禰の子額田駒宿禰は平群県に存した馬牧を管理し、ヤマト王権に馬を貢上して馬工連賜姓に与ったとの話が見え、生駒の地名の由来が示されている。生駒は平群郡の郷名としては見えないが、生駒山は神武東征説話にも登場する(『書紀』神武即位前紀戊午年四月甲辰条)。神武の一行は龍田越えて河内から大和に入ろうとしたが、道路狭嶮のため断念し、膽駒山越えて大和に入ろうとしたところ、孔舎衛坂(現東大阪市日下町の山麓地帯から草香山の北部を越える坂路に比定)で長髓彦に遮られて進入できなかつたという。ちなみに、孔舎衛坂の戦の際、大樹に隠れて難を免れた人がいたので、この地を母木邑と称したとあり、『書紀』継体二十四年九月条には河内母樹馬飼首御狩が見えるので、生駒山西麓の一带には馬牧に適した土地が存したと考えられる。aの額田首は河内国を本貫とするものであり、河内国河内郡額田郷が本拠地と推定される。母木邑は東大阪市豊浦町(河内郡豊浦郷の地)、額田郷は同市額田町に比定され、額田首が本拠とする生駒山西麓の河内郡には馬牧の存在と飼馬に従事する人々が生活していたことが窺われるのである。

さて、話を平群系額田首に戻すと、この氏は母系は河内郡額田郷を本

拠とする額田首、父系では平群氏につながる。『書紀』武烈即位前紀には「由是太子欲往期処、遣近侍舍人、就平群大臣宅、奉太子命求索官馬。大臣戲言陽進曰、官馬為誰飼養、隨命而已。久之不進。」と、平群氏に関しても「官馬」飼養に与っていたことを窺わせる記事が存する。先掲の『紀氏家牒』にも平群県の馬牧の存在が記されており、生駒山東麓にも馬牧に適した土地があったと考えられる。この生駒山東麓の馬牧を管理していた平群氏の一族の者が、大和と河内を結ぶ街道たる生駒山を挟んで、西麓の馬牧付近に居住する氏族と通婚することは充分に想定可能であり、a・bの系譜にもこのような生駒山の東・西の交流が反映されていると理解したい。

ちなみに、『書紀』朱鳥元年九月丙寅条の天武天皇の殯宮儀礼の中では、「倭・河内馬飼部造」が誄を行ったとあり、馬牧管理に従事する者が、天皇に直属する一部署として重視されていたことが知られる。職員令左馬寮条集解古記所引官員令別記には、左馬寮飼造三三六戸・馬廿三〇二戸、右馬寮馬廿造戸二四〇戸・馬廿二六〇戸が見え、延喜左右馬寮式の飼戸は、

左馬寮…山城国六烟・大和国四〇烟・河内国一〇八烟・美濃国三烟・尾張国九烟

右馬寮…右京職三烟・山城国五烟・大和国四九烟・河内国五一烟・摂津国一六烟・美濃国三烟

とある。この中では大和および摂津を含めた旧河内地域が卓絶しており、別記においても同様の状況であったと推定され、大和・河内の馬飼の伝統が保持されていることが窺われる。

倭馬飼部造に関しては、特に地名を冠した例はない。その活躍には新羅使の引導・馬丁(『書紀』允恭四十二年十一月条)、遣多禰島使の大使(天武八年十一月己亥条)、上宮王家討滅軍の將軍(皇極二年十一月丙子朔条)などの事例があり、外交・軍事面での活動が知られる。一方、河

内馬飼部造は、次のような地名を冠する例がある。河内（川内）馬飼部造、河内母樹馬飼首、沙羅々馬飼造（『日本書紀』中卷四一話に「更荒郡馬甘里」、菟野馬飼造（『書紀』欽明二十三年七月条「更荒郡鵜野邑」）。河内は河内郡河内郷を指すとも理解されるが、母樹は先述のように河内郡内に比定され、沙羅々・菟野はいずれも讃良郡であり、以上は生駒山西麓の地（現東大阪市・寝屋川市）に属する。また『書紀』継体二十四年九月条の「河内母樹馬飼首御狩」は同二十三年四月条には「河内馬飼首御狩」と記されており、河内馬飼部造は生駒山西麓の馬牧を管理する氏族の総称であつた可能性が考えられる。その活躍事例としては、淡路島での狩獵従駕（履中五年九月壬寅条）の他、任那に渡つた近江毛野の倭人（継体二十三年四月・九月条）、穴門館修治の工匠（欽明二十二年是歲条。この修治者は「遣問西方無<sub>レ</sub>礼使者之所<sub>レ</sub>停宿処也」と新羅使を脅迫した）などがあり、馬の飼養・従駕だけでなく、やはり外交・軍事面での活動や工匠としての才など、多様な形態をとる。また畿外の有力者たる即位以前の継体と旧知であつた河内馬飼首荒籠の存在が知られ（継体元年正月丙寅条、幅広い通交圈を持っていたことも窺われる<sup>10</sup>）。

以上、河内馬飼部造については、いくつかの地名を冠する馬飼がいるが、それらはいずれも生駒山西麓の地であり、こうしたいくつかの馬飼の総称が河内馬飼部造ではなかったかと考えた。倭馬飼部造に関しては、そうした地名を冠する例がないので、その本拠地は不明であるが、大和の馬牧の伝承は平群郡の地に多く、あるいは生駒山東麓の馬牧を管理した者こそ、倭馬飼部造ではなかったかと推定される<sup>11</sup>。とすると、額田首は、倭・河内馬飼部造と密接な関係を有した地に居住しており、平群氏の官馬飼養伝承や平群系の馬工連の存在と合せて、地縁・血縁の双方で馬の飼養とも関係が深かつたのではないかと考えてみたい。額田首の祖額田早良宿禰から馬工連氏が出ているのは故あることであつたのである。なお、『書紀』仁賢六年是歲条には高句麗から来た工匠須流枳・奴流枳

は「今倭国山辺郡額田邑熟皮高麗」の先祖であるとあり、これは大和国に関する話であるが、乗馬とも関連する皮革製品の技術者がいたことが知られ、生駒山東麓の馬牧の存在と大いに関係があつたのではないかと推測される。

以上、平群系額田首については、生駒山東・西麓に存した馬牧での馬飼養とも深いつながりを有した氏族ではないかと考え、合せて倭・河内馬飼部造との関係、この地における馬飼の伝承に触れた。この点は本題たる額田部氏のあり方やその本拠地の歴史的品格を考える際にも重要になると思われ、後に再度言及することにした。額田首の氏人としては、まず八世紀初の人足、千足が掲げられる。この二人は名前、活躍年代から見て、父子、兄弟などの近親者ではなかったかと考えられるが、人足は遣新羅副使（『統紀』大宝三年十月癸未条。和銅五年正月戊子条で正六下↓従五下）、千足は明經第二博士（養老五年正月甲戌条）と、外交、明經など開明的な分野に優れた人材を出したことが窺われる。あるいは多方面にわたる活躍を有する馬飼の伝統が存する地の出身という背景があつたのかもしれない。その他、河内国河内郡から平安京左京五条三坊に移貫した式部位子額田首咩人（『統後紀』承和十三年九月辛亥条）は、額田首が河内国河内郡額田郷を本拠として、律令官人として出仕していたことを物語る。木簡史料に見える額田氏については後述するが、嘉祥三年三月二十二日尾張国符案（『平安遺文』九七号）には大目額田首が見え、国司として活躍する者もいたようである。

## （2）伊香我色雄命系額田臣

額田臣の系譜は、『新撰姓氏録』山城国神別・額田臣条に「伊香我色雄命之後也」と見えるもので、物部系の氏族ということになる。氏人の例は知られず、「額田」の氏名は大和国平群郡額田郷の地名に基づくとする見解があるが、延久四年九月五日太政官牒（『平安遺文』一〇八三号）に

は石清水八幡宮護国寺宮寺の所領として山城国相楽郡に額田村が見えるので、山城国の額田臣はこの額田村の地名に拠ったもので、相楽郡の豪族と見ることが可能であろう。なお、『書紀』欽明三十一年条の相楽館という対高句麗外交の拠点建設と関連づけて、大和国平群郡額田郷を本拠とした額田部連氏の展開を説く意見もあるが、額田、額田部氏をⅠ・Ⅱの二つの系統に区分して考える本稿の立場からは従い得ない。

山城国相楽郡額田村（現京都府精華町大字北稻八間）を本拠としたと考えられる額田臣に関しては、額田の地に拠った物部系の豪族であったこと以外には不明である。カバネも臣であり、本題たる額田部連との関連性は薄いと見たい。

### （3）諸蕃系額田村主

額田村主の系譜は、『新撰姓氏録』大和国諸蕃・額田村主条に「出自三  
呉国入天國古也」と見えるが、『新撰姓氏録』逸文を含む坂上系図に、東漢氏の祖阿知使主とともに渡来した人々の中に額田村主があるので、東漢氏系と考えることができる。先述の『書紀』仁賢六年是歳条の「山辺郡額田邑」の地名に基づいた姓氏呼称であり、この地に置かれた漢人の管掌者であったとの見解が示されており、氏人の事例はないが、『統紀』天平十六年十月辛卯条道慈卒伝に見える「法師俗姓額田氏、添下郡人也」の額田氏を額田村主に比定できるのではないかとされる。熊凝寺を額田寺に比定する説（『聖德太子伝私記』下）から、道慈は額田寺建立に関わったと見る意見もあるが、この比定には問題があるとされる。彼は大宝度の遣唐使に従って入唐留学しており、当時の留学生には渡来系氏族の者が多かったという一般的傾向と、「額田」氏の名称からすると、額田村主氏出身の可能性が高いのではないかと思われる<sup>15</sup>。

以上、額田村主は「山辺郡額田邑」を本拠とした渡来系氏族であることを見た。「山辺郡額田邑」を含む額田の地の広がりについては後述する

が、とすると、額田郷の地の特色として、額田村主、あるいは仁賢紀の「額田邑熟皮高麗」という皮革技術に優れた人々（職員令大藏省条集解所引職員令別記の皮革関係の狛人の一つか）など、渡来系氏族が居住する地という点を付け加えることができよう。後述のように、これら皮革技術者が額田部連氏の配下にあった可能性があり、添下郡の額田氏（額田村主カ）出身の道慈もその族的関係で額田寺に関与したという事態は想定できるかもしれない。

### （4）額田国造

先の系譜整理では取り上げなかったが、Ⅱの例として額田国造姓がある。以下に説明するように、畿外に存したものであるため、系譜整理では言及しなかったが、これも額田+カバネの氏であるので、Ⅱ系統の検討の最後に、この額田国造に触れておきたい。

額田国造は、『国造本紀』の淡海国造と三野前国造の間に、「額田国造。志賀高穴穂朝御世、和通臣祖彦訓服命孫大直侶宇命定賜国造。」と見える。その本拠地については、郡名に唯一額田を冠している参河国額田郡とする説（額田関係の地名は後掲の表1参照）、地名はないが、近江国東端部の坂田郡付近とする説もあるが、美濃国池田郡額田郷説が有力であろう<sup>16</sup>。これは『国造本紀』の配列と、美濃国池田郡額田郷という近江と美濃の国境付近の地名の存在とに依拠した立論で、その蓋然性は高いと考える。

この額田国造の氏人としては、九世紀前半の著名な明法家額田国造今足がおり、『三代実録』貞観四年八月是月条の「明法博士額田今人」も今足の誤りとされるので、この今足が唯一の例となる。彼は天長三年十月十五日の公定の律令注釈書編纂を求める誓願までは額田国造姓として現れるが、同六年正月戊子条（『類聚国史』巻九九）で外従五位下から従五位下昇叙に与った時には額田宿禰と記されているので、この間に宿禰を賜姓されたものと推定される。

以上でⅡ系統の額田+カバネの諸氏についての検討を終える。これらはいずれもそれぞれの額田の地を本拠とした豪族であった。大和国平群郡額田郷や「山辺郡額田邑」についてはその地域的特色にも言及したが、この点はⅠ系統の額田部氏について考える際に、改めて取り上げたい。

ところで、Ⅱ系統の額田氏は、当該地のみに勢力を持ち、本拠地以外での関連する氏人を見出すことができないという特色を有する。畿外の額田氏としては、額田国造以外に、神護二年九月日越前国足羽郡司解〔大日本古文書〕五―五四四―五四五〕に野田郷戸主と見える額田国依があるが、越前国には額田部の分布があり（表1）、これは「額田部」の省略形とも考えられる。また額田氏ととるにしても、足羽郡には額田郷があるので、やはり額田氏は本拠地以外には勢力を持っていなかったことを窺わせる一例となろう。この点は次に検討するⅠ系統の額田部+カバネとは大きく相違し、額田部の方は全国的に分布しており（表1）、Ⅱ系統の諸氏とは性格を異にする氏であったことが予想される。

## 2 額田部+カバネ

Ⅰ系統に属するのは、神魂命系の額田部宿禰、額田部毬玉、額田部、天津彦根命系の額田部連、額田部湯坐連、額田部河田連、額田部の諸氏である。これらのうち、額田部宿禰は『書紀』天武十三年十二月己卯条で額田部連が賜姓されたものであるから、元来は額田部連であった。したがって両系には額田部連（宿禰）と額田部が分かれて属していることになる。本章の冒頭で触れたように、天津彦根命系の額田部連の系譜には問題が存するが、二つの所伝があるということは、Ⅰ系統の額田部連、額田部がいたのか、あるいはどちらかの系譜が何らかの目的で作られたのかといったいくつかの可能性を考慮しておく必要があることを示唆していよう。そこで、二つの系にとらわれることなく、以下では額田部連（宿禰）、額田部は各々一括して説明し、Ⅱ系統の氏を考え得るか否か、

そうした点にも留意して、検討を加えることにしたい。

### （1）額田部連（宿禰）

額田部連（宿禰）の系譜を示すのは、次の四つの史料である。

a 『書紀』神代上宝鏡開始第三の一書

次天津彦根命、此茨城国造・額田部連等遠祖也。（下略）

b 『新撰姓氏録』右京神別上・額田部宿禰条

明日名門命三世孫天村雲命之後也。

c 『新撰姓氏録』山城国神別・額田部宿禰条

明日名門命六世孫天由久富命之後也。

d 『新撰姓氏録』摂津国神別・額田部宿禰条

同神（角凝魂命カ）男五十狹経魂命之後也。

これらのうち、b―dは本章冒頭で整理したように、神魂命系の系譜となる。したがって額田部連には天津彦根命系と神魂命系の二つの系譜が存したことになるが、aは『書紀』であり、九世紀初の成立である『新撰姓氏録』が一致して神魂命系とするのと、対照的な様相を呈していると言えよう。また「はじめに」で触れたように、「額田部連」に額田部宿禰の先祖の墳墓の所在が見えるので、大和国平群郡額田郷こそ額田部連の本拠と考えられるが、『新撰姓氏録』では大和国に全く額田部宿禰（連）が見えないのも不審である。宿禰姓の額田部氏は額田部連しか例がなく（額田部河田連の宿禰呼称例については後述）、宝字年間頃の成立とされる「額田部連」の存在から見て、奈良時代においても大和国平群郡額田郷が額田部連（宿禰）の本拠地であったと思われる。後述のように、十世紀の史料にも平群郡司として額田部氏者が見えており、『新撰姓氏録』に窺えるように、<sup>②</sup> 律令官人として活躍する額田部宿禰が平安京に本拠を移してから、依然平群郡額田郷に留まる者がいたのである。

『新撰姓氏録』序文には、「唯京畿未進并諸国且進等類、一時難<sub>レ</sub>尽、闕而不<sub>レ</sub>究」とあり、畿内一八二氏の中にすべての氏が網羅されていた訳ではなかった。郡司・土豪として大和国に残った額田部宿禰は系譜を進めなかった可能性もあり、また額田部宿禰は平安京に本貫を移したものととして顧慮されなかったという事態も想定される。大和国に額田部宿禰が記されていない理由として、以上のような憶説を呈してみたい。

次に問題なのは、天津彦根命系と神魂命系という二つの系譜の存在である。本章冒頭で述べたように、aの『書紀』の系譜も捨て難く、また九世紀の平安京移貫時に神魂命系の系譜に変更したという可能性も勘案したいと考える。この問題は額田部湯坐連や額田部河田連との関係をどう考えるかという見解とも関わっており、ここでは結論をさらに保留し、この二氏の検討に進みたいと思う。なお、額田部連(宿禰)氏の氏人については次章以下で詳述することにし、ここでは省略する。

## (2) 額田部湯坐連

次に複姓の額田部として、額田部湯坐連と額田部河田連があり、まず額田部湯坐連から取り上げる。その系譜を示すものとして、次の史料が掲げられる。

### a 『古事記』 天安河の誓約段

次天津日子根命者へ凡川内国造・額田部湯坐連・茨木国造・倭田中直・山代国造・馬来田国造・道尻岐閑国造・周芳国造・倭滝知造・高市県主・蒲生稻寸・三枝部造等之祖也。(下略)

### b 『新撰姓氏録』 左京神別下・額田部湯坐連条

天津彦根命子明立天御影命之後也。允恭天皇御世、被<sub>レ</sub>遣薩摩国、平<sub>二</sub>隼人<sub>一</sub>、復奏之日、献御馬一匹、額有<sub>二</sub>町形廻毛<sub>一</sub>。天皇嘉<sub>レ</sub>之、賜<sub>二</sub>姓額田部<sub>一</sub>也。

### c 『新撰姓氏録』 河内国神別・額田部湯坐連条

天津彦根命五世孫平田部連之後也。

系譜は天津彦根命系で一致しており、『新撰姓氏録』では三枝部連、奄智造、高市連、凡河内忌寸なども同祖とあるので、a以来一貫性のある系譜が存したことがわかる。その本拠地に関しては、b・cには平安京と河内国が掲げられているが、平安京への移貫を想定して、河内国の可能性が高いと考える。bの貢馬伝承は次の額田部河田連と合せて検討するので、そちらに譲るが、先に平群系額田首の項で見たように、生駒山の西麓は馬牧の地としての立地条件を備えていたようであるから、この額田部湯坐連も河内国河内郡額田郷を本拠地としたのではないかと推定される。

また「湯坐」を冠することからは、この氏は額田部連のうちでも、特に皇子女の養育という職掌を有したと考えられる。<sup>23</sup>職掌に基づく複姓の例は多数あるので、額田部湯坐連の氏名の由来を以上のように推定すると、額田部連や額田部の職掌を考える上で興味深いが、この点は次章で検討したい。

次に氏人としては、『書紀』大化五年三月甲戌条の蘇我倉山田石川麻呂の謀反に坐して殺戮された者として、額田部湯坐連某が見え、蘇我氏とのつながりが知られる。ただ、この事件で額田部湯坐連が断絶したのではなく、<sup>25</sup>『統紀』勝宝六年閏十月庚戌条で外従五位下から従五位下に叙された額田部湯坐連息長、『統後紀』承和七年正月甲申条で正六位上から外従五位下に叙された長吉などの例があり、中下級の律令官人として活躍する者が続いたことが窺われる。

## (3) 額田部河田連

額田部河田連の系譜に関わるのは、次の史料である。

### a 『新撰姓氏録』 大和国神別・額田部河田連条

同神(天津彦根命)三世孫意富伊我都命之後也。允恭天皇御世、献額



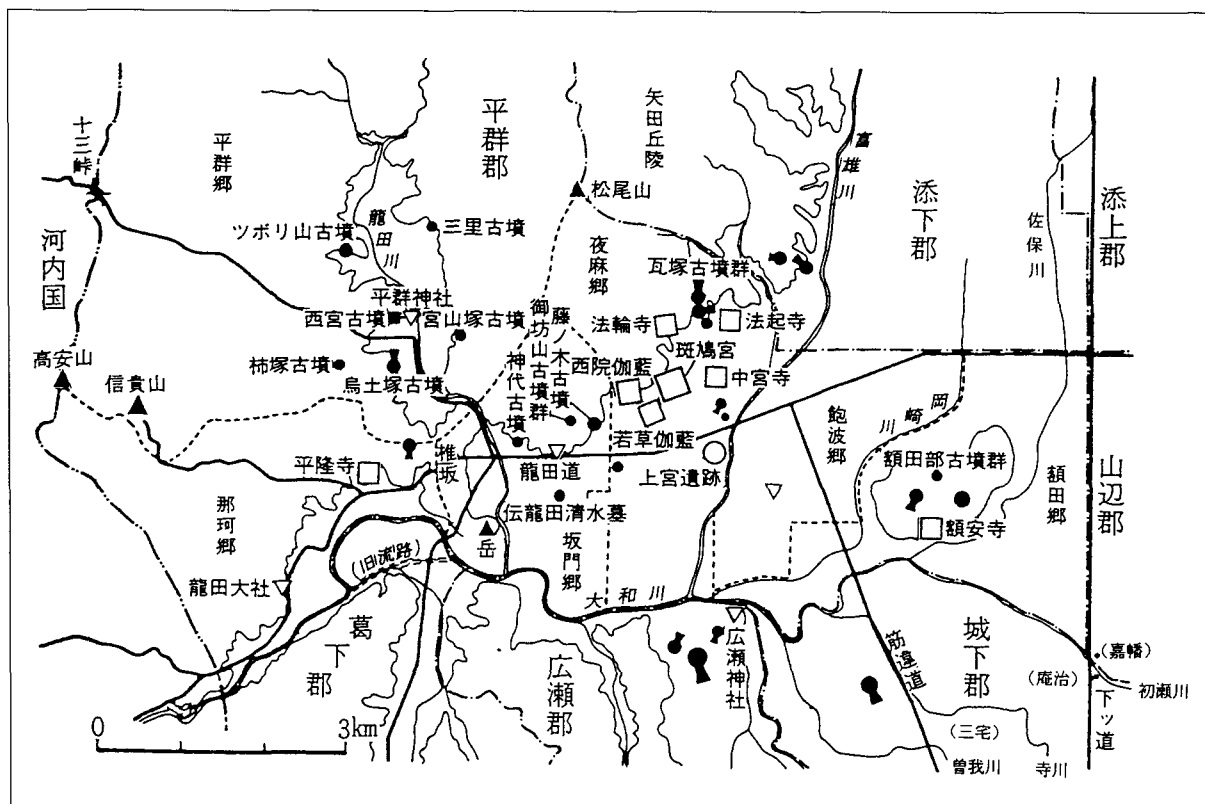


図1 大和国平群郡額田郷とその周辺  
 (辰巳和弘『地域王権の古代学』  
 <白水社、1994年> 106頁図18に加筆)

田馬。天皇勅、此馬額如田町。仍賜姓額田部連也。

b 『統紀』天平宝字二年七月己丑条

正六位上額田部宿禰三當(中略)並外從五位下。三當本姓額田部川田連也。是日、以額田部宿禰姓、便書一位記賜之。

a は「額田部湯坐連同祖、天津彦根命十四世孫達己呂命之後也」という三枝部連に続いて掲げられたものであり、額田部河田連が額田部湯坐連と同族で、天津彦根命系の系譜を持つことを示している。この額田部河田連については、「河田」は「皮工(かわた)」の意で、仁賢紀に登場する額田邑の熟皮高麗などの工匠を配下に置いたことから来る名称ではないかという見解が呈されており、この見方を支持すれば、複姓の額田部連はいずれも職掌に基づく呼称ということになる。但し、仁賢紀の「山辺郡額田邑」は現在の天理市嘉幡町(旧嘉幡村)に比定され(『奈良県の地名』平凡社、一九八一年)、「河田」に関連する地名が存する(図1参照)。この嘉幡の南には『日本書紀』中巻第三三話に鏡作造が居住したとある菟知村に比定される庵治の地名があり、この地域はこうした手工業者が集住する場所であったと考えられ、皮革関係の技術者を統括した額田部河田連が本拠地とするのに相応しい土地ではなかったかと思われる。なお、『新撰姓氏録』大和国神別に額田部河田連と同祖とある菟智造の本拠地はやはり庵治の地に比定されるから、額田部河田連の本拠地をこの地域に想定する傍証となる。したがって嘉幡の地名については、当初皮革関係の技術者を統括する額田部河田連が居住したので額田邑と称し、その後「河田」の方が地名として残ったと理解したい。

ところで、『新撰姓氏録』では額田部氏のうち大和国に記されているのは、この額田部河田連だけであるが、その本拠地は額田部連(宿禰)の本拠地平群郡額田郷とはやや離れたところにあったと考えられる。ここで先に奈良時代以降も平群郡額田郷を本拠地としたと考えた額田部連(宿禰)との関係や系譜が問題となる。b の額田部河田連三當の宿禰所稱の

時期と「額田寺伽藍並条里図」の成立時期の近接から、「船墓（額田部宿禰先祖）」の注記をこの額田部河田連の手によるものと見なし、『書紀』天武十三年条で宿禰賜姓に与つたのは別系統の額田部連、即ち前掲の額田部連の系譜のうち、dの摂津国所在のものであったと理解して、天津彦根命系と神魂命系の二系統の額田部連（宿禰）の存在の問題を解決しようとする意見が呈されている<sup>27</sup>。しかし、三當の額田部宿禰所稱は正式な賜姓を被つてのことではなく、「便書位記」と便宜的なものであったようである。また『新撰姓氏録』には同系の額田部宿禰の記載はなく、額田部河田連を本姓とする額田部宿禰が成立したとは考え難い。むしろ便宜的とはいえ、宿禰所稱が認められたのは、額田部河田連が額田部連（宿禰）と同族であると認識されていたためであつて、奈良時代における天津彦根命系の額田部連（宿禰）の存在を推定させるのではあるまいか。額田部河田連はあくまでも「山辺郡額田邑」を本拠としたのであつて、平群郡額田郷を本拠とする額田部連（宿禰）とは一応区別すべきであるという立場を強調しておきたい。なお、このように額田部連一族の居住地を律令制下の平群郡よりも広い範囲で考えることができるとすれば、律令制下の平群郡額田郷成立以前の額田の地の広がりは何であつたか、即ち額田部連一族の支配領域はいかほどのものであつたという点を考慮しておく必要があると思われる。この点については後に在地豪族としての額田部氏について考察する際に論究することにした。

ちなみに、aや額田部湯坐連の項のbは、額田部氏が額田の馬と呼ばれる馬の貢上に与つていたことを物語る。ただ、その伝承に基づく氏名の由来は、額田部連の来歴を説明するものではないが、額田部河田連や額田部湯坐連の来由を示すものではないことに注意したい。試みに『新撰姓氏録』を繙くと、複姓氏族の場合、左京皇別上・膳大伴部、阿倍志斐連、右京皇別上・巨勢槭田朝臣、摂津国皇別・韓矢田部連、左京神別上・中臣志斐連、左京神別下・竹田川辺連、河内国神別・櫛多治比宿禰

など、いずれも複姓部分の由来が説明されており、例外は左京神別下・湯母竹田連くらいである。勿論、現存の『新撰姓氏録』は原型を伝えたものではないという条件はあるが、額田部河田連、額田部湯坐連の由来が額田部連の来歴にしかなくなっていないことは、そのような所伝を有した同族、即ち天津彦根命系の額田部連（宿禰）が存したことを窺わせるものと見なしたい。なお、額田部河田連や額田部湯坐連には奈良時代後半以降も五位に達した者がいるが、後述のように、額田部連（宿禰）にはその事例がない。あるいは先に憶測したように、額田部連（宿禰）が神魂命系の系譜を称する中で、律令官人としての地位やbの三當の額田部宿禰所稱の事例から、河田・湯坐の人々が額田部連（宿禰）の本来の伝承を継受したとも想定される。

以上、額田部連（宿禰）が大和国平群郡額田郷を本拠とするものであり、額田部湯坐連・額田部河田連と同族であつたという立場に立つと、このような系譜解釈もできるのではないかとこのことで、私見を述べた。大和国平群郡額田郷を本拠地とする額田部連（宿禰）、「山辺郡額田邑」の額田部河田連、河内国河内郡額田郷に拠つた額田部湯坐連の存在、いずれもが額田の馬貢上に与つたとの伝承を有することは、生駒山東・西麓の馬牧の立地と合せて、額田部氏の活動を考える上で興味深く、また皇子女養育にあたる湯坐の存在も重要である。これらの点については、次章で改めて検討することにした。

#### （4）額田部賜玉

『新撰姓氏録』右京神別上・額田部賜玉条に「額田部宿禰同祖、明日名門命十一世孫御支宿禰之後也」とあり、額田部連（宿禰）の同族で、神魂命系とされる額田部賜玉氏が存在が知られる。この氏の氏人は見えなく、賜玉を称する例も『統紀』勝宝二年七月甲辰条に摂津国の賜玉大魚

売があるくらいで、本拠地・職掌ともに不明である。

毬玉の用例としては、出雲国造神賀詞の中の「倭大物主櫛毬玉命」や神名帳伊豆国那賀郡毬玉命神社があり、額田部氏の一族のうち、毬玉の製作・貢進に従事した毬玉（部）の伴造氏族であったことに基づく命名であるとする指摘があり、これに従うならば、額田部連（宿禰）の職掌を考える一つの材料を付加することができよう。

## （5）額田部

最後に額田部について整理する。その系譜は次の通りである。

a 『新撰姓氏録』左京神別下・額田部条

同命（明立天影命）孫意富伊我都命之後也。

b 『新撰姓氏録』摂津国神別・額田部条

額田部宿禰同祖、明日名門命之後也。

これらのうち、a は額田部湯坐連条「天津彦根命子明立天御影命之後也」、三枝部連条「額田部湯坐連同祖」、奄智造条「額田部湯坐連同祖」に続く記載であり、「同命」を天津彦根命とすると、額田部河田連の項のa にも見える意富伊我都命と世系が合わないもので、上記のように解される<sup>①</sup>。したがって額田部にも天津彦根命系と神魂命系の二つの系譜が存することになる。その名称から考えて、額田部は額田部連（宿禰）の配下にあった部氏と見なされ、『新撰姓氏録』でも左京神別下・額田部湯坐連、右京神別上・額田部宿禰、そして、摂津国神別・額田部宿禰と、額田部は額田部連とともにあったということができる。額田部連（宿禰）が後に神魂命系を称した可能性については先に触れたが、神魂命系を称するのは額田部連玉、額田部と、いずれも額田部連の配下にあったと考えられる人々である。とすると、額田部に二つの系譜が存するのは、額田部連にも正しく天津彦根命系の系譜が存在したことを物語るものであり、同様に神魂命系が後出したことを示すものではあるまいか。

なお、ここで額田、額田部関係の地名や人名の分布を掲げておく（表1）。先に指摘したように、畿外に広く分布するのは額田部であり、このことは額田部の由来や額田部連の職掌などを考える上で大きな論点となると思われる。

以上、額田、額田部関係の氏族とその系譜を概観した。額田と額田部とは明確に区別すべきであり、額田部連（宿禰）、額田部湯坐連、額田部河田連、額田部連玉、額田部などが額田部氏について考察する材料となる。また畿外に広く分布する額田部の存在は、額田部氏の由来・職掌を窺う際に注意すべき事柄となろう。以上のような予察を以て、次に額田部氏の由来やヤマト王権との関係についての考察に進みたい。

## ② ヤマト王権との関係

額田部連（宿禰）を始めとするⅠ系統の額田部+カバネの諸氏の由来と職掌を考えるに際して、Ⅱ系統の額田+カバネの諸氏、即ち額田の地に拠った豪族という性格とは異なり、これらはあくまで額田部というものが基本であった点に留意せねばならない。研究史を繙くと、額田部の由来を検討する方法として、額田の語義を追究する論考もあるが、これはⅠ・Ⅱ系統の混同から来るものであり、額田の土地の様子を知るには有効であっても、額田部の本義を解いたことにはならないと思う。そこで、まず額田部の本義如何から、額田部氏のあり方についての考察に入って行きたい。

### 1 額田部の本義

額田部および額田部氏に関する研究は、これらの氏が比較的史料に恵まれていることもあって、既に数多くの論考が存する。まず額田部、額田

表1 額田及び額田部氏の分布

<p><b>山城国</b> 愛宕郡額田里*〔平1801〕 相楽郡額田村〔平1083〕；額田臣〔姓氏録〕 平安京 左京；額田部湯坐連〔姓氏録〕 額田部〔姓氏録〕 右京；額田部宿禰〔姓氏録〕 ？；額田部宿禰〔姓氏録〕</p> <p><b>大和国</b> 添下郡；額田氏〔天平16・10・辛卯条道慈卒伝〕 平群郡額田郷； 額田部連（宿禰）…久等々、伊勢、某、比羅夫、甥（法頭）、 茂業（大領）、君麻呂（筑前国史生〔大14-270〕） 額田部河田連〔姓氏録〕…三當 額田部〔姓氏録〕 額田村主〔姓氏録〕 山辺郡額田邑 山辺南郷；額田豊連〔平4581〕</p> <p><b>河内国</b> 高安郡三条額田*〔平4904〕 河内郡額田郷； 額田部湯坐連〔姓氏録〕…某、息長、長吉 額田首〔姓氏録〕…人足（遣新羅副使）、千足（明法第二博士）、 某（尾張大目〔平97〕） 額田早良首〔紀氏家牒〕 額田真人国麻呂（陰陽寮史生〔平4550〕）</p> <p><b>摂津国</b> ？；額田部宿禰〔姓氏録〕 額田部〔姓氏録〕</p> <p><b>伊勢国</b> 桑名郡額田郷；額田神社 朝明郡額田郷</p> <p><b>尾張国</b> 海部郡；額田部（主帳〔大1-613〕）</p> <p><b>参河国</b> 額田郡額田郷</p> <p><b>武蔵国</b> ？；額田部槻本首</p> <p><b>安房国</b> 朝夷郡健田郷；額田部小君（戸主〔平城338・339号〕）</p> <p><b>上総国</b> 周准郡額田郷；額田部千万呂（戸主〔調（細布）墨書銘〕） ？；額田（検田使書生大判官代〔平2440〕）</p> <p><b>常陸国</b> ？；額田部…小龍（仕丁〔大14-283〕）</p> <p><b>近江国</b> 浅井郡；額田氏〔天台座主記第17世喜慶〕</p> <p><b>美濃国</b> 池田郡額田郷；額田国造 春日郷；額田部刀良売・枚夫売・支奴売〔大-9・15・22／戸籍〕 本巢郡栗田郷；額田部忍勝・小比知・姉売・佐々売・大海売・ 赤売・意止売・麻墨売〔大1-29／戸籍〕</p>	<p>各務郡那珂郷；額田部在間〔大1-48／戸籍〕</p> <p><b>上野国</b> 甘楽郡額田（部）郷 緑野郡小野郷；額田部君馬稻（戸主〔調布墨書銘〕）</p> <p><b>若狭国</b> ？；額田部方見（戸主）・羊〔平城1953号〕</p> <p><b>越前国</b> 今立郡中山郷；額田部□□手〔城21-34・25-30〕 足羽郡額田郷 野田郷；額田国依（戸主〔大5-545〕）</p> <p><b>加賀国</b> 江沼郡額田郷 石川郡井手郷；額田部老麻呂（戸主）・真山〔城22-34〕</p> <p><b>出雲国</b> 意宇郡；額田部臣〔岡田山一号墳出土大刀銘〕 秋鹿郡；額田首真咋（郡散事カ〔大1-603〕） 出雲郡漆沼郷深江里；額田部伊毛女〔大2-206〕 杵築郷；額田部依馬（戸主）・手嶋売〔大2-224〕 因佐里；額田部堅石（戸主）・忍尾〔大2-221〕 大原郡；額田部臣押嶋・伊去美（少領） 屋裏郷賀太里；額田部宇麻（戸主）・羊〔大1-589〕</p> <p><b>石見国</b> 美濃郡；額田部蘇提売（節婦）</p> <p><b>隠岐国</b> 智夫郡大井郷；額田部小足（城16-7） 宇良郷；額田部小牛（城24-38）</p> <p><b>播磨国</b> 美婁郡横川郷；額田部真嶋（戸主）・広浜（仕丁）〔大15-257〕 ？；額田部武末〔平金451～453号／兵庫県一乗寺丸瓦銘〕</p> <p><b>備前国</b> ？；額田弘則（健児〔本朝世紀〕）</p> <p><b>備中国</b> 哲多郡額田（部）郷；額田部虫〔平城3295号〕</p> <p><b>備後国</b> 三谿郡額田郷</p> <p><b>周防国</b> 玖珂郡玖珂郷；額田部牧刀自〔平199／戸籍〕</p> <p><b>長門国</b> 豊浦郡額田郷；額田部直…広麻呂（擬大領→少領）、塞守（豊浦 団毅→大領）</p> <p><b>讃岐国</b> 大内郡入野郷；額田部並山・並雄・安継・村主・山道女・豊 女・吉女・乙町女・歩丸・藤雄・茂丸・筆・田 永・元永・虫永・安女〔平437号／戸籍〕 大宰府；額田（検郭使〔平365〕）</p> <p><b>筑前国</b> 志麻郡川辺郷；額田部平太売・伊麻・赤売・泥志売・赤売・阿 久多売〔大1-101・109・118・122・137・140／戸籍〕 早良郡額田郷・額田駅</p> <p><b>豊後国</b> ？；額田部直多流美売・阿流加売〔大1-216・217／戸籍〕</p> <p><b>肥後国</b> 宇土郡大宅郷；額田部君得万呂（戸主）・真嶋〔大25-145〕</p>
--	---

\* 出典の略称；平城＝平城宮木簡、城＝平城宮発掘調査出土木簡概報の冊数・頁数、大＝大日本古文書の巻数・頁数、平＝平安遺文の号数、平金＝平安遺文金石文編の号数

に関する語義如何から、額田部の本義をめぐる諸説を整理すると、次のようになる。<sup>32)</sup>

(イ) 額田Ⅱ土型(ヌカタ)で、鑄物あるいは「天の拔(糠)戸」(『書紀』神代上宝鏡開始章第二の一書に鏡作部の遠祖とある)と同じ語で、鏡作とも関係する部民。

(ロ) 額田Ⅱ人跡不便な地に位置し、山間と里地の境界部分に開かれた新墾の田を耕す田部の一種。

(ハ) 額田の宮に奉仕する部民。

これらのうち、(イ)は鑄物、鏡作などの直截的な言葉ではなく、何故土型を、しかも「額田」という当て字で表現しているのか不明であり、鏡作との関係という根拠も疑わしいとの批判があり、支持し難い。(ロ)は額田の語義やその土地景観理解の一助にはなると思うが、田部の一種とすると、「額」が浮いてしまう。また額田と額田部は区別する必要があるとする本稿の立場からは、額田部の本義を説明する手段にはならないと言わねばなるまい。なお、この説には境界部分の開墾という点と額田部氏の活動の事例から、額田部氏は境界祭祀を掌ったとする見方も呈されている。<sup>33)</sup>

a 『播磨国風土記』揖保郡意此川条

意此川、品太天皇之世、出雲御蔭大神、坐於枚方里神尾山、每遮行人、半死半生。爾時、伯耆人小保豆・因幡布久漏・出雲都伎也、三人相憂、申於朝廷。於是、遣額田部連久等々、令祈。于時、作屋形於屋形田、作酒屋於佐々山、而祭之、宴遊甚衆、既擲山柏、挂帶捶腰、下於此川相壓。故号壓川。

b 『播磨国風土記』揖保郡鼓山条

鼓山。昔、額田部連伊勢、与神人腹太文、相闘之時、打鳴鼓而相闘之。故号曰鼓山。へ々谷生檀。

しかし、豪族は様々な性格を有しているのであって、軍事氏族とか、

祭祀といった一面をとらえて論定することはできないと思う。軍事や祭祀に全く関わらない豪族はないのであって、負名氏のように、律令制下にもその職掌を残すものを除けば、一つの豪族の役割を一点に絞るのではなく、多様な活動を以てヤマト王権に奉仕するという視点で見た方がよいであろう。a・bの額田部連は中央から派遣され、神祭や土地神との土地争奪を行っているが、このような伝承は他氏の場合にも数多く見られ、額田部連だけの役割とは言えないと考える。a・bではヤマト王権の使者として様々な目的を以て派遣される者の中に額田部連がいたことを読み取るべきで、その時々での任務を知ることではできるが、それが即額田部連の職掌を示すものではないと見なしたい。

結局のところ、額田部の本義としては(ハ)が残り、本稿でもこの見解を支持したいが、額田部氏が如何に額田の宮と関わっていたのかという点の究明は不十分なところがあり、(イ)・(ロ)程には額田部の本義が深化されていないと考える。そこで、本節では額田部の成立時期の問題から、額田部の由来やその職掌を検討する手がかりを得たい。

額田の宮との関わりを想定して、それに関係しそうな皇子女名を搜すと、次の三名が掲げられる。応神天皇の皇子額田大中彦(母は景行天皇の皇子五百木入日子命の子品陀真若王の女高城入姫)、推古天皇の幼名額田部皇女(欽明天皇の皇女、母は蘇我稲目の女堅塩媛)、八世紀の額田部王。これらのうち、額田部王は系譜不明であるが、『統紀』和銅五年正月戊子条で無位から従五位下に昇叙されているので、諸王の子ということになる(遷叙令陰皇親条)。この王名は長屋王家木簡にも登場する(城二三八)が、額田部を冠する皇子女名や氏族名は八世紀以前から存しているもので、額田部の由来や成立時期を考える材料としては、考察対象外となる。

次に額田大中彦皇子に関しては、『書紀』仁徳即位前紀の倭屯田の帰属をめぐる伝承、仁徳六十二年是歳条の闘鶏氷室の起源説話などの史料が

存し、額田部はこの額田大中彦皇子の名代であったとする説が有力である。<sup>⑤</sup>

倭屯田の所在地は、『倭名抄』城下郡大和郷・三宅郷の存在から、現奈良県磯城郡三宅町、田原本町大字千代や桜井市大字東田の纏向遺跡の地などに比定されており、三宅町は大和郡山市額田部寺町・北町・南町＝平群郡額田郷の地とも近い(図1)。倭屯田の帰属をめぐる争いでは、額田大中彦皇子はもと山守地であったと主張しており、後述のように、平群郡には山部が分布し、夜麻(山部)郷はその遺称を示す。また關鷄氷室は山辺郡都介郷の地(現天理市福住町)に比定されるが、仁賢紀に「山辺郡額田邑」と記されているように、額田の地は山辺郡とも関係していた。このように見ると、額田大中彦皇子に関わる伝承は、いずれも額田の地と近接する場所のものであることがわかり、額田の地と額田大中彦皇子の密接な関係、即ち額田の地に額田を冠する皇族が居住した可能性を推定させるものと言えよう。事実、a・bのように、応神朝における額田部連の活躍を伝える史料も存する。

では、額田部はこの額田大中彦皇子に由来するのであるか。現在、某部の称の確実な出現を示すのは次の史料であると言われる。

c 島根県松江市岡田山一号墳出土大刀銘

額田部臣□□□□(案カ)大利□

岡田山一号墳は六世紀後半の前方後方墳であり、大刀銘自体は古墳に埋葬されるのよりもやや早い六世紀半ば、後半の作製と考えられる。この古墳は出雲国造出雲臣の本拠地意宇郡に存しており、出雲では国造同族(擬制的関係を含む)が部管掌者となることで、部民制が浸透していた事情を物語るものと理解され、同様な事例として、神門臣の中で健部となる者があり、健部臣の称が生まれた(『出雲国風土記』出雲郡健部郷条)という伝承を掲げることができる。<sup>⑥</sup>ところで、こうした部称が成立したのはいつであろうか。五世紀代の金石文、埼玉県行田市稻荷山古墳出土鉄剣銘、熊本県玉名郡菊水町江田船山古墳出土大刀銘には、「杖刀

人首」、「典曹人」の称は見えるが、部称は現れない。したがって五世紀代には人制によるヤマト王権の分掌、実務運営が行われていたと考えられ、部民制といわれる体制が出来上がるのは、五世紀末の今来漢人の来日、渡来人の王権への組み込み、その他の宮廷組織の整備や百済の二十部司制の影響などを経た上でのことであり、六世紀前半の欽明朝が目ざれている。欽明の皇子女には部称を持つ者が多く、部称の確実な初見史料<sup>c</sup>の時期との合致などが大きな根拠となる。『出雲国風土記』意宇郡舍人郷条には欽明朝に大舍人を貢上した、神門郡日置郷条には日置伴部が派遣されて駐留したなどの伝承が存しており、欽明朝こそ部民制の画期であったと考えたい。

ちなみに、某部の名称の由来としては、大王やその子女の宮名・所在地への奉仕者と見る説が有力とされる。<sup>⑦</sup>五世紀代の大王については、河内の志幾之大県主の家が堅魚木を屋根に載せていたところ、雄略天皇に「己家似天皇之御舍而造」として破却を命じられたという伝承がある(『古事記』)ように、ヤマト王権の中で奉仕すべき宮は大王の宮に他ならなかったと考えられる。したがって宮名による区別は不要であり、宮号に基づく某部の称は未成立であった。一方、欽明の皇子女に部称を持つ者が多いのは、皇子女の宮とその生活の資養を負担させる体制が始まったのが六世紀前半のこの時期ではないかと推測され、奉仕する宮の複数化が起こるものと思われる。とすると、奉仕先の宮号による区別が必要となり、部称が生じたのではあるまいか。

以上のような見通しに立って、部称の確実な初見をcと見るならば、五世紀代の伝承的な存在額田大中彦皇子を額田部の由来とすることは難しいと言わねばならない。彼はあくまで「額田」であって、「額田部」ではないことにも留意したい。またa・bは伝承的な記事であって、額田部連の確実な成立時期を示すものとしては扱い難く、『書紀』による限り、額田部連の初見は欽明二十二年是歳条である。したがって欽明十五年

(五五四) 生という額田部皇女こそ額田部の由来を考察する材料となろう。彼女の生年は史料上の年代と大きな矛盾はないと思うし、上述の額田部連の初見記事とも年代的に合致する。<sup>40)</sup>

額田部皇女は豊御食炊屋姫尊として知られ、敏達天皇の皇后となり、後に推古天皇として即位した。即位後は豊浦宮、小墾田宮を居所としたが、それ以前では『書紀』用明元年五月条に「別業」が海石榴市宮にあったとある。「別業」と記されているので、これとは別に本宮があったと考えられるが、その所在地は不明である。額田の地の西北の斑鳩地域には七世紀初に厩戸皇子の上宮王家の進出があり、その更に南の広瀬郡地域には額田部皇女の前の敏達天皇の皇后広姫所生の押坂彦人大兄皇子の水派宮や敏達天皇の百濟大井宮・広瀬の殯宮など、敏達系王統の進出が行われたという。<sup>41)</sup> 額田部皇女自身のこの地域との関係は、推古天皇となつてからであるが、『書紀』推古十四年是歳条に「皇太子亦講法華經於岡本宮。天皇大喜之。播磨国水田百町施于皇太子。因以納于斑鳩寺。」とあり、「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」によると、この講筵には天皇や蘇我馬子も列席していたようである。この岡本宮には馬子の女で厩戸皇子の妃刀自古郎女が居住したといわれ、蘇我系である推古天皇も来訪し易かつたのではないかと思われる。また推古の女菟道貝蛸皇女、孫橘大女郎も厩戸皇子の妃になっており、彼女達王族出身の妃は中宮に居住したとされる。<sup>42)</sup> 但し、これらはいずれも額田部皇女の時代のものではない。上述の敏達系王統の広瀬郡進出に対して、用明系王統の上宮王家が斑鳩地域に進出し得た背景として、厩戸皇子の義母でもある額田部皇女の宮の存在があったとする見解が呈されている。<sup>43)</sup> 後述のように、隋使裴世清来日の際、世清は舟運で額田の地を経由して海石榴市衛で郊勞の礼を受けており、海石榴市には額田部皇女の別業が存しているの、彼女の名前と関係の深い額田の地にも何らかの政治的拠点があったのではないかと推測されるからである。<sup>44)</sup>

以上、確説となるものはないが、六・七世紀の皇族の平群・広瀬郡地域への進出、先述の額田大中彦皇子の伝承に基づく額田の地における皇族の宮の存在の可能性などを勘案して、額田の地に額田部皇女の宮が存した蓋然性はあると考えたい。とすると、やはり額田部はこの額田部皇女の宮への奉仕のために設定されたと見るのが穏当な見解であろう。では、その奉仕の様子は如何であったか。

#### d 『新撰姓氏録』右京神別下・丹比宿禰条

火明命三世孫天忍男命之後也。男武額赤命七世孫御殿宿禰男色鳴、大鷦鷯天皇御世、皇子瑞園別尊誕生淡路宮之時、淡路瑞井水奉灌御湯。于時虎杖花飛入御湯瓮中、色鳴宿禰稱天神壽詞、奉号曰「多治比瑞園別命」。乃定丹治部於諸国、為皇子湯沐邑。即以「色鳴」為宰、令領丹比部戸、因号丹比連、遂為氏姓。(下略)

#### e 『新撰姓氏録』河内国神別・禰多治比宿禰

火明命十一世孫殿諸足尼命之後也。男兄男庶、其心如女、故賜禰為御膳部。次弟男庶、其心勇健、其力足制十千軍衆、故賜禰号四十千健彦、因負姓禰負。

d・e は、八色の姓で宿禰賜姓に与つた手繰連・丹比連・鞆丹比連(『書紀』天武十三年十二月己卯条)の存在を考慮すると、河内丹比の柴籬宮に奉仕した丹比連Ⅱ丹比部の管理、手繰連Ⅱ膳部、鞆丹比連Ⅱ禰負という分掌を示すもので、宮内での職務分担を窺わせる材料となる。同様に、『古事記』雄略段・清寧段では単に白髪部を置いたとあるが、その実情は次の通りであった。

#### f 『書紀』清寧二年二月条

天皇恨無子、乃遣大伴室屋大連於諸国、置白髪部舍人・白髪部膳夫・白髪部鞆負、冀垂遺跡令觀於後。

トネリの系譜を引く令制下の各種の舍人や帳内・資人などが宮内の雑務や家政機関の実務運営に携わっていたことから考えて、舍人Ⅱ宮の管

理（白髪部の全体的管理）、膳夫Ⅱ食事の管理（食材調達と調理）、朝負Ⅱ宮の警備が宮内の職務分担として基本的なものであったと推定される。以上のような事例と、前述の複姓の額田部氏の存在から、額田部皇女の宮への奉仕形態は、額田部連Ⅱ宮の管理（額田部の全体的管理）、額田部湯坐連Ⅱ額田部皇女の養育（膳部的役割を含む日常生活面全般）となり、その他、額田部河田連Ⅱ皮工（馬、警備？）、額田部麗玉Ⅱ玉類生産（装身具作製？）などの職務分掌も存した。そして、d・fの部民設定のあり方を参照すると、出雲国の額田部臣、長門国・豊後国の額田部直、上野国・肥後国の額田部君（表1）と、出雲臣・長門凡直・豊国直・上毛野君・肥君などの国造級有力豪族の同族が額田部皇女の宮に出仕し、これらの国々を始めとする各国の額田部からその出仕を支える物資が送付されてくるという形で宮の経営が行われたと考えられ、その統括を行ったのが額田部連であった。

以上、額田の地における額田部皇女の宮の存在には論拠不十分な点が残るが、額田部の由来に関しては、名代説をとるべきこと、また年代的にも額田部皇女を起点とすることに矛盾はないことを述べ、額田部を冠する諸氏の職務分掌のあり方を推定した。こうした名代の氏族は、丹比連や白髪部造の例を見ても、畿内の中小豪族である。とすると、彼らが宮に奉仕し、名代として仕える契機は何であったのか。宮への奉仕者が必要であるという王権側の理由は一応説明できるが、中小豪族の側にもその要請に応じるだけの理由や力量がなければ、王権との関係を結ぶ契機を十分に解明したことにはならない。そこで、次に豪族としての額田部氏の発展を検討してみたい。

## 2 平群の馬から額田の馬へ

大和国平群郡額田郷を額田部連の本拠地と見る立場に立つて、まずこ

の地域の古墳の動向を概観し、豪族の形成や発展の時期を知る手がかりとしたい。額田部丘陵には額田部古墳群と称される古墳群が存し、その変遷は次の通りである。<sup>45</sup>

五世紀：松山古墳（円墳・径五〇メートル）―五世紀半：推古神社古墳（前方後円墳・四〇メートル）―六世紀初：額田部狐塚古墳（前方後円墳・全長五〇メートル）／船墓古墳（円墳・径二〇メートル。但し、「額田寺伽藍並条里図」の表現から考えると、前方後円墳・全長六〇メートルか）―六世紀前半：南方古墳（円墳・径三メートル）／堀ノ内古墳（円墳・二五メートル）―六世紀後半―七世紀前半：鎌倉山古墳

この額田部古墳群に関しては、明確な前期古墳を含まず、中期段階に入り造墓活動が活性化すると指摘が重要である。古墳時代中期の五世紀以前においては、この地域に古墳を築き得る有力豪族は存在せず、五世紀になって古墳を築造する豪族Ⅱヤマト王権と関係を有し、その身分表象として円墳や前方後円墳を築く者が登場したことを窺わせるからである。またこの地域で最古の松山古墳が円墳であり、その後しばらくして狐塚や「額田部宿禰先祖」と注記される船墓などの前方後円墳が現れるという変遷にも注目したい。当初は円墳を築き、六世紀頃にヤマト王権内での地位確立に伴って前方後円墳を築造し得るようになるという変化を読み取ることができないのではないかと考えられる。<sup>46</sup>

以上の古墳に関する知見をふまえて、文献史料から当地の豪族のあり方について考察することのできる材料を探りたい。当地域に前方後円墳が築造される六世紀頃というと、先に平群系額田首の箇所で触れた武烈即位前紀に記された平群氏の滅亡という平群郡地域に大きく関わる事件が起きている。平群氏は武内宿禰後裔氏族の一つで、孝元記によると、平群木菟宿禰が始祖で、その子孫には平群臣・佐和良臣・馬御織連があるという。「書紀」や前掲の「紀氏家牒」により系図を描くと次のようになり、この系譜記事を裏付けることができる。



平群木菟宿禰——平群真鳥大臣——鮪——…〔平群臣〕  
 額田早良臣——額田駒宿禰——○…〔馬工連〕  
 額田首の女 ……〔早良臣〕

平群氏の始祖平群木菟宿禰は応神・仁徳・履中の三代に仕えた伝説的な存在で、対外交渉・征討に従事した経歴を有し（応神三年是歳条、同十六年八月条）、皇太子履中に近侍してその即位を実現し、執政の臣として活躍している（履中即位前紀、同二年十月条）。その子真鳥は雄略・清寧・武烈朝の大臣であった（雄略即位前紀十一月甲子条、清寧元年正月壬子条、武烈即位前紀）が、実質的な動向がわかるのは武烈即位前紀のみである。ここでは平群臣真鳥・鮪父子の専横が描かれ、大伴連金村の助力による真鳥・鮪父子の討滅と武烈の即位が記される。

以上の平群氏の滅亡および前述のように平群氏が官馬を飼養する役割を持っていたこと、そして、額田部湯坐連・河田連の伝承から額田部連も五世紀後半の允恭朝において額田の馬貢上に与っていたことを勘案すると、この六世紀頃の平群氏の滅亡によって、平群郡地域からの貢馬が額田部連に独占されるようになり、これが額田部連氏の発展やヤマト王権との関係強化の大きな要因となったのではないかと推定される。しかし、平群氏が本拠とした平群谷の古墳は六世紀以降のものが多く、平群氏は皇室との婚姻例もなく、同族は少ないし、平群部の分布も限られるというように、『書紀』に描かれたような五世紀代に大きな力を有した氏であったとは考え難いとする見解が呈されている。<sup>48</sup>『書紀』では崇峻即位前紀の物部守屋討伐軍に平群臣神手、推古三十一年是歳条の征新羅副將軍平群臣宇志が見え、六・七世紀にヤマト王権の有力豪族としての地位を保っているようであり、天武十年三月丙戌条では大山下平群臣子首が帝紀・上古諸事記定に加わり、持統五年八月癸卯条では墓記を提出した

十八氏の中に登場している。したがって平群氏は六世紀以降に活躍する氏ではないかと言われる所以である。

とすると、平群氏の滅亡→額田部氏の台頭の図式を描くことは困難であり、後述のように、両氏は郡領氏族として当地に勢力を有したようであるから、平群氏の存在を葬り去ることはできない。今、額田の馬の貢上が允恭朝に懸けられていることに注目すると、允恭は倭王済に比定され、それまでの讃・珍とは別の王統に属したのではないかといわれており、五世紀代に大きな権力を有した葛城氏と王権との関係が転換するのがこの時期であった。允恭五年七月条では葛城襲津彦の孫玉田宿禰誅殺が行われ、一方、大伴氏として実在が確実な大伴室屋が藤原部の点定など、大王の近侍者として活躍する（允恭十一年三月丙午条）のが、允恭朝である。そして、雄略朝には葛城氏を滅ぼし、大伴・物部などの伴造氏族を従えた大王の権力が確立するのであった。<sup>49</sup>

このような見解を参照すると、允恭朝から伴造氏族の台頭が始まると見てもよいのではあるまいか。ヤマト王権と同格の豪族が王権を支える時代から、王が自己の臣僚を有し、大王として君臨する過程の中で、平群氏の官馬飼養伝承に窺われるような有力豪族による飼馬掌握に対して、王権に直属する飼馬の担い手として額田部氏が登場すると思われる。後述のように、推古朝に活躍する額田部連比羅夫は騎馬の長としての役割を勤めており、ヤマト王権の飼馬・騎馬を支える額田部氏の伝統をふまえてのことであったと思われる。その始源には五世紀後半のヤマト王権の構造の変化、王権に直属する飼馬の担い手の選考があり、前述のように、生駒山東麓における飼馬の伝統がそれに応じ得る豪族額田部氏を用意していたのである。平群氏討滅の存否は保留しておきたいが、平群系額田首は生駒山西麓に居住しており、古墳の変遷から見ても、平群谷の地域と額田の地とは平行して発展しているので、平群系馬工連による飼馬が別に行われた可能性は否定しない。ただ、ヤマト王権にとつ

ては額田部氏の飼馬が占める重要性は高く、額田部氏発展の基礎として、額田の馬飼養を想定したい<sup>50)</sup>。

では、何故額田地域の豪族が採用されたのか。生駒山東麓の馬牧の存在、額田の馬貢上とともに、平群郡額田郷の立地条件も考慮しておきたい。既に指摘されているように、この地は大和盆地における河川交通の拠点であった(図1)。佐保川と初瀬川の合流点が額田部台地の南に存し、もう少し西では寺川・曾我川・富雄川などが大和川に合流する。難波からヤマト王権の所在地である三輪山周辺や飛鳥に至るには、大和川を遡り、この額田の地で分岐して初瀬川に入ることになり、ヤマト王権とその外港難波との交通の面で重要な拠点となるのである。

こうした河川交通上の要所であるとともに、陸上交通の上でも、この地域は注目される。

g 奈良県教育委員会『藤原宮』七八号木簡

・弥努王等解<sup>平群</sup>  
大坂<sup>二</sup>処

(欲<sup>東カ</sup>)  
□□□□ □□□□

・使部使<sup>(連カ)</sup> □□ □□ 連連連

h 『統紀』勝宝元年十二月戊寅条

遣五位十人・散位廿人・六衛府舍人各廿人、迎八幡神於平群郡。是日入<sup>レ</sup>京、即於宮南梨原宮、造新殿、以為<sup>二</sup>神宮<sup>一</sup>、請僧四十口、悔過七日。

i 『東大寺要録』卷四所引「大和尚伝」

勝宝六載甲午二月一日至難波駅。…三日至河内国守藤原魚名庁。…明発取大和国平涼駅宿、在<sup>レ</sup>道勅使催令<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>京。至<sup>二</sup>平涼駅<sup>一</sup>、略歇息少時入<sup>レ</sup>京。

i によると、難波↓河内国庁と道をとった鑑真一行は、河内から平城

京に入る際、平涼駅を経由したことがわかる。この平涼駅は、『日本霊異記』中巻第一七話に平群郡鵜村の岡本尼寺(法起寺)の観音銅像を盗んだ盗人が「平群駅西方、有<sup>二</sup>少池<sup>一</sup>」に銅像を隠しておいたという話があり、平群駅にあたるものと考えられる。hにも八幡神入京に際して平群郡を経由したことが記されており、難波―大和の陸上交通において平群郡・平群駅の占める重要性が窺われる。この平群駅の所在地については、gの平群・大坂を『書紀』天武八年十一月是月条「初置<sup>二</sup>関於龍田山・大坂山<sup>一</sup>。仍難波築羅城。」に対応するものと見て、龍田山関=平群関、即ち現奈良県生駒郡三郷町大字立野の龍田神社付近とするのが有力であろう<sup>51)</sup>。

先述の神武即位前紀では龍田越えは「其路狭嶮、人不得<sup>二</sup>並行<sup>一</sup>」として生駒越えを行ったとあるが、壬申の乱の際、大伴吹負は河内から進軍して来る近江方の軍隊を龍田で防いでおり(天武元年七月壬子条)、やはり大和と河内の交通の拠点であり、現在も大阪府と奈良県を結ぶ道路が通っている。この地は倭名抄平群郡那珂郷に含まれるので、ここに平群駅が存してもおかしくはない。なお、『日本霊異記』上巻第三五話によると、平群の山寺に居住する僧が河内国若江郡遊宜村や難波市と通交している例があり、河内や難波との交通が盛んであったことが知られる。以上の検討によると、陸上交通の拠点平群駅の所在は額田の地から六七七キロメートル西となるが、陸上交通で必要な馬を把握していたのが額田部氏であったとすると、難波―大和の河川交通への関与と同様、陸上交通においても例えば平群駅への馬の供給に携わるといった形で、額田部氏の関与を想定することはできないであろうか。また額田の地は北の横大路・筋違道(図1)にも近接しており、陸上交通の要所であったと思われる。

以上、額田部氏台頭の要因として、額田の馬貢上により王権に直屬して飼馬を掌る役割を担ったこと、河川交通の要所としての額田の地や陸

上交通でも平群駅という拠点を有する平群郡の立地などが推定され、ヤマト王権の交通を円滑に運営するためにもこの地の豪族の力を借りる必要があり、額田部氏が王権に出仕する契機となったと考えた。では、額田部氏とヤマト王権との関係はどのようなものであったか。先に保留しておいた額田部連の氏人の活躍を検討し、王権内での額田部氏の位置を明らかにしたい。

### 3 額田部連とヤマト王権

先述のように、額田部連の確実な初見は『書紀』欽明二十二年是歳条である。以下、六、七世紀における額田部連の活躍を整理し、ヤマト王権と額田部氏の関係、王権内部での位置づけなどを検討したい。

#### j 『日本書紀』欽明二十二年是歳条

復遣<sub>レ</sub>奴<sub>レ</sub>氏大舍<sub>レ</sub>献<sub>レ</sub>前調賦。於<sub>レ</sub>難波大郡、次序諸蕃。掌客額田部連・葛城直等使<sub>レ</sub>列<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>百濟之下、而引導。大舍怒還<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>館舍、乗<sub>レ</sub>船<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>穴門。於是、修<sub>レ</sub>治穴門館。大舍問曰、為<sub>レ</sub>誰客造。工匠河内馬飼首押勝欺<sub>レ</sub>給曰、遣<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>西方無<sub>レ</sub>礼使者之所<sub>レ</sub>停宿処也。大舍還<sub>レ</sub>国告<sub>レ</sub>其所<sub>レ</sub>言。故新羅築<sub>レ</sub>城於阿羅波斯山、以備<sub>レ</sub>日本。

#### k 『日本書紀』推古十六年八月癸卯条

唐客入<sub>レ</sub>京。是日、遣<sub>レ</sub>節騎七十五正<sub>レ</sub>而迎<sub>レ</sub>唐客於海石榴市衢。額田部連比羅夫以告<sub>レ</sub>礼辞<sub>レ</sub>焉。

#### l 『隋書』卷八一東夷伝倭国条

(上略)倭王遣<sub>レ</sub>小徳阿輩臺<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>數百人、設<sub>レ</sub>儀仗、鳴<sub>レ</sub>鼓角<sub>レ</sub>來迎。後十日、又大礼<sub>レ</sub>哥多毗<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>二百余騎<sub>レ</sub>郊<sub>レ</sub>勞、既<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>彼都。(下略)

#### m 『日本書紀』推古十八年十月丙申条

新羅・任那使人<sub>レ</sub>臻<sub>レ</sub>於京。是日、命<sub>レ</sub>額田部連比羅夫<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>迎<sub>レ</sub>新羅客<sub>レ</sub>莊馬之長、以<sub>レ</sub>膳臣大伴<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>迎<sub>レ</sub>任那客<sub>レ</sub>莊馬之長。即安置<sub>レ</sub>阿斗河辺館。

#### n 『日本書紀』推古十九年五月五日条

藥<sub>レ</sub>狘<sub>レ</sub>於兔田野。取<sub>レ</sub>鷄鳴時<sub>レ</sub>集<sub>レ</sub>于藤原池上、以<sub>レ</sub>公明<sub>レ</sub>乃往之。粟田細目臣<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>前部領、額田部連比羅夫<sub>レ</sub>連<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>後部領。是日、諸臣服色皆隨<sub>レ</sub>冠色、各著<sub>レ</sub>髻華。則大徳・小徳並用<sub>レ</sub>金、大仁・小仁用<sub>レ</sub>豹尾、大礼以下用<sub>レ</sub>鳥尾。

#### o 『日本書紀』大化元年八月癸卯条

遣<sub>レ</sub>使於大寺<sub>レ</sub>喚<sub>レ</sub>聚僧尼<sub>レ</sub>而詔曰、(中略)凡自<sub>レ</sub>天皇<sub>レ</sub>至于伴造、所<sub>レ</sub>造之寺、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>營者、朕皆助作。令<sub>レ</sub>拜<sub>レ</sub>寺司等<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>寺主、巡<sub>レ</sub>行諸寺、驗<sub>レ</sub>僧尼・奴婢・田畝之實、而尽<sub>レ</sub>顯奏。即以<sub>レ</sub>来目臣<sub>レ</sub>(闕名)・三輪色夫君・額田部連甥<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>法頭。

#### p 『日本書紀』大化五年三月甲戌条

以<sub>レ</sub>蘇我山田大臣<sub>レ</sub>而被<sub>レ</sub>戮者、田口臣筑紫・耳梨道徳・高田醜<sub>レ</sub>(此云<sub>レ</sub>之渠<sub>レ</sub>・雄・額田部湯坐連<sub>レ</sub>(闕名)・秦吾寺等<sub>レ</sub>凡十四人、被<sub>レ</sub>絞者九人、被<sub>レ</sub>流者十五人。

まず額田部連の活動として、jの掌客、k、mの郊勞と、外交儀礼に関わるものが注目される。延喜太政官式には蕃客人朝の際の掌客一名の任命が記されており、掌客使は客館での饗宴を行ったり、儀式の際に客館と朝廷の間を送迎したり(『儀式』第七「正月七日儀」末尾に「掌客使并左右京職相共送<sub>レ</sub>鴻臚館」とある)と、客館滞在中の客徒の世話をすることを任務とした。その任命者の例は表2の通りであり、九世紀後半、十世紀の任命者はいずれも文人として著名な人々が含まれており、客館での饗宴には詩文による交歓が不可欠であるだけに、そのような教養が必要であったのであろう。表中の都宿禰言道は「若非<sub>レ</sub>佳令<sub>レ</sub>何示<sub>レ</sub>遠人」として、名前を良香と改める程の配慮を以て臨んでおり(『日本三代実録』貞観十四年五月七日条)、彼らの掌客の職務に対する思い入れが窺われる。六、七世紀の事例では、渡来系の人々や凡河内直氏のような外交・接客に通じている者が任用されており、やはり客徒に与える印象や接客の技

表2 掌客使・郊勞使の任命例

年 月 日	職 名	官 職 等	人 名	備 考
欽明31・7・是月条	守護人		東漢坂上直子麻呂 錦部首大石	
推古16・6・丙辰条	掌客		中臣宮地連摩呂 大河内直糠手 船史王平	
貞観14・4・16条	掌客使	正六上少内記 正六上式部少丞	都宿禰言道 平朝臣季長	
元慶7・4・2条	掌客使	正六上右衛門大尉 従八上文章得業生	坂上大宿禰茂樹 紀朝臣長谷雄	
延喜8・4・2条 扶桑略記	掌客使	式部大丞 散位	紀淑光 菅原淳茂	
延喜20・4・2条 貞信公記	掌客使	民部大丞	藤原朝臣季方 大江朝臣朝綱	
慶雲2・11・己丑条 和銅7・11・庚戌条	騎兵將軍 左將軍 副將軍  右將軍 副將軍	正五上 従四下 従五上 従五下 従四下 従五上 従五下	紀朝臣古麻呂 大伴宿禰旅人 多治比真人広成 久米朝臣広人 石上朝臣豊庭 上毛野朝臣広人 粟田朝臣人	諸国騎兵徴発 畿内七道騎兵990を徴発
和銅7・12・己卯条		従六下 正七上	布勢朝臣人 大野朝臣東人	騎兵170で三崎に迎える
勝宝4 (宝龜10・4・辛卯条)				新羅王子らを迎馬で迎える
宝龜10・4・庚子条	將軍			騎兵200・蝦夷20人で京城門外三橋に迎える
承和9・3・癸亥条	郊勞使	従五下式部少輔	藤原朝臣諸成	
嘉祥2・4・辛亥条	郊勞使	従五下左近衛少將	良峯朝臣宗貞	勅使として慰勞
貞観15・5・15条	郊勞使	従五上右近衛少將	藤原朝臣山陰	
元慶7・4・28条	郊勞使	正五下右近衛少將	平朝臣正範	山城国宇治郡山階野辺にて郊勞→鴻臚館へ

※出典を記していないのは、すべて当該国史。

術を考慮しての人選ではなかったかと考えられる。<sup>54</sup>とすると、jもそのような点を勘案した人選であろう。同時に任命された葛城直は『書紀』欽明三十一年四月是月条に越に到着した高句麗使を迎えるために東漢氏直糠児・葛城直難波が派遣された例があり、外交・迎客の役割を期待されていたものと思われる。先述のように、平群郡額田郷の地は河川交通の要所であり、往来者と接触・交流する機会も多く、額田部連も迎客・接客の技術を期待しての起用であったと見なしたい。

次にk・mは郊勞使としての額田部連比羅夫の活躍を示すものである。郊勞使は入京する客徒を郊外で迎え、入京・客館への安置を先導する役割で、延喜太政官式では一名を任命することになっているが、表2に読み取れるように、奈良時代には騎兵將軍を任命して騎兵（迎馬）を以て入京時の郊勞を行うのが通例であり、式制のような形は平安時代になってから現れたようである。k・mの郊勞は奈良時代のあり方と類似しており、奈良時代の郊勞が前代の方法を継承したものであったことが知られる。k・lの隋使に対する賓礼は、この時將來された隋の礼書『隋朝儀礼』に基づく中国風の礼であったといわれており、<sup>55</sup>事実、日本の遣唐使が長安に入京する際には飾馬で迎えられたとする記録が存する（『統紀』宝龜九年十一月乙卯条、『後紀』延暦二十四年六月乙巳条）。したがって飾馬による入京時の郊勞は中国の賓礼に学んだものであり、額田部連比羅夫は新しい礼法に基づく儀礼を滞りなく執行するだけの技量を有していたのであった。なお、平安時代の郊勞使に近衛府官人の起用例が多いのは、近衛が近侍官としての地位を高め、様々な勅使に任用されたためであり、<sup>56</sup>近衛には容儀も必要であり、客徒に与える印象にも配慮しての起用であろう。

額田部連比羅夫はkで礼辞を述べており、郊勞使に必要な客徒に与える印象（容儀）と儀礼を執行できる教養とを期待されての人選であったと考えられ、mでも再度登用されているのは、彼がそうした条件を満た

す人物であったことを如実に物語るものと言えよう。このような外交儀礼を行うに相応しい資質とともに、nの薬獵の部領使の例を合せると、比羅夫はいずれも騎馬を率いる役割を勤めていることが注目される。先述のように、額田部氏は生駒山東麓にあつて額田の馬と称される馬の飼育を行っており、馬に慣れ親しんでいたという伝統を有している。比羅夫の他に、mでは膳臣大伴、nでは粟田臣細目といったヤマト王権の大夫クラスの氏の人々も登用されており、彼らは飼馬や騎馬の伝統を有したかは不明であり、大夫クラスの典雅な資質を考慮してのものかと推定される。比羅夫だけが三度に亘る登用を受けており、その背景にはやはり額田の馬貢上に基づく氏族としての伝統が一つの要素をなしたと見るのがよいと思われる。

oの額田部連甥の法頭就任は、法頭が仏教統制の中央機関であったことを考えると、<sup>57</sup>額田部氏が仏教を崇拝し、仏教に関する知識も豊富であったことを窺わせ、外交儀礼への登用の背景にある教養のあり方を推定する材料となろう。また仏教崇拝は額田寺の建立と関係しないか否か興味深いところであるが、額田寺の檀越としての額田部氏の様相は後述することにした。

以上、六・七世紀の額田部連の活動を概観した。では、何故六世紀になつてヤマト王権における額田部連の活躍が始まるのであろうか。ここで額田部連の由来に戻ると、やはり額田部皇女（推古天皇）に奉仕する部の統括者という側面を考慮に入れねばなるまい。jの額田部連の登場は額田部皇女の誕生以後であり、額田部の管掌者となることによつてヤマト王権に出仕し、王権内での職務分担に与るといふ形が推定されることになる。k・nの推古朝における額田部連比羅夫の活躍も、実は推古即位という主人の地位上昇に伴つて、それに奉仕する人々も王権内での任務に関与するという構図に基づくのではないかと思われる。厩戸皇子と親しかった秦川勝が推古朝に活躍するのも、同様の事象と見ることが

できよう。またpによると、額田部湯坐連が蘇我倉山田石川麻呂事件で処罰されており、額田部氏と蘇我氏の関係が窺われる。推古天皇は蘇我稲目の女堅塩媛所生の皇女であり、「朕即自蘇我出之」（『書紀』推古三十二年十月癸卯朔条）と、蘇我氏出自たることを強く認識していた。すると、推古天皇に仕える額田部連の人々が蘇我氏と深いつながりを持つたとしても不思議ではなく、pに現れる人々は各々の理由で蘇我倉家との関係を形成したのであるが、額田部湯坐連に関しては推古―蘇我氏というラインを推定できると考えたい。<sup>58)</sup>

平安時代には、例えば嵯峨天皇の周りには東宮時代に仕えた人々が官人として登用された例があり、院政期には乳母の子や近臣が国政に関与することがしばしばあった。奈良時代でも、藤原仲麻呂は家令職員のを国司とし、国守たる自分の子息を補佐させており、家政と国政がオーバーラップする例を指摘することができる。<sup>59)</sup>その他、家令職員が国家の官職を兼帯していた例は多く、また選叙令帳内資人条には「凡帳内・資人等、才堪文武貢人者、亦聴貢奉。得第者、於内位叙。不第者、各還本主。」とあり、主人は自家の者を推挙することが可能であった。こうした律令制下の形は前代以来のあり方を継承するものではあるまいか。律令国家成立以前では、伝承的ながら、次の例も著名である。清寧紀によると、清寧には子がなく、後嗣となるべき者を捜しており、山部連小楯が見つけた市辺押磐皇子の子仁賢・顕宗兄弟を迎えたのである。小楯は「山部連先祖伊予来目部小楯」（『書紀』清寧二年十一月条）であり、実は来目部を称する者で、二皇子発見の賞与として山部の統括者になったのである。先に即位した弟顕宗の即位前紀分註所引「譜第」によると、弘計王Ⅱ顕宗天皇は別名を来目稚子と称したと記されており、小楯の活躍は来目稚子に仕える来目部としてのものではなかったかとも推定される所以である。<sup>60)</sup>

額田部の管掌者額田部連としての活動には不明の部分が多いが、額田

表3 冠位十二階の賜与者

大徳…	境部臣雄摩侶、 <u>小野臣妹子</u> 、大伴連咋子
小徳…	中臣連国・御食子、河辺臣禰受、物部依網連乙等、 波多臣広庭、近江脚身臣飯蓋、平群臣宇志・神手、 大宅臣軍、巨勢臣徳太・大海、粟田臣細目、秦造川勝、 高向史黒麻呂、大伴連馬飼・某、阿輩台（大河内直糠手カ）
大仁…	鞍作鳥、 <u>犬上君三田</u> 、薬師恵日、阿曇連比羅夫、 <u>秦造川勝</u> 、 土師婆婆連、上毛野君形名、矢田部御孺連公、船首王後、 膳臣清国、神主久遅良
小仁…	物部連兄麻呂
大礼…	<u>小野臣妹子</u> 、吉士雄成、 <u>犬上君御田</u> 、忌部首宇都庭磨、 哥多毗（額田部連比羅夫）
小礼…	鞍作福利
大信…	大部屋栖野古連公
大義…	坂上首名連、大三輪君弟隈
大智…	和邇部臣稚子
小智…	伊福部臣久遅良・都牟自

※下線は複数の冠位に見える人物で、昇叙したものと推定される。

部連が額田部皇女誕生後に初出し、推古天皇として即位後に外交儀礼や薬獵などの朝廷の行事で活躍していることから、その背景には額田部皇女に仕える額田部の統括者としてのあり方が存したものと考えたい。最後に、この額田部連のヤマト王権内での地位は如何程のものであったかに触れておく。その手がかりとなるのは、k・1の額田部連比羅夫Ⅱ哥多毗の大礼の冠位である。これは冠位十二階の第五番目であり、今、冠位十二階の賜与者を整理すると、表3のようになろう。<sup>61)</sup>冠位による区別はず儀式の際の服色や冠の装飾として可視的に示され（『書紀』推古十一年十二月壬申条、同十六年八月壬子条、所謂大化の薄葬令では墓築造の面などでも区別が存した（大化二年三月甲申条、表4）。表4で大礼以下が一括されていることからわかるように、仁位と礼位の間には大き

表4 大化の薄葬令

	墓	外域	役・日	帷帳	輜車
王以上	内長9尺、 濶5尺	方9尋・ 高5尋	1000人・7日	白布	有
上臣	〃	方7尋・ 高3尋	500人・5日	〃	—
下臣	〃	方5尋・ 高2尋半	250人・3日	〃	—
大仁・小仁	内長9尺、 高・濶4尺	封なし	100人・1日	〃	—
大礼以下 小智以上	〃	〃	50人・1日	〃	—
庶民	地に埋葬	—	—	麤布	—

な壁があり、仁位以上が後の五位以上に相当するものと考えられ、表3の冠位賜与者の例をみても、仁位以上にはヤマト王権の有力豪族、大夫クラスの人々が名を連ねている。冠位は個人に与えられるものではあるが、やはり氏族の位置づけも自ずと窺われるのである。つまり額田部連は冠位の上からは低い位置にあり、<sup>n</sup>で同じく葉狹の部領を勤めた粟田臣細目が後に小徳として現れる（皇極元年十二月甲午条）のと比べると、ヤマト王権内の中下級官人に留まったと言わざるを得ず、これが中小豪族額田部氏の限界であった。

以上、本章ではヤマト王権と額田部氏の関係を考えた。その結論を整理すると、次のようになる。

① 額田部連の由来は、五五四年生の欽明の子女額田部皇女（推古天皇）

の名代としての奉仕によるものと見るのがよい。部称の成立自体が欽明の子女と関係があると言われており、部民制の成立もこの時期と見なされる。

② 額田部連が名代として出仕する契機として、生駒山東麓の馬牧での飼馬従事、陸上・河川交通の要所たる額田の地での勢力確立が掲げられ、これを背景にヤマト王権の飼馬を担い、また額田部皇女の額田の宮へ奉仕することになったと考えられる。

③ 額田部連の活躍は推古朝において顕著であり、外交儀礼や貢馬の伝統を背景とした騎馬による奉仕が行われている。額田部皇女の名代の伴造として家政から国政へ進出した事例とすることができ。また蘇我氏出自の額田部皇女との関係から、蘇我氏とのつながりを持つ者もあった。

④ 但し、ヤマト王権内での位置づけは、中下級官人クラスで、中小豪族としての額田部氏の限界が窺われる。この点は、以下で検討する奈良時代以降の額田部氏の動向と符合するところである。

⑤ なお、額田部連が外交儀礼で活躍するのは、礼儀に通じる教養を持っていたこととともに、額田の地の立地から、外来者との接触が頻繁で、接客の技術などを有していたことも考慮される。また法頭への登用者の存在は、額田部氏と仏教との関わりを窺わせるものであり、額田寺の建立を考える材料となる。

以上で律令国家成立以前の額田部氏の考察を終え、次章では八世紀以降の動向や額田寺の檀越としての額田部氏のあり方などに言及したい。

### ③ 律令制下の額田部氏

本章では奈良時代以降の額田部氏の動向を探る。ヤマト王権での額田部連は中小豪族として位置づけられるものであった。では、律令官人と

しては如何であろうか。また前二章での考察では、在地豪族としての額田部氏の様相や額田寺との関係を究明することができなかった。「額田寺伽藍並条里図」の解説のためにも、豪族としての額田部氏のあり方を検討したいと考える。

## 1 律令官人としての動向

律令制下における額田部氏の動向については、系譜の検討の中で、額田部湯坐連息長・長吉、額田部河田連三當などの存在が知られることに触れた。彼らはいずれも外従五位下から五位に達する例で、それ以後の経歴は不明であるが、複姓の同族が外階コースをとり、五位到達を最高位とする中下級官人として位置づけられていたことがわかる。一方、額田部連(宿禰)に関しては、正史には『統紀』文武四年六月甲午条に進大弑(大初位上相当)額田部連林が見え、大宝律令撰定に与る者がいたことが知られるが、これ以外には例がない。額田部連は天武十三年に宿禰賜姓に与っている、連姓を称する林は傍流に属する人物であったのであろう。但し、外交儀礼や仏教など先進的知識を有した額田部連氏の伝統を背景に、律令撰定に参加したものと推定される。

以上のように、正史の中には額田部氏は殆ど姿を現さない。しかし、近年発掘が進む平城宮・京跡出土の木簡には額田部氏も散見しており、本節ではそれらの史料に依拠して、律令官人としての額田部氏の動向を考えることにしたい。

### (1) 中下級官人

平城宮・京木簡に登場する額田・額田部氏の史料は別掲の如くである。官職がわかるのは、舍人・史生・位子・近衛・衛士などであり、位階は初位ないし八位となっている。軍防令内六位条には「凡内六位以下、八位以上嫡子、年廿一以上、見無役任者、毎々京国官司。勘検知実、

責状簡試、分爲三等。儀容端正、工於書算、爲上等。身材強幹、便於弓馬、爲中等。身材劣弱、不識文算、爲下等。十二月卅日以前、上等・下等、送式部簡試、上等爲大舍人、下等爲使部。中等送兵部、試練爲兵衛。如不足者、通取庶子。」とあり、位子の大舍人・兵衛・使部への任用が規定されている。木簡に見える額田部氏の官職・位階はこの位子クラスの人々が登用されるものと類似しており、奈良時代の額田部氏が五位到達を最高位とする、六位・八位の中下級官人層をなしたことを如実に示す材料と評価したい。その他、表1によると、大宰府史生として額田部連君麻呂が見えるが、これも史生クラスであった。したがって律令官人としての額田部氏は、前代の中小豪族という位置づけを引き継ぎ、中下級官人層を形成したと考えることができ、五位に達する者も殆どなく、正史には登場しないと結論されるのである。

では、中下級官人としての奉仕は如何なるものであったか。西宮兵衛木簡および二条大路木簡の中に、門の警備に従事する額田部氏の様相が看取できるので、次にその検討を行いたい。

・ 梗田 甘宅宮

一□

・ 西給止申□□ (天地逆)

(額カ)

『藤原宮木簡』一—三六号

(八七)・(二四)・二〇八一

・ 各田□□ (アカ)

□

『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』六一八頁

・ □ 額田部男龍

・ 額田部男龍



『平城宮木簡』二二・二七六二号 (二三〇)・二二・一〇〇八一	各田ア林 (城三二一六) 〇九一
・松成舎人従八位上額田部嶋国	
・十月廿三日□□息主	
『平城宮木簡』三十三・三二二号 (二四五)・二九・二〇一九	
火頭若倭部足嶋 (額田部庸) (取カ)	
・葛木生 丈部嶋足衛士額田部小国	
衛□部嶋□	
衛 宅部□万呂 (息カ)	
・津守生火頭中臣廣成 (告カ) 生部□人 石部字人	
『平城宮木簡』三十三・五二九号 二二四・三五・三〇一一	
□□□□ (百上)	
額田部国万呂	
『平城宮木簡』四一四四九〇号 〇九一	
□田部家万呂 (額カ)	
『平城宮木簡』四一四五〇六号 〇九一	
・額田部小廣 (五十)	
『平城宮木簡』五一七四四九号 〇九一	
・額田部御□ 額田部□□	
(城一〇一五) 〇一九	
	□□□□ (山階カ) 豊人
	□□□□マ万呂 合三人受廣 (省カ)
	□□十三日史生額田□長三升 (月カ)
	(城一八一四) (三三三)・(二二)・三〇八一
	□□初位下額田部□□ (城一九一三三) (九七)・(八)・三〇八一
	・召勝烈斯 (額田マ諸羽) (公嵯城五月) 尾塞古万呂
	八歳十月七日宇治 (城一九一四) 二六〇・(二八)・七三〇八一
	位下額田部 (城一九一三〇) 〇九一
	□□□□ (大初位下額カ)
	『平城宮木簡』四一四四三三三 〇九一
	□□位子額田
	『平城宮木簡』四一四四八一号 (二七二)・(五九)・六〇八一 *式部省移の横材木簡に多数の人名とともに見える

〔初カ〕  
〔田カ〕  
□□位下額□

『平城宮木簡』四―四四八九号 ○九一

□額田□□

『平城宮木簡』四―四四九一号 ○九一

〔額田カ〕  
□□

『平城宮木簡』四―五三七五号 ○九一

阿倍枚万呂八

丸部駿河万呂一升一

秦已知万呂八

□乃秋一升一 上毛野力八

〔津カ〕  
〔繼カ〕  
□□真□八

山口乙万呂一升一

〔諸カ〕  
秦□万呂八

〔更カ〕  
□占真立八

近衛

山口廣濱八

□□八

額田乙勝八

水取継成八

□□□八

□□□山四

茨田弥継八

『平城宮木簡』三―三三〇八号 (三三四)・(五八)・二〇一九

〔万呂カ〕  
□□□□□□□□『初位額田白麻呂』

『平城宮木簡』四―四四九二号 ○九一

(2) 門の警備

平城宮・京木簡の中には門の警備の具体的なあり方を解明し得る史料が存しており、西宮兵衛木簡および近年出土した二条大路木簡中の門関係の木簡にまとまった材料を採取することができる。

・東三門 額田 林 神 北門 日下部 北府 服 漆部 秦 縣 大伴

・合十人 五月九日食司日下部太万呂状

『平城宮木簡』一―一〇〇号 一八八・二三・二〇二一

東三門 額田 丹比 茨田 錦部

『平城宮木簡』一―一〇二号 (二二六)・(二七)・三〇一九

・東一 君子 二 額田 合

合

『平城宮木簡』一―一三三号 (一一〇)・三三・三〇一九

・北門 安宿 紀伊 額田 檜前 合四人

・三門 尾張 鴨田 川上 大私 合四人

(城三一―一三) (一三三)・一五・三〇一九

・二門 川合 額田部 額田 高 白髪部 右六人常食給申

八月廿一日

(城二四―一三) (二六八)・三一・三〇一九

・☐門 川合 額田 額田部 三宅 大伴 出庭  
白鳥 安刀 長谷部 下乙兄 大藏  
・右十一人常食欲

(城二四―一三) 二〇九・三四・三〇二

・山口 額田 額田部 大伴 下 出庭 阿斗  
・☐合十四人 受食一斗四升

(城二四―一四) (二七九)・一五・四〇一九

・二門 川合 下 大伴 阿刀 間人  
額田 三宅 額田部 白鳥

・長谷部 并十人

(城二九―一五) (二九七)・二七・四〇二

・二門常食給 額田 白鳥 額田部  
川合 下 三宅

・長谷部 阿刀 右九人  
大伴

(城二九―一五) 一八三・一八・五〇二

・二門 川合 白鳥 三宅 (額カ)  
額田 阿刀 大伴 (長谷カ)

・下并九人

(城二九―一五) (二〇六)・二三・三〇八一

・二門 ☐☐☐☐  
(額田カ)

☐☐ 并九人

(城二九―一五) (二四二)・一九・三〇一九

・二門 雪 (画カ)  
下毛野 書師

・鳥取 石作 下番 ☐田 (額カ)  
佐伯 大伴 ☐

(城二九―一五) 一四〇・二七・二〇二

・二門 川合 額田  
・今依 ☐食 ☐

(城二九―一六) (九五)・二四・三〇一九

☐☐ (門カ) 大伴 ☐☐ 額田 下 ☐☐ (画師カ)

(城二九―一七) (二八三)・八・三〇八一

門の警備のあり方に関しては、別稿を参照していただくことにし、ここでは先にも触れた額田氏と額田部氏の明確な区別を強調しておきたい。西宮兵衛木簡の段階では史料も少なく、木簡に登場する氏が額田氏か額田部氏かは断定できなかったが、二条大路木簡の出土により、両者は明確に区別されていたと見なされる。一つの木簡の中で額田と額田部が書き分けられていること、もし同番中に同姓者がいた場合は、

・翼所 笑原 大倭乙 刑部  
薦集 大倭上 乙訓

・右 ☐人 ☐ (六カ)

(城二九―一七) 一七一・一九・四〇二

のように、大倭上万呂、乙(弟)虫(城二九一八)を区別しており、額田・額田部が同姓者の区別に基づく表記ではないことなどが根拠である。したがって額田、額田部氏ともに宮内の門や皇后宮の門を警備する兵衛を出す氏であったことが知られる<sup>⑤</sup>。兵衛はa郡領子弟、b内六位以下八位以上の嫡子で年二十一才以上・見無役任者のうちの中等着から任用するものであり、後述のように、額田部氏は平群郡の郡領氏族でもあったと考えられるので、aでも合致するが、bとすれば、前項で触れた律令官人としての額田部氏の位置づけと正に符合するものとなる。

その他、『日本古代人名辞典』によると、東大寺写経所、造東大寺司、造石山寺司などで経師や雇夫として勤務する額田部姓の者も知られる。必ずしも額田部連(宿禰)氏の者とは断定できないが、いづれにしても律令制下の額田部氏が中下級官人層の一員であったことはまちがいないのである。

なお、次の史料は各々の地に本拠を構えて平城京に中下級官人として出仕していた人々を役所に召喚する文書であると考えられる<sup>⑦</sup>。特に都の存した大和国ではこのような形態での勤務も可能であったであろう。

津嶋連生石	春日掠人生村 宇太郡
・召急 山部宿禰東人 平群郡	三宅連足嶋 山邊郡
忍海連宮立 忍海郡	大豆造今志 廣背郡
刑部造兄人	和銅六年五月十日使葦屋
・小長谷連赤麻呂	右九人 掠人大田充食馬
小長谷連荒當 志貴上郡	

(城六一五) 〇一一

とすると、中下級官人としての額田部氏の人々も、平群郡額田郷に本拠地を置きながら、平城京に勤務するという形がとられたのではなかった

かと推定される。

### (3) 長屋王家との関係

次に近年出土した長屋王家木簡の中に、額田部氏の姿が散見するので、王・貴族家と中小豪族との関係という視点で、長屋王家と額田部氏の間がに触れてみたい<sup>⑧</sup>。

資人各田部連

(城二八一九) 〇九一

・ 木上進 供養分米六斗  
・ 各田部逆 七月四日秦廣嶋  
甥万呂

(城二二一〇) 一五二・二二・三 〇一一

・ 木上進糯米四斛 各田部逆  
・ 十二月廿一日忍海安麻呂

(城二二一〇) 二〇八・二九・五 〇一一

長屋王家木簡に現れる額田部氏は、資人額田部連と木上より米などを運搬した額田部逆の二人である。前者は長屋王家木簡の中で「資人」表記が出て来る数少ない例として貴重であるが、ともかくも額田部連が長屋王家に帳内・資人として仕えていたことを示す。畿内では山背国愛宕郡出雲郷には中下級官人や帳内・資人として勤務する者が多く、中下級官人の出身地を窺わせる著名な例であり、長屋王家にも左大臣資人出雲臣忍人、北宮帳内出雲臣安麻呂(『大日本古文書』一一三六四・三三六七、城二五二二八)の二名が仕えていた。大和国平群郡額田郷の額田部連(宿禰)に関しても、王・貴族家に出仕する者がいるということは、こう

した中下級官人クラスの氏と王臣家とのつながりを示す事例として興味深いものとなる。ここでは畿内中小豪族の生き方として、中下級官人としての国家への奉仕以外に、王臣家に仕えるという道もあったことを指摘しておきたい。

次に額田部氏には、長屋王家の邸外の機関に勤務する者も存した。木上は奈良県北葛城郡広陵町の地（和名抄）広瀬郡城戸郷に比定され、長屋王の父高市皇子以来、長屋王家と関係を有した土地であり、木上司と称する機構が置かれていた。<sup>70</sup> 木上司は、長屋王家の家政の中核を担う帳内・資人クラスの者が管理者として派遣され、いわゆる直接経営によって運営される田庄的所有の下にあった。<sup>71</sup> 額田部逆は管理者ではなく、他の木簡では「持丁」と表現される物資運搬者として登場しており、いわば雑仕者、下働きの存在であるが、田庄の実際の経営にはそういった人々の掌握も重要である。木上司は額田郷からは一〇キロメートル程南に存し、広瀬郡城戸郷の範囲に入っており、額田の地とは郡を異にしている。とすると、平群郡に近接する地域まで額田部氏が進出していたのであろうか。先述のように、広瀬郡の地は六世紀に敏達系皇族が進出して、斑鳩を中心とする用明系の上宮王家と対抗する拠点ともなったといわれ、開発の可能性があるところであった。<sup>72</sup> この進出は広姫の子押坂彦人大兄皇子によって行われたものであるが、広姫死後に敏達皇后となつた額田部皇女（推古天皇）の子小墾田皇女は彦人大兄に嫁しており、あるいは額田部皇女のラインから、額田部氏がこの地域に進出する契機があつたのではないかと憶測される。その後、彦人大兄―舒明―天武の流れをくむ長屋王家の木上進出に伴って、額田部氏が長屋王家の田庄に関与するようになったとなるが、以上の点はあくまで想像に留めておく。なお、律令国家成立以前の平群郡地域の様相については、次節でも触れることにしたい。

以上、律令官人としての額田部氏の動向について整理し、中下級官人として国家に奉仕するだけでなく、長屋王家などの王臣家に奉仕する方法も存したことを示した。このようなあり方は、朝廷への奉仕と同時に、額田の宮や蘇我倉家との関係を有することに窺える、ヤマト王権下の額田部氏の存在形態とも共通する面を持っており、畿内中小豪族がとった生き方の一つを物語るものと評価できよう。一方、畿内には在地首長制の要素が少ないと言われるものの、<sup>73</sup> 畿内中小豪族には在地豪族、郡司としての生き方もあつた。そこで、次に在地豪族としての額田部氏のあり方、在地社会や額田寺との関係などの検討に進みたい。

## 2 在地豪族額田部氏

本節では在地豪族としての額田部氏の姿を整理する。「額田寺伽藍並条里図」には「船臺〈額田部宿禰先祖〉」とあり、額田部連（宿禰）が代々この地に豪族として勢力を築いてきたことはまちがいないと考える。しかし、先述のように、『新撰姓氏録』では大和国には僅かに額田部河田連が記されているだけであり、この氏を額田寺の檀越とする意見も呈される程である。額田部河田連の位置づけについては先に触れた通りであるが、この地における額田部連（宿禰）のあり方は如何であったか。長屋王家木簡に見える額田部氏の広瀬郡への進出や先に触れた律令国家成立以前の額田の地域の範囲なども、額田部連（宿禰）の勢力を考える上で考慮しなければならない。以下、平群郡内での位置、郡領氏族としての存否や額田寺の檀越としての活動などから、在地豪族額田部氏の存在形態を明らかにしたいと思う。

### （1）平群郡内での位置

平群郡は那珂・飽波・平群・夜麻・坂門・額田の六郷から成る郡である。しかし、『書紀』天武五年四月辛丑条には「飽波郡」が見え、法隆寺

系遺品の幡銘の「阿久奈弥評君女子為父母作幡」(『書陵部紀要』二九)の出現と相俟って、七世紀後半には平群評と飽波評とが存したものと考えられている。飽波評の範囲については、飽波郷、額田郷とする見解<sup>75</sup>、飽波・夜麻・坂門・額田郷など平群郡のうちの国中平野に属する地域とする見解があるが、平群郡は郡西部の平群谷を中心とする平群評と飽波評が合体して成立したと見てまちがいないであろう。飽波評は律令制下の郡にすぎない数少ない事例であり(他には伊場木簡二一〇号の駅評がある)、評制の意義を考える上で興味深い材料を呈するが、この点は措くとして、今、その範囲について言えば、後者の説を支持したいと思う。既に指摘されているように、飽波評は上宮王家の飽波葦原宮(膳菩岐々美郎女所生泊瀬王宮)や律令制下にも存した飽波宮と関係して設定されたものであり、上宮王家と結びつきの深い斑鳩地域も含んだ方がよいこと、平群郡の式内社は殆どが平群郷・那珂郷の地域に比定され、平群谷という独立した空間、平群氏独自の支配領域が平群評を形成し、その勢力の及ばない国中平野は新たな開発地として独自の地域をなす余地があったことなどが論拠となる。

但し、ここで先述の額田の地域の広がりの問題を考慮しなければならぬ。表1のように、大和国における額田部および額田(額田村主カ)氏の分布は、平群郡額田郷以外に、添下郡、広瀬郡、城上郡、山辺郡に見られる。これらのうち、額田の地域の範囲という点では、隣接する平群郡額田郷と添下郡、山辺郡額田邑の関係が注目されよう。先述のように、添下郡と山辺郡は額田河田連による皮革関係者の統括を通じて、額田部連氏の勢力下にあつたものと思われ、その他、『新撰姓氏録』大和国皇別・布留宿禰条には石上神社を管掌した布留宿禰氏の斉明朝頃の人に額田臣が知られ、山辺郡における額田の地域の広がりとの関係を推測させる材料となる。したがって額田部連氏の勢力範囲は律令制下の平群郡額田郷よりも広大であつた可能性が高く、あるいは飽波評域も額田部連

氏の勢力圏に合わせて、所布評や山辺評の地域の一部を含むものであつたと推定されるのである。

平群郡の由来と構成を以上のように考え、次に氏族構成を整理してみたい。先学の研究を参考にして、各郷別に居住氏族を示すと、表5のようになる。これらのうち、山部連、大原氏は幡銘や經典奥書などによって法隆寺と密接な関係にあつたとされており、その他、膳臣、調使など上宮王家と関係の深い氏名も登場する。しかし、各豪族の位置づけを明らかにできる材料は殆どなく、額田部氏についても、郡司就任の事実に着目して検討するしかあるまい。

『平安遺文』一六三号貞観十二年四月二十三日某郷長解写

郡判

兼擬大領從七位上三嶋県主「宗人」擬主帳額田部

「□」領無位高志連「繼俊」副擬主帳平群「糸主」

『平安遺文』二三一号延長六年十二月十七日内供奉十禪師禪果弟子等解

八条九里三十六坪・十里一坪に所在する土地の四至記載

「限北岑并額田部吉雄山」

郡判

国司代内豎大中臣 擬主帳平群

国目代平群「弟臣」

菅原

檢校河内

大領豊科「安永」

少領額田部「茂業」

擬少領大石

『平安遺文』二五九号天曆六年十一月二十五日安岑高村家地売券

天曆十一年十一月二十三日平群郡の郡判

大領兼惣行事額田部「茂業」

表5 平群郡の豪族

	豪 族 名
那珂郷	
平群郷	平群臣（朝臣）、早良臣、馬工連 都菩（保）臣（朝臣）、紀臣（朝臣）* 石川朝臣*、発勢朝臣*、穂積朝臣*、高井連*、 間人宿禰*、三嶋県主、高志連、三統宿禰*、
飽波郷	飽波村主、飽波漢人、阿久奈弥評君、膳臣 ？阿刀連（宿禰）、阿刀物部、？中臣熊凝連（宿禰）
夜麻郷	山部連（宿禰）、？岡本臣、大窪史
坂門郷	大原史、？坂戸物部、坂戸連
額田郷	額田部連（宿禰）、額田部河田連、 額田村主、額田邑熟皮高麗、大中臣*、 ？巨勢臣（朝臣）、中臣連（朝臣）、調使、日根連
不明	五百井造*、大石村主*、菅原、河内、豊科、宇自可、 年〔 〕、多治

（\*は保証刀禰として見える氏、下線は郡司）

行事内豎五百井  
権行事右兵衛平群

平群郡の郡司に関しては八世紀の史料はなく、九世紀後半以降に散見している<sup>⑧</sup>。この時期の畿内、特に大和国の通例として、元来の譜第郡領氏族とは思えない氏の者が擬任郡司、雑色人郡司（国衙官人郡司）などとして登場しているが、平群氏と額田部氏が貫して郡司に名を連ねていることは大いに注目される。郡司として登場する他の人々は平群郡との関係が不明なものが殆どで、単発的に登場するので、在地との関係、勢力などはわからない。確証はないが、平群氏と額田部氏が八世紀以来の譜第郡領であつた可能性は高いと考える。とすると、先述の平群郡における旧平群評地域と旧飽波評地域のあり方、長屋王家の木上司と額田部氏の関係などを考慮して、額田部氏は旧飽波評地域、つまり平群郡の

国中平野部を代表する有力豪族であつたと見ることができるとはあるまいか。郡名に平群の名称が採用されたのは、平群氏の勢威の方が強かつたためとも憶測されるが、やはり旧飽波評地域では額田部氏の伝統的な勢力が保持されたものと推定される。

但し、平群郡域の古墳分布としては、平群谷地域、斑鳩地域、額田部丘陵の三つの中心が指摘され（図1）、後二者が飽波評域にあたる。とすると、額田部連氏が勢力を有したと考えられる飽波評域には額田部連氏以外の勢力も存したことになる、もうひとつの政治勢力との関係はどうであつたかにも言及しておかねばならない。周知のように、評には督・助督が存し、同氏である場合もあるが、各々別氏である場合もあった。斑鳩地域の古墳との関係は不明であるが、法隆寺系遺品の幡銘には「山部五十戸」や「山部殿」・「山部名嶋弓古連公」などが見え、山部連氏が有力豪族として存した可能性を想定したい。幡銘の中に「阿久奈弥評君女子為父母作幡」とある阿久奈弥評君の氏姓は不詳とせねばならないが、同じ幡銘中に登場する山部連との関係は推定できないであろうか。山部連（宿禰）は先掲の平城宮木簡により、奈良時代にも平群郡山部郷を本拠地としたことが知られ、もと山部の中央伴造で、中下級官人としての奉仕を続ける（『日本古代人名辞典』によると、六位程度の中下級官人や写経生の例などが知られる）という点で、額田部連（宿禰）と同規模の豪族であつたと考えられる。したがつてこの山部連氏を額田部連氏と並ぶ飽波評域のもうひとつの有力豪族に比定してみたい。山部連氏が律令制下の郡司として存続しないのは、その勢力基盤となる斑鳩地域での法隆寺の勢力故に在地豪族として発展が困難であり、律令官人への転身に邁進したためではないかと考えられ、独自の勢力基盤を有する額田部連氏が郡領としての展開を可能にした条件とは何であつたか。次にその点の考察に進むことにしよう。

(2) 額田寺の檀越

「額田寺伽藍並条里図」の額田寺の北には「船墓（額田部宿禰先祖）」の記載があり、寺院が古墳に代わって豪族の権威を示すものとして建造されたという見解に従うならば、額田寺の建立は額田部連（宿禰）の手によって行われたことはまちがいないと思われる。この額田部氏は平群郡の郡領氏族であり、古墳時代以来、当地に勢力を築いてきた。では、額田部氏と額田寺の関係はどのようなものであったのだろうか。この点を直接に検討できる材料はないが、他の寺院と檀越の関係などを参考にしながら、「額田寺伽藍並条里図」の記載を手がかりに考察を試みることにしたい。額田部氏が郡領氏族であることは確かであるが、その勢力のあり方や経済基盤などは不明であり、檀越としての様相を検討することによって、そのような側面にも触れることができるのではないかと期待される。

寺院檀越のあり方がわかるのは、諸法令と『日本霊異記』であろう。額田寺は定額寺であったか否かも不明で、寺院としての位置づけは難しいが、『日本霊異記』には村落レベルの寺院も登場し、額田寺とその檀越との関係を推測する材料となると考える。檀越はまず寺院建立者ないしその子孫であり（『日本霊異記』上巻第七・十七話、中巻第九話、下巻第二十三・二十八・三十話、『三代格』卷三大同元年八月二十二日官符）、それ故に寺院に対して大きな権限を持っていた。『日本霊異記』では檀越が寺物を利用し、返却しないとする話が散見し（中巻第九・三十二話、下巻第二十三話）、法令類にも「檀越子孫惣撰田畝、専養妻子、不供衆僧」（『三代格』卷三靈龜二年五月十七日太政官謹奏）、「有犯之僧縦任三綱、寺田之類恣情売買、事多奸濫」（延暦二十四年正月三日官符）、「檀越等種佃寺田不納租米、或費燈分稻不燃夜燈、或貸用錢物經年不還、或驅使牛馬兼役家人」・「寺山樹木任意斫損、愛憎自由改補三綱」（大同元年八月二十七日官符）などと非難されており、寺

物・寺田の運営や寺僧の人事にまで介入していたようである。そうした事柄をめぐって檀越と寺僧が対立し、殺人にまで発展する事件も起きることになる（『日本霊異記』下巻第二十三話、『続紀』宝字七年十一月丁酉条、『三代実録』元慶六年八月二十三日条）。但し、こうしたマイナス面だけではなく、檀越が大般若經書写を発願した話（『日本霊異記』下巻第二十三話）や夏安居に都から僧侶を招く話（『日本霊異記』上巻第十一話）など、寺院の宗教活動に寄与している例もあり、寺院運営において檀越の果たす役割は大きかったと評価できる。法令類でも、「其所有財物田園、並須國師・衆僧及國司・檀越等相對檢校、分明案記、充用之日、共判出付」（靈龜二年五月十七日太政官奏）、「凡寺家流例自在三綱・檀越、相共行其雜務」（貞觀十三年九月七日官符）、「檀越有可勾當寺内雜事者、聽令暫入」（後紀）弘仁三年四月癸卯条）などが見え、檀越が寺院の運営・経営に関与するのは違法な行為ではなかった。また延喜刑部式には良賤の裁判の時、「主若寺檀越」が列席するとあり、檀越が寺院を代表する例も掲げることができる。

以上のような檀越の姿を具体的に示す話を一つ掲げよう。『日本霊異記』中巻第三十二話によると、紀伊国名草郡三上村の薬王寺（勢多寺）では、檀越岡田村主氏による出挙活動が行われていた。その方法は、薬王寺の「薬料物」を岡田村主姑女の家へ委託して、酒の醸造と利息徴収を行わせるという出挙の全過程を請負わせるものであり、「薬料物」も姑女の家で倉庫で保管されていたと推定される。この薬分の酒二斗を借りて、酒債を負ったまま死去した桜村の物部麿は、死後牛となり、薬王寺で五年間役使されており、あと三年間の苦役が残っている旨を檀越岡田村主石人の夢の中で訴え、石人は寺僧浄達や他の檀越と相談し、麿のために誦經を修してやったところ、間もなく牛は寺から姿を消した、というのが話の結末である。ここでは酒債を負った麿が役使されたのが薬王寺であることから、檀越は自家に移された「薬料物」を横領した訳ではなく、「薬



料物」はあくまでも寺院の物であったことがわかる。一方、磨が牛となつた苦しみを訴えたのは檀越岡田村主氏であることは、実際の寺院経営を担うのが檀越であつたことを如実に物語つていよう。なお、その他、郡司級豪族の寺院の出挙への参画例として、観世音寺奴婢帳の筑前国早良郡の三宅連氏が掲げられる(『大日本古文書』一四―二六八―二七四)。

以上の檀越のあり方を参考にして、額田寺と額田部氏の関係を考えることにしたい。「額田寺伽藍並条里図」によると、額田寺の寺地は主要伽藍三町七段余、東方の雑舎の院一町三段二一四歩の計五町一段余となり、東南の南院・馬屋と記された一画と合せると、六町くらいになると推定される。そして、寺院の周囲には寺田・畠・林・墾田・岡・池が広がり、北方の丘陵部には「船墓」を始めとする額田部氏の墳墓が存するという景観になっている。では、これらの土地や寺院伽藍の由来は如何であつたろうか。ここではまず寺院資財帳が残るもののうち、広隆寺を比較対象として取り上げたい。南都の大寺はとも比較とはならず、額田寺と同様、古代氏族の氏寺であり、八世紀以前から存在する広隆寺だけが僅かに対照可能な例と考える<sup>85</sup>。

広隆寺は山城国葛野郡に存し、葛野郡の譜第郡司でもある秦氏の氏寺である。秦氏は中下級官人を輩出する氏としても著名であり、この点でも中下級官人・郡領氏族という額田部氏と共通する側面を持つ。また創建に関わつた秦河勝は厩戸皇子と密接な関係を有した人物であり、推古朝における額田部連氏の活躍と様相が相似する。『平安遺文』一六八号広隆寺資財帳(貞観十五年)、一七五号広隆寺資財交替実録帳(仁和三年)によると、広隆寺の寺院地は六町で(二七五号)、額田寺と規模も近く、また寺院周辺に寺田・畠などが広がる点も相似する。広隆寺は弘仁九年の火災で堂塔・歩廊が焼失し、僅かに東・西・南の大門、四面の築地が残つたとされており、資財帳に見えるのは承和頃の再興後の姿であるというが、基本的な立地はそれ以前のものであると踏襲していると推定される。

また秦氏は長岡京・平安京遷都に尽力し、藤原氏とも婚姻関係を結ぶなど、氏としての勢力や広隆寺に対する檀越、あるいは国家の保護という点で、額田部氏とは比較にならないという懸念もあるが、『日本高僧伝要文抄』第三延暦僧録第五守真居士伝によると、藤原魚名は「又於額田寺一年例安居行道」したとあり、額田寺にも奈良時代において他氏の者の崇拜・関与が見られる。また『統紀』宝字元年七月庚戌条には、橘奈良麻呂の乱の計画の一つに、賀茂角足が高麗福信・奈貴王・坂上荊田麻呂・巨勢苗麿・牡鹿嶋足らを「額田部宅」で飲酒させ、足留めして、乱平定に向かわせないようにするというものがあり、この「額田部宅」を平群郡額田郷に存したと見れば、「額田寺伽藍並条里図」に登場する巨勢朝臣古麻呂・中臣朝臣毛人など王臣諸家の田地の所在と合せて、額田の地には王臣家の進出も窺われる。とすると、額田寺は額田部氏の氏寺という以外に、国家から何らかの位置づけを与えられた可能性があり、広隆寺と類似の様相を想定することもできるのではあるまいか。豪族の氏寺という側面を些かなりとも継承している例が他にないので、敢えて広隆寺との比較を試み、額田寺について検討する手がかりを得ることができればと思う次第である。

表6によると、広隆寺の伽藍は堂町、政所町、倉町の三区画に分かれ、それに別院が付属する形になっており、額田寺の伽藍も西方の主要伽藍が存する堂町、東方の「東太衆」やその西の竈屋・食殿を含む政所町、その北の倉町、そして、南に存する別院たる「南院」というように、同様の構成をとるものであつたことがわかる。広隆寺の場合は、先述の秦氏の政治的な地位や山城国に存し、都に近接する名刹としての評価もあつてか、必ずしも秦氏との関係が推定できない人物も多くの寺物や建物を寄進しているが、別院の塔院の建立者秦忌寸養丸・帶主父子を始め、秦氏の人々も様々な寄進を行っている。承和の復興の中心となつたとされる道昌は讃岐国香川郡の秦氏出身である(『三代実録』貞観十七年二月

表6 広隆寺の伽藍と寺物寄進者

	建物名	基本構造	備考		建物名	基本構造	備考
寺院地 6町	築地	東60丈・南87丈・西78丈・北90丈	南は23丈が瓦葺、その他はすべて板葺	別院 塔院	三重塔	檜皮葺	秦忌寸菰丸・帶主父子が建立
堂町	金堂	檜皮葺5間、4面庇	懸半部は別当玄虚が造加		堂	檜皮葺3間 板葺5間(→7間)、 1面庇	
	歩廊	檜皮葺、廻50間			南門	檜皮葺	
	中門	檜皮葺		般若院	堂	檜皮葺3間、4面庇・ 前庇1面	榎井朝臣嶋長が建立
	講法堂	檜皮葺5間、4面庇	鐘は僧都道昌の発願 藤原朝臣藤嗣*が奉納		僧房	板葺5間、3面庇 板葺7間、1面庇	
	鐘樓	檜皮葺5間、2面庇	168号では11間	寺東院	屋	檜皮葺5間、4面庇 7間	道昌が建立 (175号のみに見える)
	食堂	檜皮葺9間、西妻庇			前礼堂	板葺5間(→11間)、 4面(→3面)庇	
	僧房	板葺9間、2面庇 (南北) 板葺6間、2面庇 (南北) 板葺6間、3面庇 (南北+?)			僧房	板葺5間、3面庇 板葺3間、1面庇	(175号のみに見える) (168号のみに見える)
	宝蔵南倉	檜皮葺			屋	檜皮葺	
	北倉	檜皮葺			倉	板葺	
政所町	長倉	檜皮葺、隔5間	公廨倉か		倉	板葺	
	倉	草葺(→板葺)		新堂院	門屋	板葺	
	甲小居倉		168号に新造とある		堂	檜皮葺5間、4面庇 7間	(175号のみに見える)
	政所片屋	板葺7間、2面庇			前礼堂	板葺5間	大別当玄虚が建立
	厨屋	板葺11間、北庇			屋	檜皮葺5間、4面庇・ 前庇	在原朝臣行平が建立
	大炊屋	板葺5間、2面庇			堂	檜皮葺5間、4面庇・ 前庇	
	湯屋	板葺5間、1面庇			僧房	檜皮葺13間、4面庇	
	厩屋	板葺5間、1面庇	(政所中門か)		倉	檜皮葺	
	門屋	板葺			屋	板葺5間、3面庇	
	客房	板葺5間、2面庇 (南北)	2合(1合受20石、1合受9石)	寺物(仏像、經典、その他)の寄進者 仁明天皇、文徳天皇、女御(仁明)藤原朝臣息子、尚侍(清和)源朝臣全子(嵯峨源氏、母は当麻治田麻呂の女、源潔姫の同母妹)、尚蔵永原御息所(淳和女御永原原姫カ)、安倍弟澄命婦、城部淡海刀自、大別当玄虚、大僧都実敏(西大寺僧、尾張国愛知郡物部氏出身)、少別当玄秀、寺主玄寛、朱雀院禪師親王、僧都道昌(讃岐国香川郡秦氏出身、承和の復興の中心人物)、榎井朝臣嶋長、都宿禰貞繼、紀真安良、良階貞範、秦宿禰貞棟、秦忌寸安宗、秦忌寸雪持、秦忌寸貞吉			
	倉代						
	南大門	檜皮葺	新堂の前に立っている				
	東大門	檜皮葺					
	西大門	檜皮葺					
倉町	東一倉	草葺	寺家以西畠に所在				
	東二倉	草葺					
	東三倉	草葺(→板葺)					
	小倉	板葺					

※『平安遺文』168号、175号を併考して作成。異同は注記した。

\* 藤原藤嗣は魚名の三男鷲取の子、母は藤原良繼女。

九日条卒伝)が、やはり秦氏ということで広隆寺の復興に尽力したのであろう。とすると、額田寺の別院南院は主要伽藍建立後に、額田部氏の者が寄進した可能性も高く、檀越額田部氏が額田寺の伽藍整備に寄与したことが想像される。

次に寺周辺の寺田・畠などの意味について言及したい。周辺の土地の種類と面積は次の通りである。

a 田・畠：寺田二町一段一六五歩、寺畠二町六四歩

b 寺院とその近辺の土地：寺院五町一段一八七歩、垣内田三〇八歩・

垣陸田一段二八歩、寺厩田六段二三四歩、竈門田一二五歩、槻本田

四段二〇歩(小計一町二段三五五歩)

c 林：寺林七段七二歩、寺楊原一町五段一二三歩、寺栗林七段一八歩、

橡林二三五歩(小計三町一〇七歩)

d 墾田：寺田墾三〇歩、寺新家田三段二二〇歩、寺小荒木田一町一二

〇歩(小計一町四段一〇歩)

e 岡：寺岡九町二段六二歩

f 池：寺小手池、池心六段一二〇歩(寺院地以外の合計一九町七段一

六三歩)

先掲の広隆寺の寺院地六町、水陸田五八町一段二七八歩(二七五号)に対して、寺院地はそれ程差がないが、額田寺の周辺の土地は一九町七段一六三歩とかなり少なく、またその半分くらいは岡であり、額田寺にとって船墓の所在する北方の岡の重要性を窺わせる数字である。また寺院周辺の林も三町余と大きなウエイトを占める。こうした山川藪沢については、『書紀』大化元年九月甲申条「其臣連等・伴造・国造各置己民、恣情驅使、又割国県山海林野池田、以為己財、争戦不已、或者兼併数万頃田、或者全無容針少地」と非難され、八・九世紀にも度々山野占拠の禁止令が出されている。但し、『三代格』卷十六慶雲三年三月十四日詔に「但氏々祖墓及百姓宅辺、栽樹為林、并周二三十許歩不在

禁限焉」、延暦十七年十二月八日官符に「但元来相伝加功成林非民要地者、量主貴賤五町以下作差許之。墓地・牧地不在制限。但牧無馬者亦從取還。若以嶋為牧者、除草之外勿妨民業」、大同元年八月二十五日官符「但宅辺側近元来加功、栽栗為林者、准上条量主貴賤許之」などであり、氏々祖墓の周辺や宅辺の林は一定面積の範囲で占有が認められていた。また額田部氏との関係では、先述のように飼馬との関係を想定できるとすれば、牧地としての北方の丘陵部の利用如何も注目されるのであるが、「額田寺並伽藍条里図」からはこの点を読み取ることができないので、憶説を記すに留めておく。

先述のように、額田部氏が平群郡の郡領とすると、国家的給付は職分田六町ないし四町であり(田令職分田条)、額田寺の寺田等と比べてはるかに少ない額である。畿外の郡司には墾田一〇〇町を東大寺に寄進した越前国足羽郡大領生江臣東人や『統紀』宝字五年二月戊午条「越前国加賀郡少領道公勝石、出奉私稻六万束、以其違勅、没利稻三万束」のように、大規模な開墾や出奉経営を行う例があるが、在地首長としての側面が弱い畿内の郡司にはそのような経営の展開は困難であらう。一方、『統紀』天平十八年三月戊辰条「太政官处分、凡寺家買地、律令所禁、比年之間、占買繁多、於理商量、深乖憲法、宜令京及畿内嚴加禁制」、五月庚申条「禁諸寺競買百姓墾田及園地、永為寺地」などであり、先に触れた檀越の行為に関する法令の中にも、畿内を対象としたものもあり(『三代格』卷二延暦二十四年正月三日官符、大同元年八月二十二日官符)、「私立道場、及將田宅園地捨施、并売易寺」ことを禁ずる法令も見えている(卷十九延暦二年六月十日官符)。額田部氏が郡司職分田以外にどれ程の土地を有していたかは不明であるが、上述の寺田や寺物に対する檀越の関与や寺院に関わる経済活動の存在から考えて、額田部氏にとって額田寺の存在やその周辺の土地は極めて重要な経済基盤となり得たと推定される。また寺院北方の丘陵部は「氏々祖墓」に該当す

る「船墓（額田部宿禰先祖）」を始めとする額田部氏の墳墓が存在しており、その存在も周辺の土地を占有する根拠となつたと考えられ、また牧地や将来の開墾地としての価値もあつたと見なされる<sup>⑧</sup>。したがって額田寺は額田部氏と密接不可分のものであり、豪族額田部氏の權威を支えるとともに、経済的な価値も大きなものであつたと見ることができよう。

以上、本節では、平群郡の譜第郡領氏族としての額田部氏の位置、額田寺の檀越としてのあり方の推定や額田寺の存在が経済的な面でも大きな意味を持ったことなどを述べた。第一節での検討と合せて、律令制下の中下級官人、畿内の郡司氏族としての額田部氏の姿を描くことができたと思う。最後にこうした額田部氏のあり方を畿内郡司氏族全体の存在形態の中に位置づけ、以上の考察で触れられなかった側面や畿内郡司氏族としての一般化の可否などについて言及し、本章のむすびとしたい。

### 3 畿内郡司氏族の様相

『延喜式』には次のような畿内の郡司に関わる規定が存する。

- a 式部上式 凡畿内郡司患解・服解・侍解等、聴復<sup>レ</sup>任本職。
- b 式部上式 凡畿内郡司、六年成選。
- c 民部上式 凡畿内調物者、専当国司部領納<sup>レ</sup>京庫。其郡司者不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>京。

このような特例的措置の存在は、畿内郡司の特別な位置づけを窺わせるものであり、近年その位置づけについて二つの側面から検討が試みられている。

まず郡司は国擬↓式部省銓擬（試郡司）↓読奏↓任郡司（郡司召）という手続きで任用されるが、弘仁式部式・延喜式部下式の試郡司の規定は、「先引<sup>⑨</sup>東海道一國朝集使及郡司等屯<sup>⑩</sup>立庭中」と、東海道から始まり、「六道（除<sup>⑪</sup>西海道）勘訖」と、大宰府が式部省に代わって銓擬を行

う西海道（『統紀』大宝二年三月丁酉条）を除く六道について行うこと、つまり畿内郡司が試郡司に現れない内容になっていることが注目される。この点については、①郡領銓擬は畿外の政治集団との「外交」の場であり、畿内を代表する天皇が畿外の首長と対決する舞台であるから、畿内郡司は試郡司に登場しないと見る見解、②『統紀』天平七年五月丙子条の式部省銓擬のあり方の変更は「畿内七道諸国」を対象としたものであるから、八世紀には畿内郡司も試郡司の対象であり、畿内郡司の内考への転換（bの法源となる後掲d）によって、弘仁式の畿内の除外に帰結したと見るべきであつて、試郡司は畿内・外を問わず、在地首長層を郡司制という国家機構に編成する律令制存立の基盤に関わるものであるという立場、③『西宮記』・『北山抄』の読奏には「畿内」の訓が見え、『小右記』長徳二年十月十三日条の読奏の難に「撰津国不<sup>⑫</sup>注朝集使」とあり、また『北山抄』によると、天慶九年の郡司召（任郡司）には河内国志紀郡大領の名が記されていることなどから、畿内郡司も試郡司に与つたと考え、弘仁式文は畿内への言及を省略あるいは脱漏したものであつて、実際には畿内郡司も式部省銓擬を受けたと説明する、などの意見が呈されている<sup>⑬</sup>。②に関しては、天平七年格によつて十二月一日に畿内郡司が式部省に参集するとしても、試郡司に与るか否かは不明であること、内考への転換が何故試郡司からの除外につながるのかが説明されていないことなどの疑問があり、③についても、読奏や任郡司の儀式に畿内郡司が参加していることはまちがいないが、肝心の試郡司参加の確証がないこと、弘仁式だけならまだしも、延喜式でも畿内が見えないのは、省略や脱漏と簡単に片付ける訳にはいかない（延喜式の杜撰との説明も可能ではあるが）ことなど、充分に納得できない点が残る。但し、『類聚符宣抄』第七天徳三年四月五日撰津国司解では、住吉郡大領を「譜第正胤、奕世門地、試用擬任、性識清廉、足為郡領」として推挙し、十一月十四日大政官符で任用を決定しており、この間、国解をどこでどのように

処理したかを考えると、読奏の前提として式部省で何らかの審査があったと見るのが自然であろう。とすると、①が成り立つためには、畿内郡司は式部省で試郡司とは別の形で審査に与ったことが証明されねばならず、現段階では①も確説とは見なし難い。

次に試郡司をめぐる論争でも言及された畿内郡司の性格に関しては、以下のような指摘がなされている。

d 『後紀』延暦十八年四月壬寅条

公卿奏曰、大和守從四位下藤原朝臣園人解僞、郡司之任、所掌不輕、而外考之官、不得貽謀、准於諸國、亦無潤身。是以擬用之日、各競辭退、郡務闕怠、率由於此。伏請居之内考、將勸後輩者。臣等商量、夫高爵以之彰勲、厚賞以之酬勞、所以勸勵士庶、任用得人也。而畿内諸國、近接都下、駢策之勞、尤是殊甚、准於外國、不可同日。如今所申穩便、誠合進昇。伏望五國郡司、一居内考。許之。

e 『三代格』卷七天長二年閏七月二十六日官符（「弘仁八年官符」）

應諸郡司病損之後不預他色依旧復任及還本上事。右得式部省解一僞、檢案内、太政官弘仁八年正月廿四日符僞、「今月廿三日下午五畿内諸國符僞、右大臣奏狀僞、依太政官去延暦十八年四月廿八日符、五國郡司一居内考率由、近接都下、駢策殊甚、准於外國、不可同日。今件人等未出身、前相競如林、既得考後好称詐病、非營闕郡務、誠是欺犯朝章。伏望、自今以後有斯類者、國司勘実一從還本。若有國司受彼請託輒解却者、准狀科附、不從寬典、庶遏奸源以勵後進一者。中納言正三位兼行民部卿藤原朝臣葛野麻呂宣、奉勅、依奏」者。然則詐病還本、格意明白。実病得痊処置未了。又貪濁有狀無故不上、省例還本事無疑。但或服解後不堪復任、或雖居職不堪時務、如此解任、理在難抑。然而人情詭譎、真偽叵信、推尋事迹非無疑涉、概由

「切内考之案、還足致濫偽之源。如聞、件郡司等遁職之日、巧称病患、解却之後、仍称病痊、規去本職求入他選。仍勘格出之後解却之人七十一人。望請、実病之人者、國司研実每得痊癒更用復任。不堪釐務者、省家閱帳為欺朝章、將從還本。其实病得痊待闕之間、從於抑退、不預他考。然則人皆懲慎奸迹自絶。望請官裁者。左大臣宣、奉勅、依請。

f 『三代格』卷七貞觀十年六月二十八日官符所引天長三年五月三日官符（「内」）

一應贖郡司罪事。右撰格所起請僞、太政官天長三年五月三日下河内國符僞、「別当正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世奏狀僞、前年之間、水旱相仍、百姓凋瘵、或合門流移、或絶戸死亡、風俗由厥長衰、郡吏以之逃散。所以頃年以諸司主典任用郡司、至有闕怠、必加刑罰、雖各提時格以望爵級、而不忍彼耻、遂致逃遁。凡決罰郡司、法家不聽、格式無有。伏請、主典以上被補郡司。若有罪過、依法令贖。然則不其職、必致經遠之凶。但自余郡司不改前例者。中納言從三位兼左兵衛督清原真人夏野宣、奉勅、依奏」者。如今此格只下一國、未施諸國。伏望、下知五畿内及七道諸國、令知鴻恩者。中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅、依請。

d は b の法源となるもの、e は d によって生じた事態に対応したもので、a の規定と関連する法令である。まず d によると、これ以前の畿内郡司の任用状況は、(イ) 外考の官であり、貽謀子孫のために残すはかりごと、つまり蔭位の制などの官人としての特権を得ることができない、(ロ) 畿外と比べて、郡司になっても身を潤すことがないなどの理由により、郡司のなり手が不足し、郡務が壅滞していたという。また (ハ) 都に近接しているため、中央の駢策の労が多いという事情も指摘されている。この点は当時は平安京造営等で郡司による労役差発や行幸・遊獵へ

の奉仕など、中央政府への奉仕が繁多であったと推測されることも符合している<sup>89</sup>。そこで、dで畿内郡司を内考としたところ、郡司希望者が増大したとあり(e)、dの方策は成功したかに見えた。しかし、実際は彼らが求めたのは中央官人と同じ内考の官職であって、郡司就任後、詐って病と称し、郡司を解替され、中央官人への転身を図る方便として利用されたのである(e)。以上のような平安初期の状況と、畿内はヤマト王権以来中央政府の勢力基盤であり、籍帳支配や雇役制によって政府による民衆の個々の把握が進んでいたという指摘から、畿内郡司には畿外のような在地首長としての側面はなく、人民に対して強力な支配・隷属関係を形成し得ていないので、部内に勢力を扶植したり、私富を蓄積することができなかったという見解が呈されている<sup>90</sup>。d・eによると、畿内では官位目当てで郡司になるという特色があり、fの諸司主典の郡司任用は在地首長としての側面の欠如を示すと言われる。また在地有力者と中央官人という選択肢を有した畿内の氏族は、中央官人への志向を重視したとも評価されている<sup>91</sup>。

以上の試郡司の有無と畿内郡司の位置づけに関する研究を手がかりに、以下、私なりに畿内郡司のあり方を検討したいと考える。

g『統紀』宝龜三年四月庚午条

正四位下近衛員外中将兼安芸守勳一等坂上太忌寸苅田麻呂等言、以<sub>二</sub>檜前忌寸、任<sub>二</sub>大和国高市郡司<sub>一</sub>元由者、先祖阿智使主、輕嶋豐明宮馭宇天皇御世、率<sub>二</sub>十七畧人夫<sub>一</sub>歸化。詔賜<sub>二</sub>高市郡檜前村<sub>一</sub>而居焉。凡高市郡内者、檜前忌寸及十七畧人夫滿<sub>二</sub>地而居<sub>一</sub>、他姓者十而<sub>二</sub>一<sub>一</sub>焉。是以天平元年十一月十五日、從五位上民忌寸袁志比等申其所由、天平三年、以<sub>二</sub>内藏少属從八位上藏垣忌寸家麻呂<sub>一</sub>、任<sub>二</sub>少領<sub>一</sub>。天平十一年、家麻呂轉<sub>二</sub>大領<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>外從八位下蚊屋忌寸子虫<sub>一</sub>、任<sub>二</sub>少領<sub>一</sub>。神護元年、以外正七位上文山口忌寸公麻呂<sub>一</sub>任<sub>二</sub>大領<sub>一</sub>。今此人等被<sub>二</sub>任郡司<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>必伝<sub>一</sub>子孫、而<sub>二</sub>三腹通任<sub>一</sub>、四<sub>二</sub>世于今<sub>一</sub>。奉<sub>二</sub>勅<sub>一</sub>、宜<sub>二</sub>莫<sub>一</sub>勸<sub>二</sub>譜<sub>一</sub>

第一、聴<sub>二</sub>任<sub>一</sub>郡司。

h『三代実録』元慶三年十月二十二日条

河内国高安郡人常陸權少目從八位上常澄宿禰秋雄・權史生從八位上常澄宿禰秋常・河内国檢非違使從七位下八戸史野守・安芸医師從八位上常澄宿禰宗吉・河内国高安郡少領從七位下常澄宿禰宗雄・式部位子從六位上常澄宿禰秋原等六人、賜<sub>二</sub>姓高安宿禰<sub>一</sub>。秋雄等自言、先祖後漢光武皇帝・孝章皇帝之後也。裔孫高安公陽倍、天万豐日天皇御世、立<sub>二</sub>高安郡<sub>一</sub>。陽倍二字、意与<sub>二</sub>八戸兩字<sub>一</sub>語相涉、仍後賜<sub>二</sub>八戸史姓<sub>一</sub>。末孫正六位上八戸史貞川等、承和三年改<sub>二</sub>八戸史<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>常澄宿禰<sub>一</sub>。望請改<sub>二</sub>八戸・常澄兩姓<sub>一</sub>、復<sub>二</sub>本姓高安也<sub>一</sub>。

i『三代実録』元慶五年五月九日条

河内国高安郡人右兵衛無位常澄宿禰藤枝、右近衛無位常澄宿禰常主、位子無位常澄宿禰季道・無位八戸史善賜<sub>二</sub>姓高安宿禰<sub>一</sub>。去元慶三年藤枝等父並改<sub>二</sub>本姓<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>高安宿禰<sub>一</sub>、藤枝等脫漏不<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>官符<sub>一</sub>。故追賜<sub>二</sub>之<sub>一</sub>。まずgの高市郡の場合は、gによると東漢直氏の勢力が絶大であったかに記されているが、実は元来高市県主(連)が譜第郡領氏族であったと思われる。『書紀』天武元年七月壬子条に大領高市県主許梅、天平十一年藏垣忌寸家麻呂・蚊屋忌寸子虫の大・少領独占以後でも、勝宝八年十二月十三日東大寺飛驒坂所公驗案(『大日本古文書』二五—二〇四)に擬大領從七位上高市連屋守・擬少領無位高市連広君が見えており、後者の例は擬任郡司の段階ではあるが、国司による郡司銓擬の意志が譜第氏族高市連氏の登用にあつたことを窺わせるものと言えよう。したがってgの記述は、ある程度割引いてとらえる必要があるが、東漢直氏の一族から高市郡司が出たことは事実であり、問題はその任用方法である。gによれば、天平三年藏垣忌寸家麻呂の少領任用の際には、民忌寸袁志比等の上奏があつたとあり、今回も坂上苅田麻呂の上言が行われている。天平三年段階では、天平七年格による国擬者以外の副申者の申送とそれに

基づく実質的な式部省銓擬施行以前であるから、家麻呂の任用は国擬↓式部省銓擬（試郡司）という郡司任用手続きとは別なルートで実現したものと推定される。またgでは「宜莫勘譜第、聴任郡司」とあるが、弘仁式部式・延喜式部式に記された試郡司の場合においては「令申譜第」ことが儀式の中心であり、『西宮記』・『北山抄』などには無譜者の任用規定もあるとはいえ、譜第を勘定せずに郡司に任用するとは、試郡司を経ずに任用するという方法の存在を示唆するのではあるまいか。蔵垣忌寸家麻呂は内蔵寮の主典クラスからの転身であり、fに記された諸司主典の郡司登用の場合も、同様の任用方法がとられた可能性を窺わせる。

但し、一方で、畿内においても意外に譜第郡司が勢力を有していたと考えられる例もある。郡司の一覧表を見ると、山城国葛野郡（秦忌寸）・紀伊郡（秦忌寸）・宇治郡（宇治宿禰）・相楽郡（掃守宿禰）、大和国吉野郡（吉野連）・宇陀郡（宇陀公）、河内国錦部郡（錦部）・高安郡（八戸史）、摂津国住吉郡（津守宿禰）・嶋上郡（三島県主）など、九世紀に入ってから、八世紀以来の譜第氏族が郡司に就任している例が存する。先掲の『類聚符宣抄』の摂津国司解の存在と譜第に基づく郡司任用の事例は、国擬↓式部省銓擬（試郡司）↓読奏↓任郡司の手続きによる任用方法が畿内郡司にも適用されたことを示すものであり、以上のような譜第氏族による郡司の地位確保の例とも合致している。

以上、試郡司をめぐる問題に関しては、畿内郡司でも試郡司を経て任用された例があると考えられるので、①説が成り立つ条件として、試郡司を経ずに畿内郡司が任用される例も存するという推測を指摘するに留まり、それは果して式文における畿内の全面的不記載につながるかどうかについては、結論は保留しておかねばならない。次に畿内郡司の位置づけとして、在地首長としての側面は弱く、中央官人任用への志向が強いとする見解を紹介したが、譜第郡司が畿内でも存続しているとなると、

この意見には修正が必要となろう。本稿で取り上げた額田部氏の場合、平群郡の譜第郡司の地位を保持していると考えられ、同時に律令制下の中下級官人としての活躍も見られる。こうした畿内郡司氏族の姿をよく示すのが、h・iの河内国高安郡の八戸史一族ではないかと思われる。即ち、改氏姓申請者の顔ぶれを見ると、郡領や国検非違使など在地での権威・勢力を保つと同時に、中下級官人として出仕する者もあり、在地豪族・律令官人の両側面を一族で分担しているのである。したがって確かに在地首長としての側面は弱いのであるが、在地豪族と律令官人、この二つの側面は畿内の郡司氏族にとっても重視すべき要素であり、両立を得てこそ畿内中小豪族の存立基盤を確保し得たのだと考えたい。すると、額田部氏を畿内郡司のあり方の一つの典型と見なすことも可能であり、中小豪族の生き様を具体的に示す事例として注目されることになる。

畿内郡司氏族は律令制下の中下級官人を供給するとともに、畿外に比べて在地首長としての勢威は弱いものの、譜第郡司として在地に基盤を保持するものであった。この二つの側面はともに重視されるべきであり、律令官人としての出仕故に、郡司任用の際の試郡司を畿外の郡司候補者とは別の形で行ったと推測される事例が存することになる。したがって畿内郡司氏族の特色は、こうした二面性の保持にあったものと考えられ、本稿で検討した額田部氏は畿内郡司氏族の一つの典型例と見てよいと思われる。なお、平安時代の中央官人としての額田部宿禰氏の動向は、国史に氏人の活躍が見えず、『平安遺文』等にも僅かに校生として額田部日麻呂が知られるのみで（題跋編一四五一号保延三年十一月十日俱舎論疏奥書）、平安京移貫後の額田部宿禰のあり方は不詳とせねばならない。

ちなみに、『大和郡山市史』史料集（一九六六年）五八額田寺新故禁制定置断簡には、嘉元年間（一二三〇三―一二三〇五）の故禁制条々事に続い

て、「於額田郷内検断等」、不可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>「違乱事」とあり、額田寺の検断権の存在が窺われる。中・近世の額田部氏の行方は不明であるが、既に西大寺の末寺化を経ているといえ、額田寺のこの地域における権力の存続を考える時、その檀越としての額田部氏の存否も考慮されねばならないと思う。この点の中・近世の額田寺や周辺地域の検討に譲ることにし、古代の額田部氏のあり方の考察はここで終えることにしたい。

## むすび

小稿では、「額田寺伽藍並条里図」の理解の一助として、ヤマト王権の時代から平安時代初期頃までの史料によって、額田寺の檀越額田部氏のあり方を描き、合せて畿内郡司氏族の特色に言及した。畿内郡司氏族は、畿内の中小豪族として、名代の部管理者や品部などとしてヤマト王権の実務運営を支え、律令制下においても中下級官人として国家の日常業務を担う存在であった。同時に郡司として在地での勢力も保持し、中下級官人と在地豪族の二面を備えた存在であったのである。本稿で検討した額田部氏も、この畿内郡司氏族の一つの典型であり、律令制下の中下級官人、王臣家との関係、譜第郡司、氏寺の経営と檀越としての関与など、より具体的に畿内郡司氏族の諸相を知ることのできる事例として評価できるとまとめることができる。

以上、額田部氏や額田寺の歴史は、畿内中小豪族の存在形態を具体的に考える事例として注目すべきことを強調し、また畿内豪族のあり方を検討できるその他の例の「発掘」を期待して、<sup>95</sup> 蕪雑な稿を終えたい。

## 註

- (1) 横崎千城編「日本古代ウジ族関係論文目録(Ⅰ)」(『日本書紀研究』第五冊、塙書房、一九七一年)、高島正人「奈良時代諸氏族の研究」(吉川弘文館、一九八三年)などを参照。
- (2) 畿内中小豪族の研究としては、岸俊男 a 「山背国愛宕郡考」(『続律令国家と貴族社会』吉川弘文館、一九七八年)、b 「県大養橋宿禰三千代をめぐる憶説」(『宮都と木簡』吉川弘文館、一九七七年)、長家理平「古代中小豪族の考察」(『日本歴史』二九八、一九七三年)、前田晴人「河内三野県主の服属儀礼について」(『日本歴史』五〇七、一九九〇年)、「三野県主、美努連の性格とその形成要因」(『東アジアの古代文化』六八、一九九一年)、「古代河内の反乱伝承と三野県主」(『日本書紀研究』一九、塙書房、一九九四年)、田島裕久「平安中・後期における中・小氏族の在地動向」(『日本古代史叢説』慶應通信、一九九二年)、鈴木靖民「掃守氏と相楽神社」(『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、一九八五年)、小林敏男「古代王権と県・県主制の研究」(吉川弘文館、一九九四年)などが掲げられる。
- (3) 佐伯有清「新撰姓氏録の研究」考証篇第三(吉川弘文館、一九八二年)二二六頁。
- (4) 前田晴人「額田部連の系譜と本拠地」(『日本歴史』五二〇、一九九一年)。
- (5) 『和名抄』の八田郷は矢田部、額田郷も額田部と関連付けて説明されており、実際ヤタベ、ヌカタベという訓が示されている場合もある。
- (6) 喜田新六「桓武朝にはじまる地方人の京都貴族について」(『桓武朝の諸問題』一九六二年)。
- (7) 田中卓「『紀氏家牒』について」(『日本国家の成立と諸氏族』国書刊行会、一九八六年)による。
- (8) 『書紀』雄略二年十月丙子条には大津馬飼が見え、『日本書紀(三)』(岩波書店、一九九四年)三二頁注一九は大津を河内の和泉大津か摂津の難波大津に比定している。後者とすれば、摂津地域にも馬飼集団が存したことになる。なお、河内・倭以外では、天平五年山背国愛宕郡計帳に八坂馬養造姓者が見えており、『大日本古文书』一一五四三、愛宕郡八坂郷を本拠地としたものと考えられる。
- (9) 二条大路木簡の中に室原馬養造姓が見え(城二四一八)、大和国城下郡室原郷(現奈良県磯城郡田原本町大字唐古)あるいは大字蔵堂を本拠としたものと考えられる。但し、後述の河内〇〇馬飼部造のような、倭+地名の馬飼の例はないということである。
- (10) 『統紀』天平十六年二月丙午条によると、律令制下では馬飼が卑賤視されている。



たことがわかるが、それ以前にあつては多様な活動を行い、国家にとって重要な存在であつたと考えられる。なお、継体と河内馬飼の關係については、前川明久「継体天皇の周辺」(『日本古代の社会と政治』吉川弘文館、一九九五年)参照。

(11) 『書紀』欽明七年七月条に今来郡檜隈邑の人川原民直宮が良馬を得た話があり、これは渡来系氏族の例であるが、生駒山東麓以外にも馬の伝承が存する。また勝宝六年十一月十一日知牧事吉野百嶋解(『大日本古文書』四一三二)によると、吉野郡に牧が存したことがわかる。なお、註(9)も参照。

(12) 佐伯註(3) 書四〇七頁―四〇八頁。  
(13) 前田註(4) 論文。

(14) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考証篇第五(吉川弘文館、一九八三年)三五〇頁―三五二頁。  
(15) 福山敏男「額安寺」(『奈良朝寺院の研究』綜芸舎、一九七八年)二四頁。なお、狩野久「額田部連と飽波評」(『日本古代の国家と都城』東大出版会、一九九〇年)は道慈を額田部連氏と見て、額田寺との關係を考えている。

(16) 井上薫「道慈」(『日本古代の政治と宗教』吉川弘文館、一九九一年)。  
(17) 一条冬良『後妙華寺殿令聞書』所引の一条兼良の説。

(18) 野村忠夫「国造姓についての一試論」(『信濃』二四一七、一九七二年)。  
(19) 栗田寛「国造本紀考」(近藤出版部、一九〇三年)、佐伯有清・高嶋弘志編『国造・県主關係史料集』(近藤出版部、一九八二年)、新野直吉「額田国造今足をめぐって」(『日本歴史』二六〇、一九七〇年)、b「国造の世界」(『古代の日本』角川書店、一九七〇年)、早川万年「和珥部臣君手と大海人皇子の湯沐邑」(『岐阜史学』九一、一九九六年)など。

(20) 『古代氏族人名辞典』(吉川弘文館、一九九〇年)の当該項を参照。  
(21) 狩野註(15) 論文。

(22) 喜田註(6) 論文。  
(23) 本位田菊士「額田部連・額田部について」(『続日本紀研究』二三八、一九八五年)。

(24) 直木孝次郎「複姓の研究」(『日本古代国家の構造』青木書店、一九五八年)。  
(25) 本位田註(23) 論文は、額田部湯坐連を額田部連の本宗家と考え、本宗はこの事件で没落したと見る。

(26) 本位田註(23) 論文。なお、前沢和之「古代の皮革」(『古代国家の形成と展開』吉川弘文館、一九七六年)五一―六頁によると、「熟皮」は馬皮の油鞣し処理を示すとされている。

(27) 前田註(4) 論文。この見解は神魂命系の額田部氏を三野県主の権力を構成する要素と考えるところに眼目があり、本来の本拠地は河内国河内郡額田郷とし

ている。

(28) 佐伯有清「新撰姓氏録序説」(『新撰姓氏録の研究』研究篇、吉川弘文館、一九六三年)。

(29) 佐伯有清「新撰姓氏録の研究」考証篇第四(吉川弘文館、一九八二年)四九頁は、額田部連、額田部河田連を左右馬寮の伴部である馬部の名負氏の一員であつた可能性が高いと述べる。

(30) 佐伯註(3) 書二六三頁。なお、前田註(4) 論文は、額田部連・額田部颯玉を三野県主の下にヤマト王権に奉仕した氏として並列的にとらえようとしているが、「額田部」颯玉の命名から見て、額田部氏の中での玉作りという見方をとる方がよいと思う。

(31) 佐伯註(3) 書二〇九頁。  
(32) (イ) 田中興「額田部について」(『兵庫史学』二二、一九五九年)、(ロ) 太田亮「日本上代に於ける社会組織の研究」(磯部甲陽堂、一九二九年)一七一頁、新野註(19) a 論文、本位田註(23) 論文など、(ハ) 狩野註(15) 論文、岸俊男「額田部臣」と倭屯田」(『末永先生米寿記念献呈論文集』一九八五年)など。

(33) 落合重信「額田部とその性格」(『兵庫史学』三一、一九六二年)。  
(34) 落合註(33)、本位田註(23) 論文など。

(35) 『国史大辞典』一一(吉川弘文館、一九九〇年)「ぬかたべ」の項(吉村武彦氏執筆)、岸註(32) 論文、黛弘道「古代王権の成立」(『物部・蘇我氏と古代王権』吉川弘文館、一九九五年)など。

(36) 拙稿「出雲地域とヤマト王権」(『新版古代の日本』四、角川書店、一九九一年)。  
(37) 直木孝次郎「人制の研究」(『日本古代国家の構造』青木書店、一九五八年)。

(38) 鎌田元一「大王による国土の統一」(『日本の古代』六、中央公論社、一九八六年)。  
(39) 狩野久「部民制」(『講座日本史』一、東京大学出版会、一九七〇年)。

(40) 武廣亮平「額田部臣と部民制」(『古代王権と交流』七、名著出版、一九九五年)も、額田部を額田部皇女の名代と見ている。

(41) 仁藤敦史 a「斑鳩宮」について、b「斑鳩宮」の經濟基盤、c「斑鳩宮」の経営について(『古代王権と都城』吉川弘文館、一九九八年)、平林章仁「敏達天皇系王統の広瀬郡進出について」(『日本書紀研究』第一四冊、塙書房、一九八七年)など。

(42) 仁藤註(41) a 論文。  
(43) 平林註(41) 論文。  
(44) 額田部連比羅夫と海石榴市との關係については、和田萃「市・女・チマタ」(『日本の古代』一一、中央公論社、一九八七年)一七四―一七五頁でも言及されている。

- (45) 井上薫「舎人制度の一考察」、『トネリ制度の一考察』(『日本古代の政治と宗教』吉川弘文館、一九六一年)、拙稿「長屋王邸宅の住人と家政機関」(『平城京長屋王邸宅と木簡』吉川弘文館、一九九一年)など。
- (46) 大和郡山市教育委員会「額田部孤塚古墳周濠部発掘調査概要報告」(一九八四年)、『松山古墳Ⅰ』(一九九一年)、『松山古墳Ⅲ』(一九九三年)などによる。
- (47) 西嶋定生「古墳と大和政権」(『岡山史学』一〇、一九六一年)。
- (48) 笹山晴生「たみこも平群の山」(『はれるが』二二五、一九七〇年)、辰巳和弘「平群氏に関する基礎的考察」(『地域王権の古代学』白水社、一九九四年)。なお、若井敏明「初期の大和政権について」(『史泉』八二、一九九五年)は平群氏の大和就任を史実と見るが、その論拠は斑鳩地域の五世紀の古墳の存在である。しかし、後述のように、斑鳩地域は飽波評域に入るものと思われ、平群評域の平群谷地域とは区別すべきであり、やはり六世紀頃の平群氏の活躍は支持し難い。六世紀後半の平群氏の位置づけについては、佐藤長門「倭王権における合議制の史的展開」(『日本古代の国家と祭儀』雄山閣、一九九六年)を参照。
- (49) 鈴木靖民「倭の五王の外交と内政」(『日本古代の政治と制度』続群書類従完成会、一九八五年)。
- (50) 本位田註(23)、前田註(4)論文、本位田菊士「河内馬飼部と倭馬飼部」(『東アジアと日本』歴史編、吉川弘文館、一九八七年)、辰巳和弘「上宮王家と古代平群郡地域」(『地域王権の古代学』白水社、一九九四年)など、額田部氏発展の要因として貢馬を指摘する見解は多い。『奈良県の地名』(平凡社、一九八一年)四七三頁馬飼村(まつかさむら・現大和郡山市馬飼町)の項に「佐保川西方、筒井村南方に立地」とあり、額田寺の北東に位置して馬に関わる地名が存することにも注目される。この地は安貞二年十二月額安寺別当某讓状(鎌倉遺文「三七九四号」)に「同寺領山林等并東別所・馬飼上下庄」、永仁二年三月東大寺大仏灯油料田注文(二八五一七号)に「添下郡京南七条二里六坪内一段小字マツカサ」と見えるものと思われるという。
- (51) 胡口靖夫「美努王をめぐる二、三の問題」(『国史学』九二、一九七四年)。なお、山川均「大和における七世紀の主要交通路に関する考古学的研究」(『ヒストリア』一五〇、一九九五年)では随使入京ルートや額田部氏の役割が述べられている。
- (52) 外交儀礼の全般的流れについては、拙稿「古代難波における外交儀礼とその変遷」(『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館、一九九八年)を参照。
- (53) 村井章介「東アジア往還」(朝日新聞社、一九九五年)参照。
- (54) 凡河内直氏の外交面での役割については、註(52)拙稿を参照。なお、加藤順一「対外交渉において官人の外貌が有する政治的性格」(『名古屋明德短期大学紀要』11、一九九六年)も参照。
- (55) 黒田裕一「推古朝における「大和」意識」(『国史学』一六五、一九九八年)。
- (56) 笹山晴生「日本古代衛府制度の研究」(東京大学出版会、一九八五年)二〇四頁。
- (57) 井上光貴「日本における仏教統制機関の確立過程」(『日本古代国家の研究』岩波書店、一九六五年)。なお、佐伯昌紀「寺家知事考」(『寺院史研究』四、一九九四年)は、法頭を中央統制機関ではなく、各寺院毎に檀越の中から選任されて寺領管理等を職掌とする「寺家法頭」とでもいうべき寺職であるとし、七世紀の氏族家産段階の寺院に特有の機構であったと見ている。とすると、この法頭と額田寺との関係が問題となるが、額田寺の創建の問題とともに保留としておきたい。
- (58) この点は前田註(4)論文でも指摘されている。
- (59) 拙稿「橘家と恵美太家」(『長屋王家木簡の基礎的研究』吉川弘文館、二〇〇〇年)参照。
- (60) 山尾幸久「日本古代王権形成史論」(岩波書店、一九八三年)四二四～四四二頁参照。
- (61) 篠弘道「冠位十二階考」(『律令国家成立史の研究』吉川弘文館、一九八二年)。
- (62) 国立歴史民俗博物館の共同研究「古代荘園絵図と在地社会についての史的探究」第十一回研究会における仁藤敦史氏の報告「額田部周辺の古代氏族」では、額田部氏の本宗が額田部連から額田部河田連(額田部宿禰所稱)に変化し、別祖氏宗(豊葬令墓)として「額田寺伽藍並条里図」の「船墓(額田部宿禰先祖)」の記載が生まれた可能性を指摘されている。この場合でも、広い意味での同族関係にあったと考えれば、額田部氏がこの地に勢力を有した豪族であったとすることはできると思う。
- (63) 「平城宮木簡」一(解説)、笹山晴生「兵衛についての一考察」(『日本古代の政治と文化』吉川弘文館、一九八七年)、鬼頭清明「二条大路出土の門号記載木簡について」(『律令国家の政務と儀礼』吉川弘文館、一九九五年)、拙稿「二条大路木簡と門の警備」(『長屋王家木簡の基礎的研究』吉川弘文館、二〇〇〇年)など。
- (64) 笹山註(63)論文。
- (65) 二条大路木簡の門関係の木簡が皇后宮に関わるものであることは、註(63)拙稿参照。
- (66) 笹山註(56)書第二章。
- (67) 東野治之「木簡が語る日本の古代」(岩波書店、一九八三年)二二～二九頁。
- (68) なお、額田氏の例であるが、藤原麻呂家に仕えた額田根万呂(城二九一二〇)、長屋王関係では佐保に勤務した額田児君(城二一一一〇)や額田直持末呂(城二七一七)なども知られる。
- (69) 岸註(2) a 論文。

- (70) 福原栄太郎「長屋王家形成についての基礎的考察」(『続日本紀研究』二七七、一九九一年)、岩本次郎「木上と片岡」(『木簡研究』一四、一九九二年)など。
- (71) 拙著「長屋王家木簡の研究」(吉川弘文館)第一部を参照。
- (72) 平林註(41) 論文。
- (73) 大津透「律令国家と畿内」(『律令国家支配構造の研究』岩波書店、一九九三年)。
- (74) 狩野註(15) 論文。
- (75) 辰巳註(50) 論文。
- (76) 加藤謙吉「平群地方の地域的特性と藤ノ木古墳」(『大和政権と古代氏族』吉川弘文館、一九九一年)。
- (77) 岸俊男「古代の画期 雄略朝からの展望」(『日本の古代』六、中央公論社、一九八六年)。
- (78) 米田雄介「郡司一覽」(『日本史総覧』補巻中世三・近世三、新人物往来社、一九八四年) 参照。
- (79) 拙稿「評の成立と評造」(『古代郡司制度の研究』吉川弘文館、二〇〇〇年) 参照。
- (80) 浅井和春「東京国立博物館保管上代裂の銘文について」(『MUSEUM』三九〇、一九八三年)。
- (81) 『平安遺文』四六〇九号上野国交替実録帳の「定額寺」の項には、「放光寺。件寺依氏人申請、不為定額寺、仍除放已了者」とあり、氏人の申請も定額寺化の一つの要素であった。
- (82) 都の僧侶が地方との通交を持ったことは、鈴木景二「都鄙間交通と在地秩序」(『日本史研究』三七九、一九九四年) 参照。
- (83) 太田愛之「古代村落の再編」(『日本史研究』三二二、一九九三年)。
- (84) 井上満郎「墨書土器「鰐室」の文献学的考察」(『北野魔寺発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所、一九八三年) 九三頁は、九条に存した広隆寺より北の八条に存する北野魔寺が旧広隆寺であり、北野魔寺は広隆寺の移転後の平安時代まで存続していることは瓦の編年より明らかであるから、広隆寺の本体が太秦の地に移ってから規模を縮小して法灯を護つたと解している。そして、九世紀中頃～十世紀前半の遺構SK二〇から出土した墨書土器に記された「鰐室」は、広隆寺の移転後も旧地に継続した広隆寺後身の寺に設けられた聖徳太子を祀る施設・部屋であったという。とすると、資財帳の広隆寺は八世紀以前の姿を伝えているものではないことになり、移転説の可否も含めて検討する必要があることを留保条件としておきたい。
- (85) 額田寺の創建については「聖徳太子伝私記」下の熊凝寺を額田寺に比定する説を措くとしても、氏寺としては規模が大きく、創建瓦の年代も七世紀初に遡ることから、上宮王家や推古天皇との関係を考慮すべきであるという見方が存する。
- (86) 大津註(73) 論文。
- (87) 牧が後に開墾により消滅する例については、西岡虎之助「武士階級結成の一要因としての「牧」の発展」(『荘園史の研究』上、岩波書店、一九五三年) 三二六～三一九頁参照。
- (88) ①早川庄八「選任令・選叙令と郡領の「試練」」(『奈良平安時代史論集』上、吉川弘文館、一九八四年)。「日本古代官僚制の研究」(岩波書店、一九八六年) 所収の際の二九八頁補注も参照。②大町健「畿内郡司と式部省の「試練」」(『日本歴史』四六六、一九八二年)。③森田悌「畿内郡司と試練」(『日本歴史』四七四、一九八二年)。なお、拙稿「試郡司・読奏・任郡司ノート」(『古代郡司制度の研究』吉川弘文館、二〇〇〇年) も参照。
- (89) 浅井勝利「畿内郡司層氏族に関する覚書」(『史観』一二九、一九九三年)。
- (90) 大津註(73) 論文。
- (91) 浅井註(89) 論文。
- (92) 郡司任用方法については、拙稿「律令国家における郡司任用方法とその変遷」(『古代郡司制度の研究』吉川弘文館、二〇〇〇年) を参照。
- (93) 米田註(78) 表参照。
- (94) 小口雅史「安都雄足の私田経営」(『史学雑誌』九六の六、一九八七年) 四七頁では、河内国洪川郡を本拠とする安都雄足の一族に郡領の者が存し、雄足の経営を助けた様子を推定しており、畿内郡司と律令官人の関係の例とすることができる。なお、「扶桑略記」寛平八年条所引善家秘記に備中国賀夜郡の郡領賀陽氏の一族構成が知られる例があり、大領・統領・吉備津彦神社の神主など、地方の要職を独占し、また贖労により備前権少目の職に就く等の展開も窺われる。在地豪族が律令国家の中で自己の権威を保つ方法を示す事例として、h・iとともに注目される。
- (95) 鈴木註(2) 論文は、山城国相楽郡の郡領掃守連(宿禰)氏の歴史を検討し、在地では相楽神社の奉祀との関係に言及しているが、史料制約のために、額田部氏ほどには、律令官人、郡司、在地経営などのあり方は解明できていない。

## 額田及び額田部氏関係史料集成（稿）

### 1 額田及び額田部氏の出自

001『日本書紀』神代上宝鏡開始第三の一書

（上略）次天津彦根命、此茨城国造・額田部連等遠祖也。（下略）

002『古事記』

（上略）次天津日子根命者（凡川内国造・額田部湯坐連・茨木国造・倭田中直・山代国造・馬來田国造・道尻岐閉国造・周芳国造・倭淹知造・高市県主・蒲生稻寸・三枝部造等之祖也）。（下略）

003『日本書紀』神功四十七年四月条分註

（上略）（千熊長彦者、分明不知其姓人。一云、武蔵国人、今は額田部根本首等之始祖也。百濟記云、職麻那那加比跪者、蓋是歟也）。（下略）

004『紀氏家牒』

（7）家牒曰、六男平群木兔宿禰、歷仕応神・仁徳・履中三代天皇、執國政。凡寿殆一百五十余歳。初木兔宿禰与仁徳天皇同日生（神功皇后撰政六十年）、然後家大倭国平群県平群里、故称平群木兔宿禰。是平群朝臣・馬工連等祖也。

（15）家牒曰、家大倭国平群県平群里、故称曰平群木兔宿禰。是平群朝臣・馬工連等祖也。

（16）又云、額田早良宿禰男額田駒宿禰、平群県在馬牧、挾駿駒養之、獻天皇。勅賜姓馬工連、令掌飼。故号其養駒之处曰生駒（又云、

額田駒宿禰男、□馬工御織連）。

（20）紀氏家牒曰、額田早良宿禰。（成信考、木兔宿禰二男也）。

（21）紀氏家牒曰、平群真鳥大臣弟、額田早良宿禰家平群県額田里、不尋父氏、負（母氏カ）姓額田首。

\*番号は田中卓『紀氏家牒』について（『日本国家の成立と諸氏族』国書刊行会、一九八六年）による。

005『日本書紀』武烈即位前紀（参考）

：大臣平群真鳥臣、專擅國政、欲王日本、陽為太子營宮、了即自居、触事驕慢、都無臣節。於是、太子思欲聘物部鹿火大連女影媛、遣媒人向影媛宅期會。影媛曾姦真鳥大臣男鮪（鮪、此云茲縣）、恐違太子所期、報曰、妾望奉待海柘榴市巷。由是太子欲往期处、遣近侍舍人、就平群大臣宅、奉太子命求索官馬。大臣戲言陽進曰、官馬為誰飼養、隨命而已。久之不進。：

006『新撰姓氏錄』河内国皇別・額田首条

早良臣同祖、平群木兔宿禰之後也。不尋父氏、負母氏額田首。

007『新撰姓氏錄』左京神別下・額田部湯坐連条

天津彦根命子明立天御影命之後也。允恭天皇御世、被遣薩摩国、平卑人、復奏之日、獻御馬一匹、額有町形廻毛。天皇嘉之、賜姓額田部也。

008『新撰姓氏錄』左京神別下・三枝部連条

額田部湯坐連同祖。顯宗天皇御世、喚集諸氏人等、賜饗醺、于時三茎之草生於宮庭、採以奉獻、仍負姓三枝部造。

009『新撰姓氏錄』左京神別下・奄智造条

額田部湯坐連同祖。

010『新撰姓氏錄』左京神別下・額田部条

同命（天津彦根命子明立天御影命か）孫意富伊我都命之後也。

011『新撰姓氏錄』右京神別上・額田部宿禰条

明日名門命三世孫天村雲命之後也。

012『新撰姓氏錄』右京神別上・額田部毘玉条

額田部宿禰同祖、明日名門命十一世孫御支宿禰之後也。

013『新撰姓氏錄』右京神別下・高市連条

額田部同祖、天津彦根命三世孫彦伊賀都命之後也。

014『新撰姓氏錄』山城国神別・額田臣条

伊香我色雄命之後也。

015『新撰姓氏錄』山城国神別・額田部宿禰条

明日名門命六世孫天由久富命之後也。

016『新撰姓氏錄』大和国神別・三枝部連条

額田部湯坐連同祖、天津彦根命十四世孫達己呂命之後也。顯宗天皇御世、諸氏、賜饗醺、于時宮庭有三茎草、獻之、因賜姓三枝部造。

017『新撰姓氏錄』大和国神別・額田部河田連条

同神（天津彦根命）三世孫意富伊我都命之後也。允恭天皇御世、獻額田馬。天皇勅、此馬額如田町。仍賜姓額田部連也。

018『新撰姓氏錄』大和国神別・奄智造条

同神（天津彦根命）十四世孫建凝命之後也。

019『新撰姓氏錄』摂津国神別・額田部宿禰条

同神（委文連条の角凝魂命または多米連条の神魂命か）男五十狹経魂命之後也。

020『新撰姓氏錄』摂津国神別・額田部条

額田部宿禰同祖、明日名門命之後也。

021『新撰姓氏錄』摂津国神別・凡河内忌寸条

額田部湯坐連同祖。

022『新撰姓氏錄』河内国神別・額田部湯坐連条

天津彦根命五世孫乎田部連之後也。

023『新撰姓氏錄』大和国諸蕃・額田村主条

出自吳国人天國古也。

024『新撰姓氏錄』逸文

（上略）大鷦鷯天皇（諡仁德）御世、拳落隨米。今高向村主（中略）額田村主（中略）等是其後也。爾時阿智王奏、建今來郡。後改号高市郡。而人衆巨多、居地隘狹、更分置諸国。摂津・參河・近江・播磨・阿波等

漢人村主是也。

025『新撰姓氏錄』大和国皇別・布留宿禰条（参考）

柿本朝臣同祖。天足彦国押人命七世孫米餅搗大使主命之後也。男木事命、男市川臣、大鷦鷯天皇御世、達倭賀布都努斯神社於石上御布瑠村高庭之地、以市川臣為神主。四世孫額田臣・武藏臣、齊明天皇御世、宗我蝦夷大臣、号武藏臣物部首并神主首。因茲失臣姓為物部首。男正五位上日向、天武天皇御世、依社地名改布留宿禰姓。日向三世孫邑智等也。

026『国造本紀』額田国造条

額田国造。志賀高穴穗朝御世、和邇臣祖彦訓服命孫大直侶宇命定賜国造。

## 2 皇族・王族名

027『日本書紀』仁德即位前紀

：是時額田大中彦皇子、將倭屯田及屯倉、而謂其屯田司出雲臣之祖淤宇宿禰曰、是屯田者、自本山守地、是以今吾將治矣、爾之不可掌。：即率吾子籠而來之。因問倭屯田、对言、伝聞之、於纏向玉城宮御宇天皇之世、科太子大足彦尊定倭屯田也、是時勅旨、凡倭屯田者、每御宇帝皇之屯田也、其雖帝皇之子、非御宇者不得掌矣、是謂山守地非之也。時大鷦鷯尊遣吾子籠於額田大中彦皇子而令知狀。大中彦皇子更無如何焉、乃知其惡、而赦之勿罪。：

028『日本書紀』仁德六十二年是歲条

額田大中彦皇子獵于關鷄。時皇子自山上望之、瞻野中有物、其形如廬。仍遣使者令視、還來之曰、窟也。因喚關鷄稻置大山主、問之曰、有其野中者何嘗矣。啓曰、氷室也。皇子曰、其藏如何、亦奚用焉。曰、掘土丈余、以草蓋其上、敦敷茅荻、取氷以置其上、既經

夏月而不泮、其用之、即當熱月漬水酒以用也。皇子則將來其氷、献于御所。天皇歡之。自是以後、每當季冬必藏氷、至于春分始散氷也。

029『日本書紀』推古即位前紀

豐御食炊屋姫天皇、天国排開広庭天皇中女也。橘豐日天皇同母妹也。幼曰額田部皇女。姿色端麗、進止軌制。：

030『日本書紀』用明元年五月条（参考）

：（三輪君逆）隱於三諸之岳。是日夜半潛自山出、隱於後宮（謂炊屋姫皇后之別業、是名海石榴市宮也）。逆之同姓白堤与横山言逆君在処。穴穗部皇子即遣守屋大連（或本云、穴穗部皇子与泊瀬部皇子相計而遣守屋大連）。曰、汝応往討逆君并其子。大連遂率兵去。：

031『平城宮発掘出土木簡概報』（二十三）八頁SD四七五〇出土

「文額田部王給

（八四）・（二六）・三〇八一

## 3 氏人の活躍

032『播磨国風土記』揖保郡意此川条

意此川、品太天皇之世、出雲御蔭大神、坐於枚方里神尾山、每遮行人、半死半生。爾時、伯耆人小保豆、因幡布久漏、出雲都伎也、三人相憂、申於朝廷。於是、遣額田部連久等々、令祈。于時、作屋形於屋形田、作酒屋於佐々山、而祭之、宴遊甚榮、既擯山柏、挂帶捶腰、下於此川相壓。故号壓川。

033『播磨国風土記』揖保郡鼓山条

鼓山。昔、額田部連伊勢、与神人腹太文、相關之時、打鳴鼓而相關之。

故号曰鼓山。へ々谷生檀。

034 島根県松江市岡田山一号墳出土大刀銘

額田部臣□□□□<sup>〔素カ〕</sup>大利□

035 『日本書紀』 欽明二十二年是歲条

復遣奴氏大舍獻前調賦。於難波大郡、次序諸蕃。掌客額田部連・葛城直等使列于百濟之下而引導。大舍怒還不<sub>レ</sub>入館舍、乘船歸至穴門。於是、修治穴門館。大舍問曰、為誰客造。工匠河内馬飼首押勝欺給曰、遣問西方無<sub>レ</sub>礼使者之所停宿處也。大舍還<sub>レ</sub>国告其所言。故新羅築城於阿羅波斯山、以備日本。

036 『日本書紀』 推古十六年八月癸卯条

唐客入<sub>レ</sub>京。是日、遣飾騎七十五匹而迎唐客於海石榴市衢。額田部連比羅夫以告礼辞焉。

037 『隋書』 卷八十一東夷伝倭国条

〔上略〕倭王遣小德阿輩臺從數百人、設儀仗、鳴鼓角來迎。後十日、又大礼哥多毗從二百余騎郊勞、既至彼都。〔下略〕

038 『日本書紀』 推古十八年十月丙申条

新羅・任那人臻於京。是日、命額田部連比羅夫為<sub>レ</sub>迎新羅客莊馬之長、以膳臣大伴為<sub>レ</sub>迎任那人莊馬之長。即安置阿斗河辺館。

039 『日本書紀』 推古十九年五月五日条

藥獵於兔田野。取鷄鳴時集于藤原池上、以会明乃往之。栗田細目臣為前部領、額田部連比羅夫連為後部領。是日、諸臣服色皆隨冠色、

各著髻華。則大德・小德並用<sub>レ</sub>金、大仁・小仁用<sub>レ</sub>豹尾、大礼以下用<sub>レ</sub>鳥尾。

040 『日本書紀』 大化元年八月癸卯条

遣使於大寺喚聚僧尼而詔曰、〔中略〕凡自天皇至于伴造、所造之寺、不能<sub>レ</sub>營者、朕皆助作。今拜寺司等与寺主、巡行諸寺、驗僧尼・奴婢・田畝之實、而尽顯奏。即以<sub>レ</sub>来目臣〔闕名〕・三輪色夫君・額田部連甥為<sub>レ</sub>法頭。

041 『日本書紀』 大化五年三月甲戌条

坐蘇我山田大臣而被<sub>レ</sub>戮者、田口臣筑紫・耳梨道德・高田醜〔醜此云之渠〕・雄・額田部湯坐連〔闕名〕・秦吾寺等凡十四人、被<sub>レ</sub>絞者九人、被<sub>レ</sub>流者十五人。

042 『日本書紀』 天武十三年十二月己卯条

大伴連・佐伯連・阿曇連・忌部連・尾張連・倉連・中臣酒人連・土師連・掃部連・境部連・桜井田部連・伊福部連・巫部連・忍壁連・草壁連・三宅連・児部連・手織丹比連・鞆丹比連・漆部連・大湯人連・若湯人連・弓削連・神服部連・額田部連・津守連・泉大養連・稚犬養連・玉祖連・新田部連・倭文連〔倭文、此云之頭於利〕・氷連・凡海連・山部連・矢集連・狹井連・爪工連・阿刀連・茨田連・田目連・少子部連・菟道連・小治田連・猪使連・海犬養連・間人連・春米連・美濃矢集連・諸会臣・布留連五十氏賜<sub>レ</sub>姓曰宿禰。

043 『聖德太子平氏伝勸文』 上

大湯坐・若湯坐事。万葉集第三云、若湯座王歌一首。文。日本記出諸家氏之處云、大湯人連・若湯人連。文。又一所云、額田部大湯座連。文。

044 『続日本紀』文武四年六月甲午条

勅淨大参刑部親王、直広（大）藤原朝臣不比等、直大式粟田朝臣真人、直広（大）参下毛野朝臣古麻呂、直広肆伊岐連博得、直広肆伊余部連馬養、勤大壹薩弘恪、勤広参土師宿禰甥、勤大肆坂合部宿禰唐、務大壹白猪史骨、追大壹黄文連備、田辺史百枝、道君首名、狹井宿禰尺麻呂、追大壹鍛造大角、進大壹額田部連林、進大貳田辺史首名、山口伊美伎大馬呂、直広肆調伊美伎老人等、撰定律令、賜祿各有差。

045 『続日本紀』大宝三年十月癸未条

天皇御大安殿。詔賜遣新羅使波多朝臣広足、額田人足、各衾一領、衣一襲。又賜新羅王錦二匹、純冊匹。

046 『続日本紀』和銅五年正月戊子条

：正六位下額田首人足、：並從五位下。

047 『続日本紀』養老五年正月甲戌条

又 詔曰、文人・武士、国家所重、医・卜・方術、古今斯崇。宜擢於百僚之内、優遊學業、堪為師範者、特加賞賜、勸勵後生。：（明經）第二博士正七位上背奈公行文、調忌寸古麻呂、從七位上額田首千足、：各絕十五疋・糸十五絢・布卅端・鍬廿口。：

048 『続日本紀』天平十六年十月辛卯条

律師道慈法師卒。天平元年為律師。法師俗姓額田氏、添下郡人也。性聰悟為衆所推、大宝元年隨使入唐、涉覽經典、尤精三論。養老二年歸朝。是時祇門之秀者唯法師及神叡法師二人而已。著述愚志一卷、論僧尼之事。（下略）

049 『続日本紀』天平勝宝六年閏十月庚戌条

外從五位上額田部湯坐連息長授從五位下。

050 『続日本紀』天平宝字二年七月丙子条

正六位上阿倍朝臣乙加志授從五位下、正六位上額田部宿禰三當、戸憶志・根連韃韃・生江臣智麻呂・調連牛養・山田史銀並外從五位下。三當本姓額田部川田連也。是日、以額田部宿禰姓、便書位記賜之。

051 『続日本紀』宝龜元年七月己丑条

今良大目・東人・子秋麻呂等六十八人賜姓檜前・若桜部・津守部・真髮部・石上部・文部・桑原部・置始部・宇治部・大宅部・丸部・秦部・林部・穗積部・調使部・伊福部・采女部・額田部・上村主・湯坐部・壬生部。

\* 戸令放家人奴婢為良家人条集解

皇云、放家人奴婢為良日、其姓所司可定、更不可奏者。私案、官处分可聞也、臨時事故。今行事、主姓隨部字申送所司耳者。  
（在跡記背。）

052 『大同類聚方』卷七十五（参考）

額田藥。三河国額田郡額田部連之方。知安連病大便下日久不止時々服痛血下者。

053 『大同類聚方』卷七十五（参考）

知阿礼也美。西乃久保藥。大和国城上伊久子乃神社（式・忍坂坐生根神社）爾所伝爾而額田部連等乃家方也。孕女乃七八月乃頃卒爾腹大爾痛天前陰与利血下利或波如拳乃大爾塊利血數十下出天後腹痛不止流者是則胎中乃爛下流者也。



054 『令義解』附録 天長三年十月五日「応撰定令律問答私記事」

明法博士外從五位下額田国造今足見ユ

\*経歴

弘仁十三年正月己亥条・從六下↓外從五下

天長六年正月戊子条・外從五下↓從五下、時に額田宿禰と見ユ

055 『続日本後紀』承和七年正月甲申条

天皇御紫宸殿、垂珠簾、覽青馬。詔授三品秀良親王三品、…（正六位上）額田部湯坐連長吉並外從五位下。宴竟賜禄有差。

056 『続日本後紀』承和十三年九月辛亥条

河内国河内郡人式部位子從六位下額田首皆人、改本居貫附右京五条三坊。

057 『日本三代実録』貞觀四年八月是月条

從五位下守大判事兼行明法博士讀岐朝臣永直卒。…嘗大判事興原敏久・明法博士額田今人等、抄出刑法難義數十事、欲遣問大唐。永直聞之、自請詳解其義、累年疑滞、一時氷釈、遣唐之間、因斯止矣。…

058 『平安遺文』一六三号貞觀十二年四月二十三日某郷長解写

郡判

兼擬大領從七位上三嶋県主「宗人」擬主帳額田部

□「領無位高志連」繼俊」副擬主帳平群「糸主」

059 『平安遺文』二二二号延長六年十二月十七日内供奉十禪師禎果弟子等解

八条九里三十六坪・十里一坪に所在する土地の四至記載

「限北岑并額田部吉雄山」

郡判

国司代内豎大中臣

擬主帳平群

国目代平群「弟臣」

菅原

檢校河内

大領豐科「安永」

少領額田部「茂業」

擬少領大石

060 『平安遺文』二六四号天曆六年十一月二十五日安岑高村家地売券

天曆十一年十一月二十三日平群郡の郡判

大領兼惣行事額田部「茂業」

行事内豎五百井

權行事右兵衛平群

061 『平安遺文』四五五〇号昌泰二年六月三十日河内国某田地売券

四至保証刀禰の中に「陰陽寮史生正六位上額田真人国麻呂」あり

062 『平安遺文』四五八一号東大寺返抄

東大寺□□返抄 山辺郡南郷

当年利稻参拾束事「封」

□件利稻国符二百冊束（之内脱カ）、額田豐連所進取納如件、故返抄

長保元年拾貳月拾玖日

□「預カ」堂達（草名）

儀師（草名）

063『平安遺文』題跋編一四五一号俱舍論疏卷二一奥書  
本奥云、初校額田部日麻呂、再校葛城首麻呂、移唐草本書畢、保延三年十一月十日夜點了、非人老法師

064『藤原宮木簡』一一三六号

・ 糠田 甘宅宮

・ 西給止申□□(天地逆)  
(額カ)

(八七)・(一四)・二〇八一

065『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』(六) 八頁

・ 各田□  
(アカ)

・ □

066『平城宮木簡』一一一〇〇号 SK八二〇出土

・ 東三門 額田 林 神 北門 日下部 北府 服□  
各務 漆部 秦 縣 大伴 (結カ)

・ 合十人 五月九日食司日下部太万呂状 一八八・二三・二〇二一

067『平城宮木簡』一一一〇二号 SK八二〇出土

・ 東三門 額田 □□ 丹比□□  
茨田 錦部 (部カ)  
(二二六)・(二七)・三〇一九

068『平城宮木簡』一一一三三号 SK八二〇出土

・ 東一敢 二 額田 □□ (三カ)  
合□□ (七カ)  
(一一〇)・三三・三〇一九

069『平城宮木簡』二二七六二号 SD三一五五出土

・ □ 額田部男龍

・ 額田部男龍

(一三〇)・二二・一〇〇八一

070『平城宮木簡』三三三六二号 SD四九五二出土

・ □ 松成舍人從八位上額田部嶋国

・ 十月廿三日□□息主

(一四五)・二九・二〇一九

071『平城宮木簡』三三三〇八号 SD三四一〇・SD一二五〇出土

阿倍枚万呂八

秦已知万呂八

秦□万呂八 (諸カ)

□□八 (津カ)

□□八 (更カ)

□□八 (津カ)

近衛

額田乙勝八

□□八

山口廣濱八

水取継成八

茨田弥継八

(三三四)・(五八)・二〇一九

072『平城宮木簡』三三三二九号 SD三四一〇・SD一二五〇出土

火頭若倭部足嶋

(取カ)

・ 葛木生 丈部嶋足 衛士 額田部小国

・ 衛 □部嶋□

衛 宅部□万呂

・ 津守生火頭中臣廣成

生部□人 (將カ)

石部宇人

一二四・三五・三〇二一

- 073 『平城宮木簡』四―四四一三号 SD 四一〇〇出土  
 (天初位下額カ)  
 □□□□□□  
 ○九一
- 074 『平城宮木簡』四―四四八一号 SD 四一〇〇出土  
 □□位子額田 (二七二)・(五九)・六〇八一  
 \*式部省移の横材木簡に多数の人名とともに見える
- 075 『平城宮木簡』四―四四八九号 SD 四一〇〇出土  
 (初カ) (田カ)  
 □□位下額□  
 ○九一
- 076 『平城宮木簡』四―四四九〇号 SD 四一〇〇出土  
 (已上カ)  
 額田部国万呂□□□  
 ○九一
- 077 『平城宮木簡』四―四四九一号 SD 四一〇〇出土  
 □額田□□  
 ○九一
- 078 『平城宮木簡』四―四四九二号 SD 四一〇〇出土  
 (万呂カ)  
 □□□□□□「初位額田白麻呂」  
 ○九一
- 079 『平城宮木簡』四―五三七五号 SD 四一〇〇出土  
 (額田カ)  
 □□□  
 ○九一
- 080 『平城宮木簡』四―四五〇六号 SD 四一〇〇出土  
 (額カ)  
 □田部家万呂  
 ○九一
- 081 『平城宮木簡』五―七四四九号 SD 四一〇〇出土  
 額田部小廣 五十  
 ○九一
- 082 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(十) 五頁  
 ・額田部御□ 額田部□□  
 □□□□  
 ○一九
- 083 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(十三) 六頁 SD 九〇九二出土  
 各田ア林  
 □  
 ○九一
- 084 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(十八) 一四頁 SD 三七一五出土  
 ・□□□□ (山階カ) 豊人  
 □□□□□□マ万呂 合三人受廣  
 (省カ) □□□□  
 ・□□十三日史生額田□長三升 (月カ) (三三三)・(二二)・三〇八一
- 085 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(十九) 二三頁 SD 二七〇〇出土  
 □□初位下額田部□□ (九七)・(八)・三〇八一
- 086 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(十九) 一四頁 SD 二七〇〇出土  
 ・召勝烈斯 (額田マ諸羽) (公嵯城五月) 尾塞古万呂  
 ・八歳十月七日宇治 一六〇・(二八)・七〇八一

087 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(十九) 三〇頁 SD二七〇〇  
位下額田部 〇九一

088 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十二) 一三頁 SD五一〇〇出土

・北門 安宿 紀伊 合四人  
額田 檜前

・三門 尾張 鴨田 合四人  
川上 大私 (一三三)・一五・三〇一九

089 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十四) 一三頁 SD五三〇〇出土

・二門 川合 額田部 額田 高 白髪部 右六人常食給申

八月廿一日 (二六八)・三一・三〇一九

090 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十四) 一三頁 SD五三〇〇出土

・□門 川合 額田 額田部 三宅 大伴 出庭  
白鳥 安刀 長谷部 下乙兄 大藏

・右十一人常食欲 一〇九・三四・三〇一一

091 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十四) 一四頁 SD五三〇〇出土

・山口 額田 額田部 大伴 下 出庭 阿斗

・□ 合十四人 受食一斗四升 (二七九)・一五・四〇一九

092 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十九) 一五頁 SD五三〇〇出土

・二門 川合 下 大伴 阿刀 間人  
額田 三宅 額田部 白鳥

・長谷部 并十人 (一九七)・(二七)・四〇一一

093 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十九) 一五頁 SD五三〇〇出土

・二門常食給 額田 白鳥 額田部  
川合 下 三宅

・長谷部 阿刀 右九人 一八三・一八・五〇一一  
大伴

094 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十九) 一五頁 SD五三〇〇出土

・二門 川合 白鳥 三宅 (額力)  
額田 阿刀 大伴 □□□□  
(長谷力)

・下 并九人 (二〇六)・(三三)・三〇八一

095 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十九) 一五頁 SD五三〇〇出土

・二門 □□□□□□  
(額田力)

・□□ 并九人 (一四二)・一九・三〇一九

096 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十九) 一五頁 SD五三〇〇出土

・二門 雪 (圖力)  
下毛野 書師

・鳥取 石作 下番 □田 (額力)  
佐伯 大伴 □ (一四〇・二七・二〇一一)

- 097 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(二十九) 一六頁 S D五三〇〇出土  
・二門 川合 額田  
・今依□食□  
(九五)・二四・三 〇一九
- 098 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(二十九) 一七頁 S D五三〇〇出土  
(門カ) □□ 大伴 □□ 額田 下 □□ (画師カ)  
(二八三)・(八)・三 〇八一
- 099 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(二十九) 二〇頁 S D五三〇〇出土  
・□ 丈部大足八合  
各田根万呂八合  
日下部廣道七□  
(天平八年カ) □□□□  
(六九)・(二二)・二 〇八一
- 100 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(三十) 一八頁 S D五三〇〇出土  
(位額カ) 七□□田部□□  
〇九一
- 101 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(三十) 二五頁 S D五三〇〇出土  
(額田臣) □□  
〇九一
- 102 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(三十) 二五頁 S D五三〇〇出土  
額田 □□  
〇九一
- 103 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(三十) 二五頁 S D五三〇〇出土  
額田  
〇九一
- 104 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(三十) 二五頁 S D五三〇〇出土  
額田部  
〇九一
- 105 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(三十) 二五頁 S D五三〇〇出土  
(額カ) □□ 田部  
〇九一
- 106 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(三十一) 一七頁 S D五一〇〇出土  
・ □□ 額田大川道 (部カ) 国  
・ 嶋縣廣国從八无位国 □  
一四八・一五・五 〇一一
- 107 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(三十一) 一〇頁 S D四七五〇出土  
・ 佐保解 進生薑式拾根  
・ 額田兄君 和銅八年八月十一日付川瀬造麻呂  
(三四八)・(二八)・三 〇八一
- 108 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(三十一) 一〇頁 S D四七五〇出土  
・ 木上進 供養分米六斗  
・ 各田部逆 七月四日秦廣嶋 甥万呂  
一五二・二一・三 〇一一
- 109 『平城宮発掘調査出土土簡概報』(三十一) 一〇頁 S D四七五〇出土  
・ 木上進糯米四斛 各田部逆  
・ 十二月廿一日忍海安麻呂  
二〇八・二九・五 〇一一

- 110 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十七) 一七頁 S D 四七五〇出土  
各田直持<sup>〔末呂カ〕</sup> 一〇・一九・一〇五

- 111 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十八) 一九頁 S D 四七五〇出土  
資人各田部連 〇九一

#### 4 額田寺および関連地名

- 112 『聖徳太子伝私記』下 太子御建立の四六寺

同国平群郡額(田)部郷

熊凝寺額田寺今額安寺也

今大安寺之本寺也

- 113 『日本高僧伝要文抄』第三延暦僧録第五守真居士(藤原魚名)伝

：於奈羅東山河内山寺常行印仏以為恒務。又於奈羅城西山造万葉寺。又於額田寺年例安居行道。：

- 114 『続日本紀』宝字元年七月庚戌条

：又問佐伯古比奈、歎云、賀茂角足請高麗福信・奈貴王・坂上苅田麻呂・巨勢苗麻呂・牡鹿嶋足、於額田部宅飲酒。其意者為令此等人莫<sup>レ</sup>發逆之期也。又角足与逆賊謀、造田村宮、指授入道。：

#### 5 畿外の額田・額田部氏の分布

##### 尾張国

- 115 『平安遺文』九七号嘉祥三年三月二十二日尾張国符案・日下大目額田首(使)

- 116 『大日本古文書』一六二三 天平六年度尾張国正税帳・海部郡部末尾主帳外大初位上勲十二等額田部(病)

##### 参河国

- 117 『大同類聚方』卷七十五(052に同じ)(参考)

額田薬。三河国額田郡額田部連之方。知安連病大便下日久不止時々服痛血下者。

##### 武蔵国

- 118 『日本書紀』神功四十七年四月条分註

千熊長彦者、分明不知其姓人。一云、武蔵国人、今は額田部槻本首之始祖也。

##### 安房国

- 119 『平城宮木簡』一三三八・三三九号

上総国朝夷郡健田郷戸主額田部小君戸口矢作部林調鯉六斤<sup>〔條〕</sup> 四〇四・三三・四〇五一  
天平十七年十月

朝夷郡健田郷戸主額田部小君戸口矢作部林調鯉六斤<sup>卅四條</sup>  
天平十七年十月

三三二・二八・三〇二

##### 上総国

- 120 『正倉院宝物銘文集成』

金光明寺封上総国周准郡額部郷戸主額田部千万呂細布調老端

長四丈二尺 専当 国司大目正六位上勲八等實秦惠師磨 宝龜八年十月  
広二尺四寸 郡司大領外從七位上日下部使主山主

121 『平安遺文』二四四〇号 上総国能勢村今富名坪付案  
検田使書生大判官代額田（在判）

常陸国

122 『大日本古文書』十四・二八四 天平宝字三年六月二十九日作金堂所解  
逃亡仕丁…四人逃亡（並常陸国、生部真切石、額田部小龍、土師広万呂、  
占部大敷

近江国

123 天台座主記

第十七世権僧都喜慶（三昧座主）。治山一年。近江国浅井郡人、額田氏。  
師主相応和尚、長意延昌等弟子。康保二年（乙丑）二月十五日宣命（年  
七十七、暦六十二）、同三年（丙寅）七月十七日入滅（七十八）。

美濃国

124 『国造本紀』（026に同じ）

額田国造。志賀高穴穂朝御世、和邇臣祖彦訓服命孫大直侶宇命定賜国造。

125 『大日本古文書』一・一九・一五・二二 大宝二年御野国味蜂間郡春部  
里戸籍

上政戸都布江安倍の戸口

戸主母額田部刀良売（年六十二、次女）

中政戸春部鳥の戸口

戸主妻額田部枚夫売（年五十六、正女）

下政戸石部宮麻呂の戸口

寄人額田部支奴売（年卅五、正女）

126 『大日本古文書』一・二九 大宝二年御野国本簀郡栗栖太里戸籍  
下政戸刑部書の戸口

寄人額田部忍勝（年卅二、正丁）、嫡子小比知（年二、緑児）、忍勝甥  
物部広世（年卅九、一支廢、廢疾）、寄人物部事比売（年六十、正女）、  
児物部加須弥売（年五、小女）、忍勝妹大海売（年五十、正女）、次佐々  
売（年卅四、正女）、次姉売（年廿八、正女）、大海売児各田部麻墨売  
（年十七、少女）、次意止売（年十五、小女）、次赤売（年十四、小女）

127 『大日本古文書』一の四八大宝二年御野国各務郡中里戸籍

下政戸神直族安麻呂の戸口

寄人額田部在間（年十八、少丁）

上野国

128 『正倉院宝物銘文集』

上野国緑野郡小野郷戸主額田部君馬稻調布衣端 長四丈二尺  
広二尺四寸

若狭国

129 『平城宮木簡』二・一九五三号

・ □ □ 里 戸主額田部方見戸  
額田部羊御調塩三斗

・ 天平十八年九月□日

越前国

130 『平城宮発掘調査出土木簡概報』（二二）三四頁・（二五）三〇頁  
（今立郡中山郷）

・ 中津里右大殿御物俵

・ 一斛額田部 □ □ 手

一七七・一六・四〇五一

131 『大日本古文書』五―五四五 天平神護二年九月十日越前国足羽郡  
司解

足羽郡司解 申伏并百姓□

合開田參町□□□□□□尺、深一尺已下一尺五寸已上

右、野田郷戸主額田国依申云、以去天平十六年□堀開如件、後以同年、  
東大寺田使為寺家田、始国依之溝口更益広□□□□□□宝五年、校田使  
国史生次田□□□□□□天平宝字五年、班田使国医師城上石村收授国依  
口分、從□□以来、同溝用之、自今以後、奉上寺家、更不受用、伏并已畢  
者、仍具注狀□ (下略)

#### 加賀国

132 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二二)三四頁(石川郡井手郷)

・越前国加賀郡井出郷戸主各田部老麻呂

・戸同真山小豆五斗

一七五・二三・五 〇三三

#### 但馬国

133 宮内墨田遺跡出土木簡『木簡研究』二二、一九九九年

・□□里□□□□□鳥戸□□田部□□

女□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□  
(堀カ)

・冊代□□午年分直稻八束度与此矣□得人  
同里神マ廣嶋 若田□□者衣女分進上入□ 天平勝宝四年

(給カ)

〓十月九日

鳥取マ□□万呂  
知忍海マ馬男  
鳥取マ公手 直受鳥取マ衣女  
□□□□□□□□□□

四七四・五〇・六 〇一一

#### 出雲国

134 岡田山一号墳出土大刀銘(034に同じ)……意字郡か

額田部臣□□□□□□大利  
(案カ)

135 『大日本古文書』一―六〇三 天平六年度出雲国計会帳  
(天平六年)四月

一八日進上匠丁三上部羊等參人逃亡替事

右、差秋鹿郡人額田部首真昨充部領使進上

136 『大日本古文書』二―二〇六 天平十一年出雲国大稅賑給歷名帳

出雲郡漆沼郷深江里……寡戸主海部首目列口額田部伊毛女(年七十九)

137 『大日本古文書』二―三二一 天平十一年出雲国大稅賑給歷名帳

出雲郡杵築郷因佐里……戸主額田部堅石口額田部忍尾(年六十七)

138 『大日本古文書』二―三二四 天平十一年出雲国大稅賑給歷名帳

出雲郡杵築郷……戸主額田部依馬口額田部手嶋売(年十五)


139 『出雲国風土記』大原郡条

新造院一所、在屋裏郷中、郡家正北一十一里一百廿步、建立三層塔也  
有僧一軀。前少領額田部臣押島之所造(今少領伊去美之從父兄也)。

140 『出雲国風土記』大原郡条末尾の署名

少領外從八位上額田部臣



- 141 『大日本古文書』一一五八九 天平六年度出雲国計会帳
- (天平一六年五月)
- 十九日移盜人額田部羊事〈部下大原郡屋裏郷賀太里戸主額田部宇麻戸
- 口〇
- ### 石見国
- 142 『統日本紀』神護景雲二年二月癸未条
- 石見国美濃郡人額田部蘇提売、寡居年久、節義著聞、兼復積而能散、所  
濟者衆。復其田租終身。
- ### 隱岐国
- 143 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(十六)七
- 隱伎国智夫郡 大井郷各田部  
小足軍布六斤
- 〇三二
- 144 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十四)三八
- 隱伎国智夫郡 宇良郷白浜里額田部小牛  
調海藻六斤
- 一六四・二九・四 〇三二
- ### 播磨国
- 145 『大日本古文書』十五一二五七 造東大寺司解案
- 美養郡横川郷：額田部真嶋(戸主)・広浜(仕丁)
- 146 『平安遺文』金石文編四五一一四五三号兵庫県一乗寺丸瓦銘
- (四五二)
- 額田部武末
- 承安肆年〈歳次甲午〉八月四日
- (四五二)
- 宗元施入奉
- 願田ア
- 武末
- (四五三)
- 僧仁□
- 願主額田部武末
- ### 備前国
- 147 『本朝世紀』天慶四年九月十九日条
- 又備前国馳駛使健兒額田弘則二人參着。其解文云、(下略・藤原純友の与  
党を逮捕)
- ### 備中国
- 148 『平城宮木簡』三一三二九五号
- (哲多カ)
- ・[ ]国[ ]郡各田部里各田部虫
- (三人カ)
- ・ 庸米  
五斗八升
- (一三三)・二二・四 〇五九
- ### 周防国
- 149 『平安遺文』一九九号延喜八年周防国玖珂郡玖珂郷戸籍
- 戸主秦人広本の戸口：額田部牧刀自売、年陸拾陸歳、耆女

長門国

150 『大日本古文書』二一・一三三 天平十年度周防国正税帳

(天平十年十月) 廿一日向京、耽羅島人廿一人、四日食稻卅三束六把、酒六斗七升二合、塩一升六合八勺、部領使、長門国豊浦郡擬大領正八位下額田部直広麻呂、將從一人、合二人、往來八日、食稻五束六把、酒八升、塩三合二勺

151 『続日本紀』天平十二年九月戊申条

：仍差長門国豊浦郡少領外正八位上額田部広麻呂、將精兵冊人、以今月廿一日発渡。：

152 『続日本紀』天平十三年閏三月乙卯条

：外正八位上額田部直広麻呂並外從五位下。

153 『続日本紀』神護景雲元年四月戊申条

長門国豊浦団穀外正七位上額田部直塞守献錢百万・稻一万束。授外從五位上、任豊浦郡大領。

154 長登銅山跡出土木簡『木簡研究』一九

・家原殿廿四斤枚一

・額田部龍万呂四月功

上束

一四二・二六・七 ○三二

155 長登銅山跡出土木簡『木簡研究』一九

・額田部廣□十月

・官

(二三〇)・三三・六 ○三九

156 長登銅山跡出土木簡『木簡研究』一九

・家原殿冊

・額田部□□

(七九)・三九・七 ○三九

157 長登銅山跡出土木簡『木簡研究』一九

凡海部□□□ 黑毛草馬口額田マ赤人 日置部廣足驪□□

・銅駄馬丁

大神マ德磨 赤毛草馬口額田マ石□ 矢田マ□□身黑毛

矢田部繩麻呂 鹿毛草馬口額田マ少人 矢田マ少縫壳驪草

安曇マ赤人 額田マ□麻呂赤毛草馬口日置□□

草馬日置□□□ 驪草馬□□□

秦人マ足国□□□ 黑毛草馬□□□

馬口若桜部□麻呂□□□□□ 嶋青毛草馬□□□

〔大カ〕

□員十駄十□領□□ 大野□

天平二年壬午廿一日

九〇三・七〇・八 ○二一

讃岐国

158 『平安遺文』四三七号寛弘元年讃岐国大内郡入野郷

戸主額田部並山の戸口

額田部並雄、年漆拾歳、老丁

額田部安繼、年肆拾歳、正丁

額田部村主、年参拾歳、正丁

(中略)

額田部山道女、年陸拾歳、老女

額田部豊女、年肆拾歳、丁女

額田部吉女、年参拾歳、中女

額田部乙町女、年参拾歳

戸主讃岐豊岑の戸口

額田部歩丸、年肆拾歳、正丁

額田部藤雄、年参拾歳

戸主中臣当基の戸口

額田部茂丸、年肆拾歳、正丁

戸主中臣含茂の戸口

額田部筆、年参拾歳、中女

戸主凡乙永の戸口

額田部田永、年漆拾歳、正丁

額田部元永、年伍拾歳、正丁

額田部虫永、年肆拾歳、正丁

戸主丸部誦師丸の戸口

額田部安女、年肆拾歳、丁女

# 大宰府

159 『平安遺文』三六五号長徳二年七月二十五日大宰府左郭勘申状…日下

検郭使額田（在判）

160 『大日本古文書』一一・一〇一・一〇九・一一八・一二二・一三七・一

四〇 大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍

戸主大家部猪手の戸口

婦額田部平太売、年式拾漆歳、丁妻、忍鳥（猪手男）妻

某戸の戸口

額田部伊麻□□、年陸拾参歳、廢疾、寄口

戸主卜部惠筆比の戸口

妻額田部赤売、年伍拾歳、丁妻

戸主卜部志都麻呂の戸口

弟卜部伊智麻呂、年参拾漆歳、正丁

妻額田部泥志売、年参拾式歳、丁妻

戸主己西部直酒手の戸口

中臣部智泥、年伍拾玖歳、殘疾、寄口

妻額田部赤売、年肆拾漆歳、丁妻

戸主物部牧夫の戸口

婦額田部阿久多売、年式拾式歳、丁妻

婦妾卜部大手売、年拾式歳、小女

上件二口、神山（牧夫の男）妻妾

161 『大日本古文書』十四・一二七〇 天平宝字三年八月五日筑前国政所牒

…日下

史生従八位上額田部連君麻呂

# 豊後国

162 『大日本古文書』一一・一二六・一二七 大宝二年豊後国戸籍

戸主山部牛の戸口

額田部多流美売、年伍拾陸歳、丁女、寄口

某戸の戸口

女額田部直阿流加売、年捌歳、小女

# 肥後国

163 『大日本古文書』一二五・一四五 丹裏古文書

額田部真嶋（年卅七、肥後国宇土郡大宅郷戸主額田部君得万呂戸口）

天平勝宝二年四月五日

6 額田・額田部関連地名（平＝平安遺文の号数、\*は条里の里名）

山城国

愛宕郡額田里\*〔平一八〇二〕

相楽郡額田村〔平一〇八三〕

大和国

平群郡額田郷

山辺郡額田邑

河内国

高安郡三条額田\*〔平四九〇四〕

河内郡額田郷

伊勢国

桑名郡額田郷、額田神社〔延喜神名帳〕

朝明郡額田郷

参河国

額田郡額田郷

美濃国

池田郡額田郷

上総国

周准郡額田郷

上野国

甘楽郡額田（部）郷

越前国

足羽郡額田郷

加賀国

江沼郡額田郷

備中国

哲多郡額田（部）郷

備後国

三谿郡額田郷

筑前国

早良郡額田郷・額田駅

（高知大学人文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）  
（一九九九年八月二六日 審査終了受理）

---

## **A Study of the Nukatabe Clan: the History of the Local Elites in the Kinai Region**

**MORI Kimiyuki**

The paper discusses the history of the Nukatabe clan which is related to the Nukata-dera temple on the map. The clan was based on the Nukatabe hills depicted on the map since the fifth century. They began to serve the Yamato authority with a horse-raising business in the sixth century. The clan also took care of the Nukatabe princess and was actively involved the Yamato government after she took the throne as Empress Suiko. Notably, the clan maintained their position as the lord in their homeland while working for the central government.

Under the ritsuryo legislation, the Nukatabe clan continued to serve the central government. At the same time, the clan acted as provincial lord in the Heguri county in the Yamato region. The Nukata-dera temple and its property were vital to the clan as they provided not only spiritual but also financial support for the clan.

This two-faced character of the clan's business was common among the clans based in the Kinai region. They worked for the central government as administrators, while maintaining their status as provincial governors in their homelands.